
仮面ライダーディケイド Re:imagination War

ハルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド Re:imagination War

【Nコード】

N3855X

【作者名】

ハルル

【あらすじ】

世界の破壊者、仮面ライダーディケイド。
今度の旅で彼の訪れた世界は、星空が美しく、宇宙開発の盛んな町だった。

しかしこの世界には、仮面ライダーへの復讐を誓う組織が水面下で蠢いていたのだった…

戦いの最中、力を奪われるディケイド。

組織に利用され、また、自ら改造人間になった青年達。

そして、危機を覚えた紅渡の力添えで徴集されたライダー達…
彼らは果たして、“この世界”に蔓延る悪の組織を滅ぼすことが出来るのか。

失われたものを取り返し、平和を取り戻すことは可能なのか？

Episode 1：始まり（前書き）

タジャドル「この作品は、主に裏切りや味方VS味方が多発してあります」

ガタキリバ「なので、『ちょっと覚悟しろ』とか…」

ラトラーター「『。。。ウザイ』だの…」

サゴーズ「『。。。には（ 自小説のキャラ名など）の□□（攻撃名など）を受けてこい』だったり…」

シャウタ「そういった暴言はコメント欄に書かないようにお願いします。俺が病みます」

タトバ「Σシャウタが病むの！？」

ブラカワニ「とにかく、パパン達との約束だよ！」

プトティラ「ところで、プト達の出番は？○○」

タジャドル「…レポート纏めて来る」

ガタキリバ「…あ、俺、そろそろ見たいアニメの時間だ…」

ラトラーター「俺、トライドと風呂入るわ…」

サゴーズ「シャウタ、皿洗い手伝うよ」

シャウタ「じゃあ、俺、夕飯作るな…」

タトバ「俺は宿題やってきます」

ブラカワニ「パパンはすることないから、適当に過ごしてるな」

プロテイヤ「ふえ...?」

Episode 1：始まり

某世界、某所。

そこは有名な樹海で、訪れた人間は消して出られないと言う噂があった。

現にここに来る自殺志願者は多く、捜索隊を出してもその捜索隊の中の一部ですら出てこられないことから…【魔境樹海】と、ネットでは噂になっている。

そんな曰く付きの場所…

——ここに、一人の男が訪れていた。

木々の間にちらちらと見える白骨化した死体。白骨化する前の死体の養分を吸って成長したが如く、立派に構える大木達。

常人ならば、恐れを抱くだろう。それほどまでに恐ろしかった。だが、男は平然と歩き続ける。恐れなど存在しないかのように…

そして…

「やっと見つけたぞ。ここから、奴らの強い怨念が感じられる」

目の前に現れたのは、何も変わらない樹海の景色とは違い、木々が朽ち果てた空間だった。

普通ならば朽ちた木の上に、また新しい芽が芽吹く…

しかし、そこは何故か新たな命が誕生することなく、地面に還るでもなく、ただただ腐った樹木が転がるのみだった。

ニヤリ、と男は笑うと、両腕を大きく広げる。

足元には光の紋様のようなものが瞬時に描かれ、そこから常人が見たなら寒気を感じるほどの、憎悪や怨念といったオーラが出現…

男は両腕を広げたまま、目をギリリと輝かせる。

「仮面ライダーに倒され、恨みを抱き、後悔や無念を抱いて消えた怪人達よ…目覚めろ」

ゴゴゴ、と地響きが起こる。

地鳴りの発信源は、腐った樹木の支配する空間から…

男は笑みを深めると、一層大きい声で言い放った。

「復活し、そして、仮面ライダーに復讐しろ…それが貴様らが輪廻転生の理を無視して蘇生される、【意味】！」

地響きは次第に酷くなり、やがて、腐敗した空間の地が裂ける。

そこから、禍々しい怨霊が飛び出し…中には開いた穴から這い出てくるものもいた。

復活される異形。

その光景を満足げに見ながら、男は、告げていた。

「——お前達を復活させた俺は、神も同然。…神の名の元に、復讐を以って立ち上げられ……シヨツカーの遺物達よ！！」

『『『グオオオオオオオオオオ！』』』

くくく

とある世界。

自転車に乗り、前方に取り付けられた籠に鞆を乗せた若い青年が、下り坂を降りていた。

彼の日常は、朝から夕方まで大学に通い、家に帰る途中の喫茶店【TACHIBANA】でコーヒーを飲みながらその日の授業のレポートを纏めた後、家に帰る。

今通っている大学は二年目。四年制のため、この生活はあと二年間続くだろう。

何事もなければ、不変の生活。
だが…

「——あ、あれ？」

大学に行く途中で、最寄りの喫茶店が【光写真館】というものに変わっていることに気付く。

道を間違えたか、と思うが、写真館以外はいつもの光景。

それに大学への通学路の途中にあるので、いつも通っている彼にとつては、ここに【TACHIBANA】がなければおかしいのだ。
どうして…

そう思っていると、写真館の中から若い男二人と女が出てきた。

「どうやら、次の世界に来たようだな」

「そうみたいだな」

「それにしても、…これまた凄い格好ですね」

長身の男は、時代遅れの菱形の帽子に学ランに合わせた黒のケープ…
いかにも“コスプレ”としか言えない、個性的なファッションだ。
今時こんな格好をする男がどこにいる？そんなことを思いながらも、
彼は他の二人に目を向ける。

もう一人の男は、赤いパーカーの中に白のシャツを着ており、こちらはまだ若者らしいと言える格好だ。

女のほうは、青と白のチェックの上着に黄色のミニスカート、オレ
ンジのハイソックスという若さあふれる色合いの服を着ている。

二人が普通だからこそ、…長身の男の特異性が際立つ。

「あ、あのう」

彼は自転車から降り、困り顔で三人組に訊ねる。

少なくともこの中から出てきたということは、この写真館に訪れた
客か…そこを経営している人達なのだろう。

実際それは間違っていない。

少し訂正するなら、——男二人はただの居候…というところなのだ
が。

「…ここって、喫茶店じゃありませんでした？」

「あー、うん、なんて言ったらいいのかな…俺達にとっては、よく
あることっていうか…」

「あなたにとっては不思議と言いますか…」

「何、茶を濁したような顔をしてるんだお前は。堂々と答えろ。」

『暫くの間、ここは写真館だ』…これで満足か？』

複雑そうな顔をして、互いを見る男と女。

だが、奇抜ファッションの男はあっけらかんと答える。

詰め寄られて若干引く彼であったが、ケープにつけられたネームに

【星ノ宮天海大学 宇宙科二年 門矢士】と書いてあったのを見て、「まさか」と再び訊ねた。

「まさか、あなた、…うちの大学の学生…ですか？」

「うん？…ああ、どうやらそうらしいな」

「だったら急がないと、講義、始まりますよ」

「そういうお前こそ、その自転車で大丈夫なのか？」

「——そうだった！それじゃあ、大学で——」

他人のことに気を取られ手、自分のことを忘れていた彼は、携帯で時間を確認する。

現在、8時42分…

最初の講義は9時ちょうどから開始される為、急がないと遅刻だ。未だ写真館の前で突っ立っている男…門矢士にそう言い残すと、彼は自転車を急いで走らせていた。

一台の自転車に乗った青年が、次第に見えなくなる。

士は「やれやれ」と呟きながら、バイクを取りに行く。

それを見た女性…光夏海は、玄関においてあったヘルメットを持つてくると、自分も乗せるように言う。

「とりあえず、この大学に行けば分かるか」

「士君、私も連れて行ってください。大学のキャンパス生活って、

懂れていたんですよ」

「おっ！俺も、俺も！！」

「お前らな…遊びじゃないんだぞ。とりあえず、この世界がどんな仮面ライダーの世界か知るためにも、この……星ノ宮…天海大学？」

「——星ノ宮天海大学…宇宙科・深海科・技術科という、他の大学にはない特殊な特色が自慢の大学だそうだよ」

写真館の横から、ひょっこりと一人の若い男が出てくる。

ベージュのジャケットに、ダークグレーのシャツを中に着用しており、右手にはシアンとブラックを基調とした銃が握られている。

海東大樹。

彼もまた、“この世界”の住人ではなく…土達同様に、世界を巡る旅人。

士はうんざりと言いたげな顔をしながら、海東に告げた。

「お前か、海東。どうせこの世界でも、“お宝”を狙っているんだろっ？」

「ああ。——と言っても、この僕ですらこの世界がどういう世界か…未だに分かっていない。分かっているのは、君がこれから行く大学のことだけだよ」

「それで？どんな大学なんだ」

「さっきも言った、3つの学科のある大学だよ。特に宇宙科と深海科は、あの大学の中でもかなり力を入れているようだからね」

そう言いながら、海東は星ノ宮天海大学について簡潔に説明を始める。

まず、宇宙科は宇宙飛行士や宇宙に関係した仕事を目指す若者達を通い、大学内に宇宙飛行訓練用の施設や、プラネタリウム、更に大学から離れたところに、【星ノ宮ロケット発射場】と呼ばれるものもある。

宇宙開発や新たな星の探索など、宇宙に関係することに携わっている為、卒業後はそのまま宇宙飛行士となってその仕事に就いたりする。

深海科とは、深海に住む生物の生態系観察や、失われた海底古代文明の探索、今もなお謎の多い深海の調査・研究を行っている。

最後に技術科は、技術関係の仕事をしたい人間の通う学科で、宇宙科・深海科とも密接な繋がりがある。

というのも、現在使われているロケットや訓練施設、深海探査用機械などは総てこの学科の生徒や教授が作ったもので…

特に“仁 敬一郎”博士は宇宙開発・深海探索どちらにおいても有名な権威であり、大学内にある【仁深海研究所】の所長も任されているほど。

一度の説明に、ユウスケは頭を捻り…夏海は細かいことは分からないが、宇宙の神秘や海底の謎という部分にロマンを感じている。対して士は、「大体分かった」と短く返すだけだった。

海東としてはもう少し面白い反応を返してもらいたかったのか、つまらなそうにしながらも、士達に言う。

「なんだい、ナツメロンぐらいじゃないか、期待していた反応を返してくれたのは」

「って言われてもさあ…何か難しいことばかりで、分かりにくいんだよ。とりあえず、どんなライダーのいる世界なんだ？」

「さあ。でも、さっき言った仁教授は、宇宙科の教授や技術科の人達との共同で、惑星開発用の特殊システムを作ったそうだけど…僕の求めているお宝とは、ちよつと違う感じなんだよね」

「…惑星開発用システム？」

「士は宇宙科の“役割”を振られたんだろう？だったら、自分で聞いてみたらどうなんだい」

アデュー、と言うように颯爽と立ち去っていく海東。

まるで風のように自由で、気ままな男。

やれやれ、と思いながらも、士は愛車・マシンディケイダーに跨って大学に向かおうとする。

「とりあえず、行ってみるか。さっきの奴に話を聞ければ、何か分かるかもしれないからな」

「そうですね。早速、行ってみましょう！」

「ああ、ちよつと待てよ士、ええつと……トライチェイサーどこに置いたっけ……」

~~~~~

併走するマシンディケイダーと、トライチェイサー2000。

さっきの青年が通っていった道をまっすぐ行くと、北東の方角にロケット発射場とロケットが見える。

恐らくあれが、星ノ宮ロケット発射場なのだろう。

対して、北西の方角に見えたのは半球型のドーム。

白い壁造りの建物も見え、海に面した場所には立派な研究室が構えている。

「あそこが、星ノ宮天海大学だな」

「名前からしても素敵ですね。なんか、こう、ロマンチックとい  
うか」

「ああ、女の子はそういうの好きだもんね。夏海ちゃん」

士の背に手をかけたまま、乙女の世界に浸る夏海。

ユウスケも、彼女の気持ちは分かるのか、ヘルメットの奥で微笑み  
ながら相槌を打つ…

しかし。

士はロマンだのなんだのには興味が無いのか、溜息混じりに呟いて  
いた。

「ロマン？マロンの間違いじゃないのか…ああ、お前はマロンじゃ  
なくてミカンだったな」

「つ・か・さ・く・ん」

「…はッ、」

「デリカシーがなさすぎますー——光家秘伝【笑いのツボ】！！」

左手は士の腰に手を回したまま、右手の親指を構え、ツボを突く夏  
海…

首筋にそれを受けた士は、あっはは、と大笑いしながらハンドルを  
切る。

勿論、笑いながらであるためか、マシンディケイダーの動きは右に  
左にとメチャクチャになっってしまう。

ユウスケは慌てて減速して直撃を免れたが、未だにフラフラと動く  
士と夏海は大変だろう。

「うわああっ！？危なッ！」

「きゃああ！士君、ちゃんとまっすぐ走ってください！？」

「だはは…おまつ、あはは…だったら、……笑わせるなあはははは

「はは！」

結果。

——暫く暴走を続けていたマシンディケイダーは、電柱にぶつかってようやく止まった。

流石に、ディヴァインオレという特殊な鉱物を使っているお陰か、簡単には壊れない…むしろ電柱の方が、派手に折れていた。

見つかつては面倒だと思ったのか、土達は慌ててその場から逃走…色々あって、青年とは1時間近く遅れて星ノ宮天海大学に到着していた。

大学内にある駐車場にバイクを止めると、土達は、まずは宇宙科を探しにキャンパス内を歩く。

「さて、宇宙科は…どこにあるんだ」

「見てください！あそこ、プラネタリウムがあるんですって！！」

「うお、広いな！」

真剣に探す土の横で、夏海とユウスケは大はしゃぎしている。

こいつらに緊張感なんてないのか。

そう思っていた土であったが、顔を合わせる学生が奇異な目で土を眺めており、彼は眉を吊り上げる。

その世界ごとでの土の格好は、どんな力が働いているのかは知らないが、他人から見ても違和感を覚えさせない仕様のはずだった…

現に“ファイズの世界”では、高校にいるファイズを探す為の役割として“学生”となっていたが、その学校指定のブレザーではなく黒の学ランだったことは、土の中でも忘れない記憶。そうしていると…

青のジャケットを着た若い男が、話しかけてきた。

「…そのあんた、ほら、背の高いあんただよ」  
「何だ？」

「何かの公開処刑か？そのコスプレは…この大学は、私服通学だぞ」  
遂には、公開処刑に扱われ始めた土。

一体何がどうなっている。  
そんなことを思いながらも、着て来てしまったものはしょうがないので、堂々と言い放つ。

「明日からちゃんと私服で行くなら、文句はないだろ。それに、全部が全部私服つてわけでもないだろ」

「まあ、たまにスーツを着用しなくちゃいけないこともあるが…それでも、学生服つて」

「ケイスケ！ごめん、待たせた…あ」

ケイスケ、と呼ばれた青年に声を掛けたのは…

今朝、士達と会った自転車の青年だった。

その顔を見た彼らは声を上げ、ケイスケという青年は眉を寄せながら訊ねる。

「あ！」

「お前は…」

「今朝の、自転車の！」

「…なんだ、カズヤ、こいつらと知り合いだったのか？」

「うん、まあね…。それにしても、結局その格好で来たんですね…」

カズヤと呼ばれた自転車の青年は、どうしていいのか分からないよ

うな顔を浮かべている。  
それもそうだ。

目の前に、明らかに場違いな格好をした男が現れれば、戸惑うのが普通。

士は「俺は学校に恨まれているのか」と心の奥底で悪態をつきつつも、二人に尋ねる。

「お前達、ここの学生なのか」

「はい。…あ、俺は月島カズヤ…あなたと同じ、宇宙科の二年です」

「俺は仁ヶiske…技術科三年だ。お前は？」

「門矢士…通りすがりの大学生だ」

「私は、光夏海です」

「俺は小野寺ユウスケ。ここの学生じゃないけど…興味があつて、見学に」

ある程度自己紹介を終え、ヶiskeはふうんと軽く頷く。

この大学は彼にとっては、庭の一部みたいなものだ。

昔からここに来る機会が多く、研究所の研究員の顔は当然のことながら、大学に通っている人間の顔は覚えている…

しかしこの三人は、顔を見たことがないのだ。

士に関しては、“事情があつて少しばかり入学の遅れた学生”と強引に解釈することもできる。

ユウスケと夏海は…彼の連れか、それとも、ユウスケの言うとおり見学目的か。

いずれにしても不信感極まりないのだが、悪人と言う感じは見受けられず——特に、ユウスケのたまされやすそうな所謂善人顔は——、無理矢理自分を納得させていた。

とにかくここで突っ立っていても仕方ない、と思ったのか…

ケイスケは親指で仁深海研究所のある場所を指差しながら、夏海とユウスケに尋ねる。

「その二人は、見学だっけ？技術科は次の時間の講義がないから案内してやるぜ……最も、一般の見学ルートに限るけどな」

「本当ですか！」

「あつ、ありがとうございます！」

「土は…宇宙科の講義は、A棟の3階にある“天体ホール”で行われるから、一緒に行こうか」

「しょうがない、行つてやるか」

…行つてやるか、つて。

…こいつ、本当にこの学生か？

カズヤとケイスケは互いに顔を見合わせ、そう思っていた。

しかし、宇宙科は次も講義があるせいで、ケイスケ達より悠長にしていられない…

カズヤは土の首根っこを掴み、いそいそとA棟に向かっていく。

「おい」と文句を言いたげな土であったが、引つ張る力はカズヤのほうが強く、されるがままに引き摺られていく。

そんな光景を見送りながら、ケイスケはユウスケと夏海に言う。

「…じゃあ、まずは深海研究所からだな」

「はい！」

「お願いします」

ケイスケに連れられて向かったのは、仁深海研究所。

聞き覚えのある苗字に、首を傾げる夏海であったが、ケイスケは構わず案内を続ける。

この研究所で一般見学のできる場所は、一階の展示ブースのみ。

ここには深海探査用の機械や深海に生息する生物の模型を飾っていたり、これまでに海底から発掘された数世紀前の壺の破片などがシヨークースの中に保管されている。

夏海は不気味な魚と睨めっこしながら、呟く。

「もう少し、可愛いお魚が多いかと思ったのですが…」

「ははっ。海の底は暗いし水圧も高い、だからこそ、目の部分は殆ど退化していたり…その水圧に耐えられる形で進化しているんだ」

「そうなんですか…」

「でも確かに、元は同じ魚でも…住む場所に適応する為に姿を変えたって言われているぐらいなんだから、生き物って不思議だよなあ」

提灯鮫鰐のような魚の模型を見ながら、ユウスケは呟く。

そうそう、とケイスケは近くにあった魚の模型を撫でながら、説明する。

どのような生き物であっても、その土地によって姿を変える。

人も魚も総ての生き物も、必ず辿ってきたのが…自分が自然界で生き残るために行った“進化”。

今この地球上に種を増やしている人類も、知恵を得て力を得て…そうして生きる為に進化してきたからこそ、今の文明を築いている。

「海は…総ての生命の母とも言われている。海があることによって生命は誕生し、そして、総ての生命は海に還る…そう考えると、

ロマンチックじゃないか…って、俺が言えたガラじゃないな」

「凄く素敵ですね」

「でも、ケイスケさん、まるで深海科の学生みたいですね。結構詳しいし」

「まあ…親父が、深海科で教授をやっているからな。仁敬一郎、科学者としても有名だから…名前ぐらいは聞いたことないか？」

仁敬一郎、と聞いて、二人は海東の話を思い出す。

——宇宙開発・深海探索に関する権威で、仁深海研究所の所長をしている——

ということとは、目の前にいる相手は、有名な教授兼科学者の息子ということになる。

それを知ったユウスケと夏海は、声を上げていた。

「ほ、本当ですか!？」

「あ…でも、通りで聞いたことがある苗字だと…」

「まあ…親父はこの所長をしているから、その息子は深海科…と思われがちだけど、親父も実際は海洋学に特化しているわけじゃない。むしろ根っからの科学者だよ」

ケイスケの話だと…

敬一郎は宇宙の無限の可能性と深海に残る多くの謎を解明するべく、科学者を志した。

元々天才だったこともあってか、その頭脳を宇宙や海のために捧げ。この大学が作られた際、理事長から「その技術や愛を、教授として学生達に教えて欲しい」と頼まれ二つ返事で返したほど。

——それほどまでに夢を追い求め、そして、その夢の種を持つ未来の若者達に教えを説いているのだ。

「俺は、宇宙とか深海とか…そういうのは全く考えていなくてさ。

ただ、技術者として親父の手伝いができればいいんだ。あの人は、男手一つで俺を育ててきてくれたから…尚更」

「ケイスケさんは、お父さん想いなんですね」

「夢、かあ…」

「親父は今、宇宙科の教授…そして技術科の研究者や腕のいい学生

と共に、惑星開発用の特殊システムを作っている最中だ。完成まで後一步の所まで来ていて、後は……」

ケイスケが言いかけた、その時だった。

突然、研究所の窓ガラスの一部がバリィン、と派手な音を上げて割れる。

きゃあ！と夏海が悲鳴を上げながら、頭を抱えるように座り込む。ユウスケとケイスケは夏海を守るようにして、割れたガラスの先を見ながら身構えた。

…そこにいたのは、見たこともない機械の異形であつた。

見た目や体系からして、ゴリラに近いのだが…何よりも不気味。

ゴリラの姿をした異形はユウスケとケイスケ、二人を指差しながら静かに訊ねていた。

「お前達のどちらが、仁博士の息子だ？」

「何…？」

「それを知ってどうするんだ！」

「決まっているだろう…息子は博士に協力させる為の人質にし、残りは殺す！」

「それで、どちらも違っていたら？」

ケイスケは眉を寄せながら、ゴリラの異形に問う。

それは頬を軽く人差し指で搔く。恐らく、考えているのだろう。しかし…

彼の意見については【命令されていないこと】と判断したのか、残忍な答えを告げた。

「——その場合は、全員殺す！」

「…なんでそうなるんだよ。それと、何なんだよお前は」

「とりあえず、ケイスケさん…夏海ちゃん、これは逃げたほうがいい！何か……やばい！！」

「ぬぐおおおお！」

ユウスケが危険を察知し、ケイスケと夏海に逃げるよう叫ぶ。

実際に、その勘は当たった。

ゴリラの異形は額から炎を吐き出し、それを見た三人はその場から走って逃げる。

空振りに終わった炎は、床を焦がすのみに終わった…

しかし異形…ファイヤーコングと呼ぶべきそれは、ユウスケ達を執拗に追い続けている。

このままでは、いずれ追いつかれて全員焼き殺される。

ならば、とユウスケはその場に立ち止まり、構えを取る。

少なくとも自分には戦える術がある。そう考えての、行動だった。

「こうなったら…！」

「馬鹿、何で止まって…」

「ケイスケさん！ユウスケなら大丈夫です、それよりも、早く土君を呼んできましょう！！」

「貴様から死にたいのか？いいだろう！」

ファイヤーコングは、ユウスケを標的とみなして跳躍からの火炎放射を浴びせる。

ユウスケ、とケイスケは叫ぶが…

「…変身！」

炎の中から飛び出したのは、赤い装甲を身に纏った“新たな異形”だった。

——仮面ライダー・クウガ——

クウガはジャンプでファイヤーコングに接近すると、そのまま右のストレートを浴びせ、敵を地面に叩き伏せる。

ケイスケが炎の中を見ると、ユウスケはどこにもいない。その代わりに、あの異形が現れている…

まさかとは思うが、あれはユウスケなのか？

どうなっているんだ、と思いながらも、ケイスケは自分達を守るように戦うクウガをぼんやり眺めていた。

一方でファイヤーコングは、殴られた部分を押さえながら、ゆっくり起き上がる。

「ほう…クウガか。人間一人捕まえるだけの退屈な仕事だったけど、これで少しはやり応えがある」

「……仁博士をどうする気なんだ？」

「知れたこと。奴の知識と、S-1システムは我々が役立てる…それが神からの命令だ！」

「そんなこと、させるもんか…！」

相手を見据えるクウガに対し、ファイヤーコングは独特の構えを取る。

そして…

——互いの拳が、激しく、同時にぶつかり合っていた。

To Be Counted…

\*\*\*

次回予告

「やめとけ。改造人間になったら、楽に生きることと死ぬこととで  
きないんだぞ」

「超変身！」

「カマキリには…カマキリを使ったコンボだ！」

Episode 2：混戦、混乱

## Episode 1：始まり（後書き）

先行投稿された第1話。

仮タイトルで【仮面ライダーディケイド Re：imaginat  
ion War】にしてみました。どうでしょう？

一応カテゴリーはNOVEL大戦扱いですが。

NOVEL大戦SUMMERと繋がっている部分も出てきますしね。

1話から結構シリアスっぽいのは、よく考えればディケブラやLo  
stでもやった手法でした。

ので、ギャグになるのかシリアスになっていくのか分からず…

これを投稿するまでに、既に15話目まで完成しています。

そして分かったこと

：リマジ000のクセが意外と抜けないww

今回はあっちより緩めで、次回予告100字分を足して8700と  
か9400とか、とにかくキリのいい数字で終わるようになっ  
てま  
す。

そのせいで、1万超えたのが既に2つほどあるという。

その分、説明とか戦闘描写の方とかに力を入れている今作。  
ない頭捻って頑張りました。

さて、リマジオーズでもやりましたが、言葉遊びコーナーでもやり  
ましょうか。

星ノ宮天海大学↓ネタバレになるので多少伏せますが、星・空・海

に関係する名前をつけたかった。

なので、町名に星ノ宮・大学名に天空×海で天海…という文字を使いました。

後々、空と海の名前のつく町も出てきますが、それは追々。

あと、星と海に拘ったのは大学の特色にも関係がありますね。

喫茶店【TACHI BAN A】↓立花藤兵衛の“立花”を使った喫茶店名。

本当はブランカとか、そんな感じの名前でも良かったんですけどねw  
こっちはあまり捻ってない、むしろド直球です。

月島カズヤ↓星ときたら、月！って感じで決めました。

少なくとも某きらレボアイドルとは関係ないです、むしろ、今気付きました↑

ネタバレになるので言えませんが、カズヤとはある事情で、もう一つ苗字があります。

仁ケイスケ↓ド直球すぎだろお前エエエ！

とりあえず、ほぼ全員に言えることですが、彼は本編で明らかになるまでは、決して「こいつ絶対○○になるんじゃない」という話題は控えてください。絶対にです。

と言いますか、リマジオーズの件もありますし、本当にそうなるかは限らないんですがね↑

仁にしたのは、【仁義】という言葉から。

仁敬一郎教授：ケイスケの親父さんですが、

深海関係の学科を作ったけど、その講師に相応しい人間がない↓  
丁度いいところに、宇宙や深海に力を入れている技術者（兼科学者）  
がいる↓次代の若者に教えを説いたり技術を学ばせたりしたいので

すが

……って感じで、大学の教授（+学内にある深海研究所の所長）になりました。

本来の専門は、技術系です。

だから、深海研究所以外の学科にも色々と顔を出したりしていて、実際は“深海科の教授”という枠に囚われない、オールマイティーな教授さん。

ケイスケはそういう親父の背中を見て育っているので、しかも母親を早くに亡くしているので、父親の手伝いをしたい・父を超えるような発明をしたいという思いがあり、技術科を志したわけです。

技術系はその類のオタの集まりそんな学科と思われがちですが、

まあ実際そうですね…↑

ケイスケはそこまで機械オタクじゃないですけど。

なので、どっかのコムセと〃にしないように。むしろ≠です。

さて問題です。

この世界はどんな世界でしょう？

- 1 ・宇宙関係だから“あのライダー”の世界
- 2 ・深海関係あるなら“あのライダー”の世界だろ
- 3 ・意外と“真”の世界
- 4 ・大穴で、どのライダーの世界でもない
- 5 ・むしろ宇宙オタク・海オタク・機械オタクの世界
- 6 ・超大穴で“フォーゼ”の世界

追記1：最初に登場する昭和ライダーは緑色です

追記2：オース兄弟のこの世界での役割は、日替わりのあらすじです

## Episode 2：混戦、混乱（前書き）

タジャドル「前回までの【DCDRW】、三つの解説だ！」

1つ！

光写真館が“この世界”に紛れ込み、喫茶店【TACHIBANA】消失…

それと同時に、おやっさんの出番も終了だ！

士「大体分かった。爺さんの役割は、勘違いしてやってきた客にコ―ヒーを出すことだな」

ユウスケ「いつもやってないっけ？」

2つ！

士が変な格好で、しかも電柱を壊した！

ちなみに、電柱1本あたりの価格は8mのコンクリート製電柱の場合、約22000円である。

ただしギャレンの話だと、電柱についているもの次第では壊した時の金額が異なる為、下手をすると1000万近くの弁償金額が発生するとか…

士「マシンデイクイダーに傷はない、誰も見ていない、…よしトンズラだ！訴えられても、夏海を差し出せばいい！！」

夏海「なんですか！私を犯罪者にしないでください！！」

そして3つ！

ユウスケ達の元に、ファイヤーコングが現れた！

ただし単細胞で、よく下調べもしていなかったのか、目の前にいる人間が探している相手とは気付いていないぞ!!

ファイヤーコング「うおおお! 仁博士の息子はどっちだ!？」

ケイスケ「こいつ」↑ユウスケ指差しながら

ユウスケ「いや、この人です。こっ見えても男なんですよ」↑夏海指差しながら

夏海「この人です!」↑ケイスケ指差しながら

ファイヤーコング「ええい面倒くさい、全員殺す!」

タジャドル「電柱の破壊者、ディケイド…いくつもの世界を巡り、その瞳は何を見る!」

士「電柱じゃない、世界だ! 世界!」

## Episode 2：混戦、混乱

夏海達が仁海底研究所を訪れていた、同時刻。

士はカズヤの案内で、天体ホールに向かっていた。

中は広い講堂で、宇宙服のサンプルや宇宙船の1/10000模型などがショーケースの中に飾られており、天井には星座が配置されている。

宇宙科の学生の講義だけでなく、研究発表会や宇宙飛行士の体験講話なども行われているようだ…

講義の時間までまだ時間があつたのか、士は暇潰しに“月の石”を見ていた。

「月の石、なあ…ただの石ころとどう違うんだ」

「宇宙科なのに、そんなロマンのないこと言うなよ…それにこれは、<sup>ミクロン</sup>1μの微生物も見れる特殊顕微鏡で調べた結果、地球ではまず見かけない微生物が発見されたいらしいんだ」

ほらそれ、と、ショーケースの横にある小さな写真を指差すカズヤ。そこに映っていたのは、その微生物の拡大写真…

しかし、それで本物の宇宙の石だと言われても信じがたいのが現実<sup>リア</sup>主義者の辛い所。

他に何か面白いものはないのか、と士は周囲を見てみると、

——あるスーツの完成模型を見て、目の色を変える。

バタバタと足音を立てながら走り、「どういうことだ」と士は呟く。

後からゆっくりやってきたカズヤは、「ああ」とあつさりした様子で納得しながら、土に話していた。

「土はS-1の方に興味があるんだね？分からなくもないけど」

「S-1？」

「これは宇宙開発用スーツの構造模型。今、S-1は完成まで後98%のところまで来ている…後は、それを完全なロボットにするかどうかの検討だけ」

S-1と呼ばれたそれは、城に近いシルバーのボディに赤い複眼を持つもの。

しかし、土はそれに見覚えがあつた。

——仮面ライダー・スーパー——

以前ライダー大戦の世界において、自分を倒そうと躍起になって捜索するライダー達の中に、カブトやスカイライダーと組んでいたのを覚えている。

スーパーやスカイライダーだけでなく、いくつかの仮面ライダーは、改造人間と言われている。

元々は人間であつたのに、改造され、機械の体になってしまった人間…

「『完全なロボットにするかどうか』と言っていたが、まさか、ロボットとして運用するか…人体改造を行うかで話し合っているのか？」

「そう、だね。…ロボットは安全性などを考えると一番効率的なんだけど、精密な動きやプログラムにない行動…例えば想定外のハプニングが起こった際、オペレーションルームからの的確な指令が出せない場合にどう動けばいいのかの判断ができないから」

「まあ、そうだろうな」

「…俺も、S-1装着者に志願してみようかな。そうすれば、確実に宇宙に行けるし…」

それを聞いた士は、顔を顰めている。

確かに機械は想定外のトラブルに弱い。しかし、そんな易々と『自分を改造人間にしてください』と言える人間がいるはずもない。

改造人間になると言うことは、ただの人間ではいられなくなると言うこと。

人とは違う力を持ち、機械の体となり、歳も取れない…

それでなまじ中途半端に、人間としての心や感情は持ち合わせている。それに耐え切れる人間などいるのだろうか。

そんな人間がいるとしたら、相当精神力のあるものだけだ。

そして…士が知っている人間で例えるなら、孤独な世界で…誰にも声を聞いても貰えず、存在も認知されない世界で戦っていた“あの男”ぐらいだろう。

「やめとけ。改造人間になったら、楽に生きること死ぬこともできないんだぞ」

「そうかもしれないけど、でも、自分の力が何かの役に立っているのは…素晴らしいことだと思う。それが人類全体の希望に繋がるなら、尚更」

「そのために自分が犠牲になっても？」

「…宇宙に行くことが、俺の…俺達の夢だから、かな」

俺達、という言葉に士は眉を上げた。

複数形と言うことは、あのケイスケと言う奴と宇宙に行きたいという約束をしているのだろうか？

それとも、別の誰かと…？

そう思っていると、空気を察したカズヤのほうから、土に語り始めた。

「——俺、双子の兄がいたんだ。ただ一人の肉親だった…兄が」

「今はどうしているんだ」

「…三年前に、亡くなった。兄はずっと、『宇宙に行つて、月の石を持って帰りたい』『宇宙人と友達になりたい』という具合に、宇宙への夢が強くて…この大学にも、本当なら兄が通うはずだった」

「……」  
「だから俺、あいつの分まで…あいつの夢を叶えないとって思ったんだ。宇宙に行きたがつていた、あいつの分まで……」

遠い目をしながら、カズヤはS-1の模型を眺める。

しかし、その目はS-1ではなく…別の何かを見ているようにも見えた。

土は不器用だ。

だからこそ気の利いたことは言えないし、言おうとも思わない。それがカズヤの決めたことなら文句はない。…だが、それでも『スパー1になる以外にも方法はあるはずだ』という考えは変わらない。

宇宙に行きたいなら、普通に宇宙飛行士を志せばいい。

そう言おうとした土であつたが…天体ホール内に突然、無粋な輩が押しかけていた。

「——クカカ…ははははあ！」

スパン、と扉が切れたかと思えば…

カマキリのように鋭い大鎌を両腕に装着した、機械の怪人が現れる。

更にその背後から、機械化された戦闘員らしき集団も出てきて、ホールにいた学生達や講義の準備をしていた教授は大混乱…

パニックになって騒ぎ出すか、一斉にホールの隅に身を寄せ合って震えているだけ。

だが、士は特に驚いた様子もなく、リーダー格と言えるカマキリ怪人に言い放つ。

「…やはりな。大体見たことがある……お前らは、ドグマの怪人だな」

「貴様、その立ち振る舞い…只者ではないな？」

「ああ只者じゃないぜ。それよりも、ドグマファイターといいお前と言いい、そしてS-1といい……ここは【スーパー1の世界】のようだな」

「そ、それよりも、…一体何をしにここへ!？」

士の後ろから、カズヤが訊ねる。

カマキリの怪人…カマキリガンは、「いいだろう」と言い放つと…この行動にいる総ての人間達に、言い放つ。

「我々は神の命を賜った。その命とは、仁敬一郎博士をこちら側に取り込み…S-1を我々のための力とすること!」

「S-1を…？」

「そのためならば、手段は選ばん…ファイヤーコングは博士の息子を使って脅そうと悠長なことを考えているようだが、俺はこの講堂の人間総てを人質に使い、仁博士の身柄と交換する!」

「そんな…」

「残念ながら、お前らは手土産一つ持って帰れずにここで鉄くずになるだけだ」

文句を言いたげなカズヤを制止しながら、士は一步ずつ前に進む。

そして、学生服のポケットからバックルのようなものを取り出し、腰に当てる。

するとバックルの両部分からベルトのようなものが出現し、士の腰に完全に装着された。

更にカードを一枚構え、開いたバックルの中に装填。

そして改めてバックルを閉じると、そこから特殊な機械音声が届いてきた。

「変身！」

『K a m e n   R i d e   D E C A D E !』

灰色のオーロラのようなものが士を覆い、オーバーラップしながら三つの像が合わさる。

更に、ライドプレートと呼ばれる板が頭に刺さり…

現れたのは、マゼンタと白のボディにグリーンの複眼と言う、奇抜な仮面の戦士。

——仮面ライダー・ディケイド——

その姿を見たカマキリガンは、鎌を構えながらディケイドに言い放つ。

「それは…！そうか、貴様がディケイドか」

「ドグマにも人気か。人気者は辛いぜ」

「貴様を倒せば、障害はなくなる。ここで、このカマキリガン様の『死の大袈クロス』を受けて、真つ二つになるがいい！」

「鎌が缺かどつちにしやがれ。…おいカズヤ、危ないから講堂の隅にでも下がってろ」

「つ、士…」

デイクイドはライドブツカーを剣のような形状に変えると、カマキリガンに斬りかかる。

そんな彼の姿を見て、カズヤは、どうしたらいいのか迷っていた。講堂にいた学生達は、今にもドグマファイター達に襲われようとしている。

一人の女子学生が、腕を掴まれ、「きゃあ」と悲鳴を上げる

…それを見たカズヤは何も考えずにただ走り、そして、女子学生を捕まえていたドグマファイターに綺麗な構えの飛び蹴りを決めた。

頭をやられ、ドグマファイターは機械音のような声を上げ…頭の一部を僅かにショートさせながら、倒れる。

「ガ、ギギ…」

「大丈夫？」

「は、はい…」

「……そこで、皆と一緒にじっとしていて」

カズヤはそう呟きながら、ドグマファイターの方に向き直る。

そして。

深く深呼吸した後、先頭のドグマファイターに上段回し蹴りを浴びせる。

更に、殴りかかってきた別のドグマファイターの拳を軽くいなし、正拳を鳩尾に当てる。

少なからず、拳法が何かを学んでいる人間の動き。

カズヤは特殊な構えをしながら、言い放つ。

「祖父から受け継いだ…赤心少林拳の力！ここで使わなくて、どこで使う…！」

「カズヤ！」

「士、こっちは大丈夫…それよりも、そっちの厄介な方を！」

「…無茶すんなよ！」

ディケイドはそう言いながら、ライドブッカードを一閃する。

ちい、とカマキリガンは舌打ちしながら、襲い掛かるドグマファイター軍団の猛攻を流しながら、拳や蹴りの一撃を決めるカズヤを睨みつけていた。

ディケイドとしても、正直、あの頼りなさそうな表情をしていたカズヤがここまで武術に秀でていたとは思わなかった。

人は、見かけによらないものだ…そう思いながらも、カードを一枚取り出していた。

「さあて、さつさと片付けさせてもらうぜ！」

『K a m e n   R i d e   F A I Z !』

ディケイドは別のカードを装填すると、足や胸、腕などに赤い光のラインが入る。

光を放って現れたのは、金の複眼に黒とシルバーの機械的なボディ、スーツの至る所に走っている赤いフォトンブラッド…

——仮面ライダー・ファイズ——

右の手首をピシッとスナップさせながら、Dファイズはカマキリガンに殴りかかる。

更に姿を変えたディケイドに、ドグマファイターの一体に膝蹴りを浴びせながら、カズヤはただ驚くこととしかできなかった。

だが…カマキリガンは、Dファイズと接戦を繰り広げながら言い放つ。

「クカ…それが貴様の能力か！あの方が見惚れるのも分かる」

「何をごちゃごちゃと…お喋りをしたいなら、講壇に立って話したらどうだ？」

「その余裕も…じきに崩れよう！」

くくく

一方で、ユウスケ…クウガも、ファイヤーコングと接戦を繰り広げていた。

しかし、相手は見た目に反して俊敏で…その上、特殊な拳法を使ってクウガを翻弄させる。

素早さで戦うならドラゴンフォームに超変身する必要があるが、生憎と、棒のようなものはどこにもない。

それに素早さで勝ったところで、防御力の低いドラゴンフォームでは万が一に相手の拳法による猛攻を受けた際、打たれ負けてしまう。防御重視で戦うならタイタンフォームだが、刃物のようなものも、場所を考えれば滅多にはないだろう…

「くっ！」

「どうした、この程度か…クウガ！」

ファイヤーコングの額から、火炎放射が放たれる。

至近距離から浴びせられたクウガは、咄嗟に腕でガードするが、それでもダメージを負う。

炎の属性を持つマイティフォームですら、大きなダメージ…

「強い。クウガは、目の前の相手は口ばかりではないと理解した。その一方で夏海は、ケイスケと一緒にこの場から離れようとする…ファイヤーコングの目的は仁博士の息子…つまりケイスケ。」

敵の手に渡すわけにも行かなかったし、“キバーラ”と言うキバツト族の力がなければ変身出来ない以上、土を呼んで加勢させるしか方法がないのだ。

「早く逃げましょう！そして、土君を…」

「待て！…あいつはユウスケなのか、あいつらは一体何なんだ！？」

「私に言われても、ここでは説明しきれません！とにかく、今は…きゃあっ！！」

「！！」

夏海とケイスケの行く先に立ち塞がったのは、別のドグマファイター！。

剣にトンファー、鉤爪と…まともに相手をしたら大怪我をしそうな武装をした者達ばかりだ。

夏海ちゃん、とクウガは叫ぶ。

だがその一瞬の油断が大きな隙に繋がり、ファイヤーコングの拳をまともに浴びてしまう。

軽く体が宙に浮き、クウガが地に落ちる。

「ぐ、う…」

「ユウスケ！」

「まさに八方塞か…」

一体どうすれば。

夏海共々壁際に追い詰められつつ、そう思っていたケイスケの目に留まったのは、粉末消火器…

ケイスケはそれを手に取ると、黄色の安全ピンを引き抜き、ホースを外してそれを敵に向ける。  
そのままレバーを強く握り、中の粉末が勢いよくドグマファイター達に噴射された。

視界を奪われ、混乱するドグマファイター達。

このまま逃げようにも、出入り口はドグマファイター達の奥にある。逃げててもこの狭い場所では、いずれ捕まる。ならば…

そう思った夏海とケイスケは、一般解放されていない二階に逃げ込む。

それを見たファイヤーコングは、混乱するドグマファイター達に叫ぶ。

「何をしている！女はさっさと追って殺せ…男は仁博士の息子でなければ、一緒に殺せ！！」

「『ガガガ…』」

「しまっ…」

落ち着きを取り戻したドグマファイター達は、階段を登り始める。クウガは助けに行こうにも、ファイヤーコングの相手束手一杯…このままでは！

すると、二階に逃げたはずのケイスケが試料用の本や機材を運ぶ為の荷台を二つ押してやってきたかと思えば、階段に群がっていたドグマファイター達に向かって一台目を滑らせる…

先発はそれに直撃して、そのまま階段から雪崩れるように落ちる。次にやってきた集団にも、二台目を同じようにぶつけ、撃退させた。一方で階段の手すりを登って直接やってくる者もいたが、夏海は別の荷台を押して…更にその荷台には、二階にあった消火器一本とモップが積まれている。

夏海はケイスケがやったように消火器の安全ピンを抜き、ホースを向け、ケイスケに飛びかかろうとしていたドグマファイターに向け

て発射した。

「…やあっ！」

「ガガ…！？」

「——そらよっ！」

ケイスケはモップを手に取ると、ドグマファイターのそれを腹に一閃。

体勢を完全に崩されたそれは、階段から転落し、ガチャンと機械が壊れたような音を立てて動かなくなった。

消火器を使い切った夏海は、それを再び階段を登ろうとしていたドグマファイターのうち一体に、思いっきり投げつける。

よし、とケイスケは三台目にもなる荷台を勢いよく蹴り飛ばし、敵集団にそれは突っ込んでいく…

先程の別固体のように手すりを登ってくる、剣を持ったドグマファイターもいたが、完全に接近される前にリーチで優位に立てるケイスケが待ち構え、突き落とす。

またも同じようにドグマファイターは落下し、派手に壊れる。

その際、その手から零れ落ちた剣は、クウガが受け取れる位置にあった。

——チャンスだ。

そう思ったクウガは、何とかしてファイヤーコングを押し切ろうとする。しかし、相手もその危険性を分かっているようで、猛攻が激しくなる。

しかし…

「夏海、これ持ってる」

「えっ、ええっ！？」

「空の消火器は…まだあるんだよ！」

ケイスケは夏海にモップを渡すと、階段の手すりで隠れて見えなかった部分から、一回目に使った空の消火器を軽がると持ち上げる。そして、そのまま狙いを定めてファイヤーコング目掛けて投げつける。

いくらからでも直撃されては、と思ったのか、ファイヤーコングはそれを太い腕で受け止める。

だが、短いものであっても、時間稼ぎができればそれでよかった。

クウガはドグマファイターの持っていた剣を取り、叫ぶ。

「超変身！」

すると、クウガの鎧は白銀と紫の鎧へと変貌し…複眼も、赤から紫に変わる。

更に剣は形状を変え、クウガ・タイタンフォーム専用の武器“タイタンソード”へと変形。

くそ、とファイヤーコングは火炎放射を浴びせるが、クウガTFはそれを剣で防ぐ。

そしてそのまま、タイタンソードを振るって重い一撃を浴びせる。

先程とは違う攻撃力の高さ。

ファイヤーコングは簡単に地面に倒れ、クウガTFは容赦なくタイタンソードを大きく振り、そのまま相手の腹に突き刺す。

がっ、と小さく呻く声が聞こえる。

クウガTFはその機械の体から剣を抜くと、ゆっくりと立ち去り…ファイヤーコングはバチバチと火花を散らしながら、最期の言葉を残し…

「——ウ、ゴ、……ゴッド………に、栄光あれ……！」

爆発していた。

ガラランガラんと、機械の残骸が飛び散る。

ゆっくりと歩きながら、クウガTFは階段に群がっていたドグマファイターに向かう。

数体の兵が、指揮者を失ってもなお飛び掛ってきていたが…鋼鉄の鎧は敢えて防御の構えを取らずとも、総て受けきるほどに硬い。

「…そりゃあああッ！」

「…ガギッ…」

逆に、攻撃を与えたドグマファイター達が、タイタンソードの一撃で機械屑になっていく。

中には階段を登りきって、一矢報いようとするものもあった。

だが、それらは攻撃を届かせる前に、ケイスケが夏海から受け取ったモップによって突き落とされ、スクラップになるか…落下先にいたクウガTFの追撃を貰って爆散するか、だった。

夏海も、まだ息のあったドグマファイターに光家秘伝【笑いのツボ】を与える…

体の90%以上が機械とされるドグマファイターに、通用するとは思えなかったが、それでも完全に機械ではないせいか、微量に効果はあるようだ。

そして、動きが鈍った相手にケイスケがモップの柄の部分で派手に腹部を突き、そのまま完全に動かなくなる。

彼らが仁深海研究所に現れたドグマファイター達を総て一掃するのには、時間は掛からなかった。

〃  
〃  
〃

Dファイズとカマキリガンは、激しい戦いを続ける。

カマキリガンの鋭い鎌は二本。

対して、Dファイズはライドブッカー一本で応戦している状態…

オートバジンを呼べば何とかなるだろうが、その隙を与えないほど、素早い攻撃を仕掛けてきているのだ。

…ディケイドのように、カードの媒体を使うライダーの弱点は、  
カードを使う“間”にある。

カードを入れて実行されるまでには、最速2〜3秒。

しかしその2〜3秒の“間”は隙だらけとなり、この間に攻撃されると一気に不利になる。

また、その“間”すら与えられない連続攻撃が来ると、対応しきれないのだ…特に相手の得物の数が、こちらを上回っているのなら尚更。

明らかにディケイドを知り尽くした動き…ちつと舌打ちしながら、Dファイズは考えていた。

（どうする。万が一カードを使う暇があったとしても、ヘタなカードだとこっちが負ける。それに…生身でもある程度戦えるとはいえ、カズヤがもたない！）

彼の心配事は二つ。

一つ目はカマキリガン対策…これは先程から考えている通りだろう。

二つ目は、個対多の戦いを強いられているカズヤ。流石にこれは、カマキリガンを即座に倒すか…ユウスケか海東の助けが来ないと覆しようがない。

どうすれば…

そうしていると、カマキリガンの左からの一閃が、Dファイズに直撃した。

「ぐああっ…！」

「クカカ…これがディケイドの実力か？弱い、弱すぎる」

Dファイズは地面に倒れ、そのままカメンライドが解除される。

ゆっくりと歩きながら、ディケイドの頭を踏みつけるカマキリガン。

—このまま頭を押し潰せば勝てる。

そう思っていたのだらう。しかし、彼は…ここまでの間に、ディケイドに“間”を与えてしまっていた。

右腹部のダメージを抱えつつも、ディケイドの取り出したカードは…

「悪いが…チエックメイトだ」

「何？」

「カマキリには…カマキリを使ったコンボだ！」

『Form Ride OOO-GATAKIRIBA!』

ディケイドはそう言い放つと、オーズ・タトバコンボを介さず、直接ガタキリバにフォームライドする…

そして、Dガタキリバは頭の触角からカマキリガンに電撃を放つ。

想定外の一撃を貰い、カマキリガンは大きく引く…

だがDガタキリバは瞬時に分身を行うと、一体を残して残りは孤立無援の戦いを強いられていたカズヤを助けに、向かっていく。

「うおおおお！」

「分身だと!？」

「異世界のカマキリは増えるんだぜ。知らなかったのか」

「くっ！」

カマキリガンは、Dガタキリバと剣戟を行う。

しかし、先程までとは違い自分も相手も得物の数は同じ。

とすれば、互いの戦闘能力とスペックが勝敗を左右すると言っても同じ。

Dガタキリバは素早く飛び蹴りを放つと、距離を離れた相手に電撃を浴びせる…

遠近両用が可能なDガタキリバ相手では、カマキリガンは不利ではない。

ドグマファイター達も、突然加勢してきたガタキリバ49体相手では、まともに戦って勝てるはずがない。

「くっ…」

「慢心が油断を生んだな、カマキリ野郎。トドメは何がお好みだ？」  
「馬鹿にするなアアッ！」

頭に血が上った——果たして機械の体に、血が通っているのかどうかは不明だが——カマキリガンは、Dガタキリバに特攻する。

冷静さを失ったただのムシケラに負けるほど、“破壊者”の名は安くない。

Dガタキリバは相手の懐に潜りこみ、交差するようにカマキリソー  
ドで腹を裂く。

グガ、と呻くカマキリガン。

そうしている間に分身とドグマファイターの戦いは、決着が付いた。  
一人で頑張っていたカズヤは体をふらつかせ、一体のガタキリバに  
体を支えられた後、その場に座り込む…

カマキリガンを見下すように立つDガタキリバはディケイドに戻ると、トドメの体勢に入っていた。

「動くと痛いぞ！」

『Final Attack Ride DE・DE・DE・DE  
CADE!』

ディケイドはその場に跳躍すると、彼とカマキリガンの間に光の力ードが何層にも重なって出現する。

そして、その間を突き破るようにして、ディケイドは飛び蹴りを放つ……

——ディメンションキック。

ディケイドの誇る必殺技であり、破られたことは未だかつてない。

「……はあああーっ！」

「クカカ……俺は再び怨霊となっても、神は死なず！神ある限り、俺は生き返る……ゴッド……に、栄光あれエエエエッ……！」

“ゴッド”の後が少し聞き取れなかったが、その前にディケイドのキックがカマキリガンを完全に捉えた。

その一撃を食らったカマキリガンは、派手に爆発……

隅に隠れていた学生からは「うわぁ」と悲鳴が上がったが、ディケイドは気にせず、変身を解除する。

それを見たカズヤは、まだふらつく体に鞭を打って、立ち上がる。

……見た感じ、自分が知っている土だ。

では、先程のあれは？

あの怪物は。何で仁博士を。どうして土はあんな力を。

聞きたいことは山のようにあった。

しかし…それらを問い質す前に、土が崩れ落ちるように倒れ、カズヤは慌てて駆け寄った。

「ぐ…」

「土！大丈夫か！？」

「ああ…畜生、あのカマキリ野郎……なんっつー鋭い刃をしてたんだ…」

よく見ると、右腹部から血が出ている。

それを見たカズヤは、土からケープを剥ぎ取ると、それを傷口に被せ手に全体重を乗せて圧迫させる。

その傷の具合を見ても、どれほどの戦いだったかが分かる…

抑えられている土は顔を顰めていたが、それを気にしては傷を治せるはずもない。

何とか止血をした後、持ち歩いていたテーピング用のテープとハンカチで傷口を固定すると、カズヤは土の肩を抱えて天体ホールを出た後、よろよろとした足取りで救護室に向かっていった。

T o B e C o u n t e d …

\*\*\*

次回予告

「どういうことだ？まるで、ドグマ以外にもいるような口ぶりだが」

「我が名はアポロガイスト。地獄より甦りし男なり」

「なん、だと…！？」

Episode 3：甦りし太陽

## Episode 2：混戦、混乱（後書き）

本日から、正式に投稿されていきます。

さて、第2話ですが…

カマキリガンは結局、「死の大鉄クロス」をしなかったというw  
お前…何のために出てきたんだよ…↑

ここで存在が明らかになったのが、スーパー1…もといS-1。  
ここで、「最初に出るのは緑のライダーじゃないのか？」と思っただ方、当然いますよね。

3話でも説明しますが、スーパー1はそもそも“惑星開発用に作られた改造人間”なので、ドグマが襲撃してこなければその力は当然宇宙への夢の為に役立てられていたもの。

そして谷さんが「仮面ライダー」と名付けなければ、「仮面ライダー」を名乗ることもなかったライダーなので、現時点での装着者（と書いてますが、ほぼ“改造者”と言う解釈でいいかと）がいないことも踏まえて、ライダー扱いはしていません。  
スイカは話題だけは出ましたね。

カズヤはきつと、自己犠牲精神がそれなりに強いんでしょうね。  
だからこそ、S-1に志願しようと言いだしたり…  
兄の夢を叶えようしたり…

咄嗟に、生身の人間なのに立ち向かおうとしていたり。

敵さんの性格がおかしいかと思われませんが、リイマジズムで流し

て…いただければ…↑

ファイヤーコングは、辛うじてカラオケ映像で額から炎を出している所を見ました。

カマキリガンは…なんとなく、ハッチのカマキリを思い出して書いていたね…カマキリといえば、カマキリヤミーやストライクよりもまずあのカマキリなので…

勿論、蜂もハッチのほうが印象に強いですw

余談ですが、ユズリハのお話は何処となく重かったような。ハッチのお節介が結果的にその虫にとって悪いことだった、という感じの。

生身で強い奴が多すぎるこの世界。

カズヤが赤心少林拳の技でドグマファイターを蹴散らせば、ケイスケはモップと消火器と荷台を使ってドグマファイターを翻弄するという…

あれ、

…ケイスケお前もう生身のままでよくね…？

あと、ファイズになった意味はほぼありません。

こんな状況でも消火器の扱いは冷静すぎるケイスケ。

仮面ライダーにおける消火器は、かなり強いですね…ウヴァさんの件にしてもw

そして仁深海研究所の二階には、どれだけ荷台があるんだ…

更に、ドグマファイターにも笑いのツボは有効なのか…！

一応、【コア大戦ルート】を通過してオーズのカードを手にしているので、オーズの力は使えます。

ただし一応、昭和系統のカードはアマゾン・RX・BLACK以外はあえて「なし」にしていますね…

冬映画のライダーカードも、一時的に破壊し記憶に刻み付ける為の

媒体と考えているので、世界が元通りになった後は、そのカードのライダーも戻った…みたいな感じで。

ぶっちゃけ、「DCD本編リイマジ+ディケブラで得たダブル+コア大戦で得たオーズ」以外のカードは使いませんし使わせません。ただし、アマゾン戦闘に使わないだけで話題には出しますが。

次回で軽くネタバレですねw

果たして、「なん、だと…!？」はアポロガイストに対して言ったのか！

それとも、別の誰かに対して言ったのか…!!

あと、前回のクイズの答えは4話で回答編になります。

### Episode 3：甦りし太陽（前書き）

ガタキリバ「これまでの、DCDRWは…」

謎の世界に現れた、赤いタイツの変態達！

それに応戦したのは…

本郷町では影が薄いことに定評のあるクウガ（ただしマイティに限る）と、破格の値段をつけてはリュウガに絞め殺されることに定評のあるデイケイド！

しかし、敵の動きは自分達を知っているかのように、弱点を突いてくる！

どうなるマイティ！

どうなるデイケ…なんとか！

だが、そんな彼らって言うか、マイティの元に助っ人が現れた。

デイケ××？

あーもーあいつ一人でいいんじゃない？

それは…

キバーラ「ふふふ…ファイヤーコング×マイティなんて…貴重です！」

消火器「助けに来たぜ！AIBOU！！」

荷台「激突だ！」

モップ「ゴミは決められた日に捨てましょう」

何とかマイティは勝利！

そしてデ。。。。もまた、俺の力で辛くも勝利したのである！！

ガタキリバ「価格の破壊者、。。。。：いくつ者世界を巡り、その瞳は何を見る！」

士「何処からツツコミを入れたらいいんだ、俺は！？」

## Episode 3：甦りし太陽

救護室に向かった土とカズヤ。

今は誰もいないのか、がらんと空いている…

白く清潔感溢れるベッド。そのカーテンは総て開けられており、何処に寝てもいいだろう。

土は近くにあったベッドの上に適当に座り、カズヤは薬品置き場の棚から消毒液を取り出し、下の棚に置いてあった救急箱も一緒に持つていく。

固定していたテーピングを剥がし、学ランの上着とシャツを脱がせると、カズヤは綿に沁み込ませた消毒液を傷口に塗る。

ズキ、という痛みが土に奔るが、カズヤは気にせず治療を続ける。

そしてテラコートを中心に塗った四角のガーゼを傷口に抑え、テープで固定…

念を入れて、包帯を巻いて更に固定する。

「やりすぎじゃないのか」と土は思っていたが、手当てしてもらっている手前、滅多なことは言えなかった。

「はい、終わり。…それにしても、土、あの姿は一体…」

「まあ…簡単に言うと、“仮面ライダー”って奴だ」

「仮面…ライダー…」

「知らないのか？」

土は不思議そうな顔で、カズヤを見る。

相手は思い当たる節が本当にないのか、小さく頷く。

——おかしい。

——仮面ライダーを知らないなら、どうして、スーパー1が存在している？

スーパー1は仮面ライダーだ。仮面ライダーが既に存在していて、後は誰がそれに改造されるか…それともそれは完全な機械にするかで話し合われているのに。

そう思っていると、ガララと扉を開けながら説明する人間が現れる。

「知らなくて当然さ。スーパー1はそもそも、仮面ライダーになるはずじゃない…惑星開発用の改造人間だったモノなんだから」

現れたのは、海東だった。

これが初の邂逅となるカズヤは、土に「知り合いか」と尋ねる。

泥棒の知り合いにされることは侵害だが、間違ってもいないので、

「腐れ縁だ」とだけ返していた。

海東が神出鬼没なのはいつものこと。どうせ、ここにあるかもしれないお宝を探しに来たのだろう…

土はそう思っていた。そして、その予想は見事に当たった。

「悪いね。本当は僕もお宝を探っていたんだけど…目ぼしいものが見つからなくて」

「月の石とかどうなんだ？ああ、そうか、お前はライダー関係の珍しいお宝のほうがむしろ好きだったか…：：：なんなら、S-1でも盗んでみたらどうだ？」

「お断りするよ。改造人間のお宝なんて、扱い憎いっただけだしがない…どうせなら、稲妻電光剣が欲しいよ」

「——あのー、土、…仮にも宇宙科の生徒が『S-1でも盗んでみたら』って正直どうかと思うんだけど」

眉を寄せながら、カズヤが、溜息混じりに呟く。

しかし、士は悪びれる様子もなく、むしろ堂々としている…

それどころか、ベッドに足を乗せながら、海東に質問する始末。カズヤの意見は聞いていないようにも思われる。

「それよりも、海東。ここは【スーパー1の世界】らしいな」

「さあ、どうだろうね…」

「ここにはスーパー1…もとい、S-1システムを作り上げた奴らがいる。ドグマの兵もいた。それ以外に何があるって言うんだ」

「……士、ひょっとしてさっきの襲撃は、ドグマがやったのかい？」

海東の物言いに、士は眉を寄せる。

彼の言い分だと、まるで、ドグマ以外の別勢力がいるようにも思える…

話に既に置いていかれているカズヤを無視したまま、士は海東に尋ね返す。

「どういうことだ？まるで、ドグマ以外にもいるような口ぶりだが」

「…いや、僕の勘違いかもしれないけど、……ネオショッカーの怪人を見たんだ。それに…」

「それに？」

「——言わないでよくよ。もしかしたら、それこそ勘違いであるかもしれない…むしろ、勘違いに留めておきたいものだから」

お茶を濁すように言われ、士はしかめっ面をそのままに海東を見ていた。

ネオショッカー…

それは、スカイライダーが戦ってきた怪人組織で、ここが【スーパー1】の世界ならば見かけるはずがないのだ。

…いや、例外はある。

前に一度、【BLACK RX】の世界に訪れた際に、【Xライダーの世界】にいたはずのアポロガイストが大シヨッカーの一員として攻めてきた事があった。

大シヨッカーの技術力ならば、世界を越えることは可能だろう。

しかし、その大シヨッカーは滅びた…残党とされるスーパーシヨッカーも、士達によって完全壊滅したはず。

「まさかとは思うが、大シヨッカー…いや、スーパーシヨッカーの残党がいたと言っくんじゃないだろうな」

「どうだろうね…残党といえば、マスターがそれに当たりそうな気がしなくもないが、今更ありえないだろう」

「とにかく、警戒しておくことに越したことはない…か」

「さてと…僕はそろそろ行くとするよ。この世界のお宝を探しに行かないとね」

そう言つて、ピツと右の人差し指と中指を出しながら、海東は風のように立ち去っていく。

…何だったんだ。あの人は…

カズヤはそう思っていたが、突然、鞆の中に入れていた携帯電話の着信音が鳴る。

慌ててそれを取り出すと、通話ボタンを押し、電話に出る…

相手は、ケイスケだった。

『——カズヤ！悪い、今、講義中だったか？』

「いや…講義のはずだったんだけど、中止になったというか…中止せざるを得なくなったというか…今は士と一緒に、A棟一階の救護室にいる」

『救護室？怪我でもしたのか！？』

「はは…と言つても、大怪我を負ったのは土ぐらいなんだけど……  
そっちは？色々夏海さん達に案内した？？」

『それが…』

ケイスケは、電話越しに自分達の身に起こったことを話す。

——猿のような機械人間が襲い掛かってきたこと

——目的は、仁敬一郎の息子である自分だったこと

——ユウスケが見たこともない、赤い仮面の戦士になったこと

——敵から奪った剣を使って、更に紫色の戦士に変化したこと

少なくとも自分が『モップを振るってドグマファイターをぶっ飛ばした』ことについては全く言わず（言わなくとも、長年の付き合いゆえに理解していると判断したため）、要点だけを説明するケイスケ。

一方でカズヤも、ケイスケの父親を狙って天体ホールを襲ったカマキリガンとドグマファイターについて、簡潔にはあったが説明をする。

それを聞いたケイスケは、電話の奥で「そうか」と小さく呟いた後、未だ混乱しているような調子で話し続けていた。

『一体、何が起こっているんだ？…俺の親父に、何をさせようとしているんだ？？』

「さあ…それよりも、仁博士って」

『今日は、朝からB棟で“プロジェクト〃S-1”について、朝から同じプロジェクトに所属する研究者や教授達と話し合っている。

そっちに行かなかったのは、幸いというかなんと云うか…』

「そうだったんだ…午後は？」

『深海科の講義だ。……やっべ、さっき研究所の一階と、ついでに二階の一部を派手に荒らしちまったんだけど、大丈夫か…？』

なるべく模型とかは壊さないようにしたんだけどな、と呟くケイスケ。

はは、とカズヤは苦笑いをする…

そして一瞬土に目を向けた後、彼には聞こえないように小声で尋ねていた。

「……ところでケイスケ、“仮面ライダー”って知ってる…？」

『何だそれ…お面でもつけてバイクでもブイブイ言わせてるのか？』

「さあ…とにかく、何処か、ゆつくりできる場所で土達と話を聞きたいと思うんだ。——土達、俺達が見た奴らが何なのか、分かっているみたいだから」

『そうだな…さっきの件で、日程がどうなるか次第だな。とにかく、どうなるにしても、研究所片付けねえと……』

はああ、と電話越しに漏れる溜息。

それを聞いたカズヤは失笑すると、「頑張つてね」と言っただけで電話を切った。

そうしていると、突然、壁に取り付けられた四角いスピーカーから放送が入る。

<——今日は緊急会議のため、二時間目以降の全日程は中止となります。学生は速やかに帰宅してください。繰り返します…>

「ま、実際に負傷者が出ていれば賢明な判断だな」

「土…それよりも、中止になったならケイスケの手伝いに行こうかな。一階はオープンキャンパス時の見学やこれまでの深海探査活動の結果を人目に触れさせる目的で、結構広いから」

「じゃあ、俺は暫く寝てから行くとするか」

確かに、土の怪我の具合から言って、すぐに動かすわけには行かないだろう。

…若干、『掃除に巻き込まなくてよかった』という気持ちもありそうだが…

とにかくカズヤは救護室を後にすると、その扉を閉め、仁深海研究所に向かおうとしていた。

その頃…

B棟2階にある会議室では、先程まで“プロジェクトⅡS-1”の話し合いが行われていた。

しかし、仁深海研究所や天体ホールの中で、大学内の一部の講師・教授が集まって、今回の事件のことについて対策を練っていた。

防犯カメラの映像によって、この世界ではまず見かけない機械の怪物達と…それと戦う仮面の戦士、そしてケイスケやカズヤの姿が判明。

この字で組まれた机の、奥の方に座っていた仁敬一郎教授兼博士…つまりケイスケの父親は、頭を抱えながら今回の件について悲観していた。

少なくとも、危ない目に遭うと分かっているながら戦ったケイスケやカズヤにではない。

何故この大学が狙われたのか。彼らはどんな組織なのか…そのことだ。

「……一体、何が起きているというのだろうか」

「天体ホールに居合わせた生徒の話ですと、見慣れない学生服の男

が、突然ピンク色の仮面の戦士になったかと思ったら…怪物達と激しい戦闘を繰り広げていたようで」

「もしかしたら、ここ最近各地で頻発している、連続失踪事件と関係があるのでは…？」

一人の講師が、そう呟く。

——連続失踪事件…

始まりは、三年前のとある夫婦の結婚式でのこと。

『新郎が突然、式を前に姿を消した』

結婚を直前に、気落ちするのはよくある…俗に言う、マリッジブルーだ。

しかし、新郎は直前まで友人と話しており、彼らの話だと新婦との結婚を本当に心待ちにしていた…今更嫌になって逃げることなど、ありえなかったのだ。

そしてその三日後に、教会から1km離れた場所にあった森の中で、新婦に渡す予定だった指輪と…新郎の靴が発見された。……事件は『マリッジブルーによる失踪』ではなく、『何者かによる誘拐』と判断された。

それを皮切りに、長崎で鼈甲職人をしていた四十代の男性が…奈良県にある中学校に通っていた生徒3人が…という具合に、度々失踪事件が起こっていた。

手口からして同一犯の可能性が高いが、起きた場所も違えば、失踪した人間に共通点は一切ない。たまにあったとしても、他の被害者との関連性は極めて薄い。

最近では、生物学の権威や植物学者など、科学者が連れ去られるケースも後を絶たない。しかしこちらも当然、“研究者”以外にこれといった共通点は見つからない。

…まるで、何らかの大組織が絡んでいるような…

「かもしれない。…しかし、そうだとっても…」

「とにかく、これは警察に相談すべきではないでしょうか…!？」  
「いや、しかし、こんな非現実的な出来事を聞いて、動いてくれるはずが…」

「ですが！実際に被害が出ているんですよ!!」

様々な意見がぶつかり合う、会議室。  
だが…

「——成程、しかし遅すぎたな」

突如パンパン、と誰もいないはずの場所からおざなりな拍手が聞こえてくる。

何だ？と誰かが呟いた。

カツ、カツとそれは歩き…そして、目の前に見せた姿は、白いマントに鳥のような赤い仮面をつけた男だった。

アポロガイスト。それが奴の名だ。

「な、何だお前は!？」

「我が名はアポロガイスト。地獄より甦りし男なり」

「ば、化け物…」

「…ひいっ!？」

「ドグマの劣兵達は、わざわざ人質を取ろうしていたが…やるにしても見境がなく、非効率的すぎる。所詮、下級兵は下級兵ということだ…私なら、こうするがな」

そうアポロガイストは言い放つと、指を軽く鳴らす。  
すると何処からともかく、ベレー帽と黒い服やスーツ、そしてゴーグルをつけた集団…GOD戦闘工作員が現れ、教授や講師達を次々

と捕まえ…抵抗する者はその場で総て殺している。

周囲には絶叫が響く中、アポロガイストはゆっくりと、敬一郎に近寄る。

「「「うわあああああああ!?!」」」

「やめろ、やめ…ぎゃあッ」

「うわあああ…!」

「「ひいっ!」」

「そのまま近くの支部に連れて行け。……さて、お前が仁敬一郎か?」

「そうだとしたら、何だと言っんだ」

「S-1システムを、我々の【神】の為に役立てていただくのか。必要な被検体は、いくらでもいる」

何人かは既に連れ去られ、床にはいくつかの死体が存在している。

自分も逆らえば、あなるかもしれない…

しかし、S-1は人類の希望。何者か分からない奴らのために使うつもりはないし、そもそも、S-1は戦闘用ではない。

敬一郎は少しでも時間を稼ぐために、アポロガイストに咄嗟の提案を出した。

「——お前達は何者かは知らないが、S-1は戦争の道具ではない。それに、まだ完全とは言いつれない…そのまま誰かを改造人間としてしまえば、できるのはS-1ではなくただの怪物だ」

「我々としてはそれでもいい。が、【神】は仮面ライダーの戦力のほうを重視している…」

「……どうなんだ」

「いいだろう。三日だけ待ってやる、その間にS-1を完全なものにするのだ」

分かった、と敬一郎は小さく呟く。

予想に反し、三日という猶予を得られた…その時間をどう活用するかは、敬一郎次第。

その間に…

そう思った敬一郎だが、人間の浅はかな考えなどお見通しなのか、アポロガイストは平然と言い放つ。

「そうだ、仁博士よ…息子と共に雲隠れしよう、とは思うことがないようにな」

「…! どういう、ことだ」

「言ったとおりの意味だ。我々と…我々の【神】を裏切ればどうなるか。言っておくがハツタリではないぞ」

そう告げると、アポロガイストはあるものを敬一郎に見せる。

受信用の小型テレビだ。

何かの映像を受信しているのか、音声や映像が鮮明に映し出されている…

そこに映し出されていたのは、仁深海研究所の掃除をしていたケイスケや、彼と一緒に散らかしたもののや壊れたドグマファイター達を片付けているカズヤ・夏海・ユウスケの姿。

カズヤは荷台を押しながら、同じく荷台を押しして階段を登っていたケイスケと話している。——盗撮されているとも知らずに。

「——しかし、派手にやったねえ…」

「仕方ないだろ、緊急事態だったんだし…あー、消火器ってどこかに保管されてなかったっけ」

「…!」

「我々の工作員は非常に優秀でな。他の集団とは違い、偵察や破壊

工作なども得意としている…逆らえばその時点で、息子を殺す」

……やられた。

敬一郎は心の中で、そう叫んでいた。

ここにアポロガイストが現れた時点で、既に後手だったのだ。

目を瞑りながらも、敬一郎は踵を返し…最後に一つだけ、アポロガイストに告げていた。

「いいだろう…だが一つだけ、……三日間の間…息子やカズヤ君の安全は保障してくれ」

「我々を裏切らなければ、な。しかし仁博士、息子だけならともかく…何故あの男も？」

「…ケイスケと彼は、兄弟同然に育った。私も、彼のことは息子と同じように接していた…家族みたいなものだ」

成程、とアポロガイストは興味のなさそうな声で呟く。

彼にとっては、敬一郎が素直に協力さえしてくれればどうでもよかったのだらう…

家族の情に流され協力するのなら、それでもよかった。

…“三日間の保障”はしたが、それ以降は約束外…つまりケイスケ達の命を盾に、協力させ続けることも可能なのだ。

——それに、敬一郎が用済みになれば、ケイスケやカズヤは非検体として使える。

あの身体能力の高さなら、二人ともいい出来の改造人間となるだろう…そう考えていた。

ならば息子の監視は今この様子を撮影しているGOD秘密工作員の一体に任せ、カズヤには、別の者に監視を就けさせよう。

そう思い、アポロガイストは本部の方に連絡を取りながら静かに立ち去っていく。

一人残された敬一郎は…近くにあった机を、ダン、と拳で叩いていた。

このままではS-1が人類の希望としてではなく、人類の敵として猛威を振るうことになる。

だが、逆らえばケイスケやカズヤの命はない…

GOD秘密工作員が自分の周辺をうろついている可能性も考えると、迂闊な行動はできなかった。

しかし…

（奴らは、S-1を要求してきた。ということは、アレの存在はまだ漏れていないということだ…）

——ならばせめて、“アレ”だけでも奴らに利用されないよう、守らなければ。

——私の夢や人類の希望は、失わせない…

そう思い立った敬一郎は、厳しい顔で歩き出す。  
まるで、決意を固めたかのように…

~~~~~

士が救護室から出て、仁深海研究所に向かった時には…

既に、中の掃除は終わっていた。

多少床に傷が残ったり消火器がなかったりしていたが、贅沢は言えない。

士は適当な拍手を鳴らし、偉そうに告げていた。

「…ご苦労なこった」

「煩いな！少しは手伝えよ！！」

「そうですね…大変だったんですから！特に、あの機械の人達を片付けるのは！！」

「仕方ないだろ。俺は怪我人なんだからな、楽しんで当然だ」

「あーっ、汚ねえぞ士！」

「士君なら、少しぐらい怪我しても大丈夫じゃないですか！」

ギヤアギヤアと大騒ぎする、ユウスケと夏海。

確かに、何もしていない人間に偉そうに言われれば、それだけで不快になるだろう…

カズヤはふうと溜息をつきながらも、士達に尋ねていた。

「それで…仮面ライダーについては、掃除をしている時に二人から聞いたからいいけど、…あいつらは？」

「ああ。俺もそれが非ッ常に知りたい」

「あいつらはドグマファイター…まあ、簡単に言えば戦闘員だな。目的はどうあれ、共通しているのは…仁博士の誘拐だな」

敬一郎の誘拐。

それについては、カズヤ達やユウスケ、夏海も分かっていた…

となると、彼を誘拐する理由は一つしかない。

カズヤは不安そうな顔でケイスケを見、ケイスケは頭を抱えながら近くの壁に背を掛けていた。

「うん…もしかしたら、S-1を自分達のものにしようとか考えているんじゃない」

「だけど、S-1は軍事利用とかできないはずだぞ。親父が言っていた…S-1は宇宙エネルギーの利用という人類の夢を叶えるために作られた、開発専門のシステムだって」

——スーパー1はそもそも、仮面ライダーになるはずではなかった

海東の言葉を、土は思い出す。

ケイスケの口振りから言っても、それは間違いないようで…ならば何故、スーパー1は仮面ライダーとなったのか気になっていた。

それに、開発専門のシステムならば、戦闘能力は低いだろう。

少なくとも、『宇宙でも役に立つ程度』の力しか備わっていないはずだ。ファイブハンドがそのいい例だろう。

（…まあ、今度海東に会った時に聞けばいいか。あいつはその辺の事情に、いやに精通しているからな）

「ケイスケさん、今、博士はどうしているんですか？」

「さあな…もうそろそろ、緊急会議も終わっていいはずなんだが」

夏海に言われ、ケイスケは父の携帯に電話をかける。

…しかし、数回コールしても出ないどころか、留守番電話に繋がる始末。

もしかして…！

そんな不安を誰もが感じていたが、『ピー』という発信音が鳴ったと同時に、敬一郎が電話に出ていた。

『……どうした？』

「あ、親父。今どうしてる？」

『…技術科のS-1開発室だ。話し合いの結果、多少のメンテナンスを行うことになってな』

「親父、…何も隠していることなんて、ないよな？」

ケイスケの問いに、敬一郎は声を詰まらせた。

——正直に言えば楽だろう。

——しかし、その瞬間“裏切り”と見なされ、ケイスケがどうなるか分からない…

そう思った彼は、『S-1を寄越せと言ってきた連中と会った』とは言わず、いつものように返していた。

『ああ。…何があつたんだ？』

「いや、無いならいいんだけど。…そうだ、今日の夕飯、オムライスにする予定なんだけど…鶏肉つてうちにあつたっけ？」

『冷凍庫の中に1パックあつたはずじゃないか？』

「オッケー。じゃあ、あまり研究に根詰めないで早く帰ってきてくれよ。最近S-1ばっかで、碌に顔合わせてないんだからさ」

『…ああ、そうだな。そうしよう』

それだけ言うと、敬一郎は電話を切ってしまう。

ケイスケは暫くの間、ツーツー…と鳴り響く音を黙って聞きながら、士達に言う。

「——そういうわけだから、俺、先に帰るわ。あ……カズヤ、今日、月島のご両親は？」

「二人とも仕事だったはずだよ。星ノ宮ロケット発射場で、今度行われる発射テストの最終調整をしているって話だから……食べて帰

つてくるんじゃないかな」

「じゃあ、お前の分も作って待つてるから、来いよ。早くても6時ぐらいな」

「分かった。いつもありがとう」

その返事を聞くと、ケイスケは一旦、家に帰る。

ファイヤーコングの行動から言って、一人にするのは危険ではないかと思われるが…

「大丈夫だろ。…俺の見立てだと、ホールに来た奴とここに来た奴は、同じ命令は下っていても人質を取ったり無差別に襲ったりで、独断行動丸出しだ。そこで考えた…：本当は別の奴に博士誘拐の命令が出たが、盗み聞きしていたあいつらは出世したさに暴走したってわけさ」

「な、成程…」

「じゃあ私達は、どうするんですか？」

「敵が動かないことにはどうしようもないだろ。だが、狙いは既に分かっていて…：ならば仁博士を見張るまでだ」

確かに、敵の目的は既に割れている。

…：仁敬一郎の捕獲…：

今は安全でも、その数時間・数秒後には敵の間の手が及んでいる危険性が高い。

ならば被害を最小限に食い止めるためにも、彼の周囲に張り付いておく必要があるだろう。

そう思った士は、ユウスケと一緒に敬一郎の元に向かおうとしていた。ケイスケに聞けば早いだろうが、彼はもういなくなっており…：学内にいることは確かなようなので、自分達で目ばしい場所を探せばすぐと考えた。

だが

「……おっと、ディケイド…そしてクウガ。それはよしてもらおうか」

そう静かに告げ、現れたのは…

ヤモリの姿をした改造人間、ヤモリジン。

それを見た士は、一瞬目を疑った…そして海東の言っていたことを思い出した。

——『ネオショッカーの怪人を見た』、と。

あの時は軽く流していたが、スーパーショッカーの残党の可能性を考えた士は、夏海とカズヤにここから離れるよう目で訴えた後、ヤモリジンに言い放つ。

「……お前は【スカイライダーの世界】の怪人じゃないのか。まさかとは思うが、大ショッカー…いや、スーパーショッカーがまた復活でもしたのか？」

「スーパーショッカー？ほざけ…私はネオショッカーの一員。そして今は……【神】により復活を果たした、ゴッドショッカーの一員だ！」

「ゴッドショッカー、だって？」

ユウスケが、間の抜けた声で言い放つ。

神の名を持つショッカー、こう言っでは何だが、随分と大それた名だ。

とにかく、どんな目的であろうが怪人をのさばらせて置くわけには行かない。敬一郎のこともあるのなら、尚更だ。

士は、はっと鼻で笑いながらヤモリジンを睨みつける。その手には、既にディケイドライバーが握られていた。

「誰を崇めているのか知らないが、所詮再生怪人だ。遠慮なく倒させてもらうぜ」

「くはははは！確かに私達は、それぞれの世界でライダー達に敗れた…しかし【神】の手により、再び生を得ることができた。ライダー達への復讐がようやく果たせるのだ！！」

「地獄で大人しく寝ていればよかったのになあ」

「黙れデイクイド！私に下った命令は、お前達の始末。その減らず口、二度と叩けぬようにしてやる…来い！！」

ヤモリジンは笑い声を上げながら、ある存在を呼ぶ。

建物の影から、別の存在が現れる。

赤い複眼、赤いマフラー、イナゴに似たその姿…

その姿に、土とユウスケ、夏海は見覚えがあった。——と同時に、それはヤモリジンと共に存在してはおかしいものだった。

「なん、だと…！？」

「紹介しよう。この世界から得た被検体で作られ…【神】への服従を誓った改造人間！その名も——」

T o B e C o u n t e d …

次回予告

「ライダーを作るために大勢の人間を殺した、ということか」

「…【梅花の型】」

「夏海さん、士を連れてここから離れて！…俺なら大丈夫！！」

Episode 4：梅花の型

Episode 3：甦りし太陽（後書き）

あらすじが既にカオスな3話。

アポロガイスト、そして海東の言うネオショッカーのせいで混沌としてきましたよ…？

“スーパーはそもそも仮面ライダーになるはずではなかった”

これが、この世界のヒントかもしれないね。

それにしても、稲妻電光剣w

海東なら、やらかしそうで怖いな…

アポロガイストは、DCD本編に出てきたアポロガイストではないです。

かといって、原典である可能性も低い…

どこかの世界で、Xに倒されたアポロガイストなのでしょうね。

ラストに出てきたヤモリジンこと、ゼネラルモンスターもそんな感じです。

「お面でもつけてブイブイ」w

ケイスケww

敬一郎さんについては、原点の名前にしようと思ったら、色々とポピュラーな名前なのか…覚えている限りで3人はいるんですね。

神啓太郎

志度敬太郎

菊池啓太郎

左翔太郎

如月弦太郎…あ、最後2人は違ったw
結構「太郎」が多いので、ここはもう、「一郎」にしてしまおう…
ということにしました。

ちなみに、この星ノ宮町は…

何と、岡山県にあります。

岡山には星が綺麗に見える町があるそうなので、そっち系のネタで
岡山を選びました。

結果、……岡山進みすぎww

宇宙センターなどで考えるなら、鹿児島県の種子島だったのですが
…鹿児島県内での大騒動になってしまっているので、なるべくほぼ全国に
向かえる場所です。

後、鹿児島を外したのは、1号をそこで仲間になりたいからって言う
のもありますね

アポロガイストは頭を使って、確実に敬一郎を味方に引き入れよう
としていますね。

果たして、S-1が敵の手に渡って、その人間がスーパー1となる
のか！

それとも、別の誰かが…？

ちなみにスピノフで明らかになったとおり、

カズヤ↓赤心少林拳

ケイスケ↓中学→高校まで剣道、大学からフェンシング、たまに陸
上と映研のスタント紛い

なので、身体能力の高さは一般人よりバカ高いという。

特にケイスケが酷い。

前回、「土がオーズについて知りすぎている」という指摘をリマジ
オーズで頂いたので、カメンライドが出来ないことも含めて、今回
は昭和ライダーに関してそんなに詳しく知らない設定にしました。
自分が知らない世代のライダーでもあるので、尚更。

： 勿論、Heaven's 以来のWiki（+立ち読みしてきた
SPIRITS）便りです、今回。

カマキリガンやファイヤーコングの言っていた、「ゴッド」の正体。
それは、「ゴッドショッカー」のことだったんですね。

ちなみに名前に關しては

GOD機関：Government Of Dark（参考資料・
ガンバライド002弾のX）

ゴッドショッカー：God

という、神を名乗っているかいないかの微妙な違いですね。

ゴッドショッカーが【神】という名を冠している理由は、後々分か
ります。

そして仁ケイスケの苗字に神が使えなかった理由も、この部分が大
きいです。元々使う気もなかったですが。

さて、土達の目の前に出てきた緑のあんちくしょうは一体！？
ヒント：オーズ兄弟で若干酷い目に遭っている教師

Episode 4：梅花の型（前書き）

ラトラーター「これまでの、DCDRWは！」

ひとまず、ファイヤー・コング・カマキリガンを退却させた士とユウスケ。

ロクデナシ…ゲフン、

しがない旅人・海東大樹の話によると、ドグマ以外の怪人がいたとの事。

が、士は大して気にせず、医務室でサボリをする始末。

アポロガイストの魔の手が、既に敬一郎博士に及んでいたとも知らずに！

にもかかわらず、敬一郎博士を護衛しようと決める写真館トリオだった…

でも、そこへヤモリジンが…あるライダーを連れてきて、ディケイド達に勝負を挑んできた！

すごい展開になってきたな！

士「お前文章力ねえな！」

ラトラーター「と、思っただろ！」

士「は？」

ラトラーター「実は、今回ちょっとした仕掛けを取り入れてみたのだ！」

士「仕掛けだと？普通の稚拙な文章だろうが」

ラトラーター「柔軟な発想の破壊者ディケイド。いくつもの問題を
気難しく考え、その瞳は何を見る！」
士「何が言いたいのか大体分らん！」

Episode 4：梅花の型

ヤモリジンと共に現れた、仮面の戦士…

その姿に、士達は驚愕していた。

特に士はかつて、ディケイド激情態としてそのライダーと戦ったことがある。

だからだろうか。

その存在がヤモリジンなどと協力して戦っていることに、疑問を抱き、尚且つ不審に考えたのは。

「なん、だと…！？」

「紹介しよう。この世界から得た被検体で作られ…【神】への服従を誓った改造人間！その名も…スカイライダー！！」

スカイライダー、と呼ばれた存在は無言のまま、立ち尽くしているのみ。

…スカイライダーとヤモリジンは、敵同士だったはず。

それがどうして。

士がそう思っていると、海東の態度を思い出す。

『言わないでおくよ。もしかしたら、それこそ勘違いであるかもしれない』

あれは、士を焦らすために言ったと最初は思っていた。

だが…違った。

海東自身が、信じられないからこそ。

そして、本当に仮面ライダーの一人が敵の怪人——それも、かつて自分と死闘を繰り広げたはずの敵と行動を共にしている“動機”と“確信”がないからこそ。

「不確定な情報」を安易に流せないと判断し、焦らすような言動をしていたのだ。

士が舌打ちすると、背後にいたカズヤはスカイライダーを指差しながら、訊ねてきた。

「士。スカイ“ライダー”ってことは…あれも、士達と同じ仮面ライダー…？」

「ああ…そうだったはずだ！それなのに、何故…答えるヤモリジン。どうやってスカイライダーを操った…！」

「操ったんじゃない…改造したのさ！今度は、我々ネオショッカー…いや、ゴッドショッカー。そして、【神】に逆らうことがないようにな…！」

そう言い放つと、ヤモリジンは続けて説明を行う。

——そもそもスカイライダーに限らず、改造人間から仮面ライダーになった者は…その殆どが“脳改造”を免れていた。

脳改造さえ完璧ならば、ゴッドショッカーや【神】に逆らわず…戦力としても十二分の働きを見せてくれる。

三年ほど前からこの世界に人知れず行動を行い、新鮮な人体サンプルから冷凍保存されていた死人…“人間”という実験体を手し、改造人間としていた。

しかし、普通の怪人ならともかく…仮面ライダーを作るには、特別な人体サンプルでなければならぬ。

武術に秀でていたり、知力に秀でていたり、そのどちらにも秀でていたり。

普通の改造人間を作るために、10人の人体サンプルを使った。

一体の強力な改造人間を作るために、おおよそ100人の人体サンプルが犠牲になった。

そして仮面ライダーと呼ばれるようになった、改造人間を作るために500人近い人体サンプルがその糧となった。

「…このスカイライダーは、特殊なものでな。三年前の事故で死に冷凍保存されていた人間を使って作られた。普通なら、死体を使った奴は改造して動いた直後に駄目になるはずだったが、こいつはとても優秀で…何事もなかったかのように活動を開始した！」

「そ、んな…」

「そんなの…酷すぎます！」

「酷い？何を言う、人間など世界中に60億近くの数が、ゴミのように巢食っているだろう！数が1億近く減ったところで、何の問題もあるまい」

スカイライダーについての話を聞いたカズヤはうつ、と吐き気を催し…夏海は顔を青ざめながら叫ぶ。

しかし、ヤモリジンは悪びれる様子もなく、平然と言い放ったのだ。流石に…こればかりは我慢の限界だったのだろう。

士とユウスケは変身の準備を整え、『怒り』を露にした顔でヤモリジンを見据えていた。

「ライダーを作るために大勢の人間を殺した、ということか」

「そんなこと…許されるはずがないだろ！人間を…なんだと思ってるんだ！？」

「決まっているだろう…ゴミ以下の下等生物だ！」

「だったら、そのゴミ以下の下等生物に倒されるんだな…変身！」

「変身！」

『K a m e n R i d e D E C A D E !』

士はバックルにカードを装填し、ユウスケは出現したベルトの腰部分を叩く。

すると、士はディケイドに…ユウスケはクウガに変身する。

ディケイドはライドブッカーを取り出し、カードを一枚装填。

ライドブッカーを銃のように変形させ、そこから無数の弾丸を放つ。狙いは、ヤモリジンだ。

『A t t a c k R i d e B L A S T !』

「食らえッ！」

「くくく…甘いぞ、ディケイドオ！」

ヤモリジンは腕に取り付けられた鞭のような手で、銃弾を総て弾く。周囲に巻き起こった煙の合間から、クウガが飛び出し、パンチを放ってくるが…

彼とヤモリジンの間に入ったのは、スカイライダーだ。

クウガのパンチは軽く受け止められ、クウガは「くっ」と声を漏らしながら、スカイライダーに言い放つ。

「待ってくれ！俺は、あんたとは戦いたくない！！！」

「…」

「あんたも仮面ライダーなんだろう！？なあ、目を覚ましてくれ！！！」

「——無駄だ。そいつの脳改造は完璧…我々ゴッドショッカーに絶対的な服従を誓っている！それに、こいつは仮面ライダーではなく…ただの改造人間だ」

ヤモリジンは冷徹に言い放つ。

確かに、正義の心がなければただの怪人と代わりがない…

しかしライダーが敵になったというのは、少しばかり面倒だ。
特にユウスケは人がいい。優しさは時に油断に繋がり、自分の首を絞めることにもなりえる。

現にその優しさから、スカイライダー相手に振るう拳の勢いが鈍いのだ。

デイケイドはカードを一枚取り出しながら、クウガに叫ぶ。

「何やっているんだユウスケ、しっかりしろ！」

「だけど、土……」

「だったら、俺がそいつの相手をする！お前は、あっちのトカゲ野郎と戦え——！」

「わ、分かった」

クウガは多少戸惑いながらも、ヤモリジンのほうに向かっていく……だが、不安に思っているのはクウガだけでなく……実は夏海もなのだ。デイケイドは、仮面ライダーを破壊する存在。つまり、下手をすればスカイライダーを“破壊”しかねない。

——だけど、土君ならきつと。

夏海はそう信じていた。破壊せずに済む方法を取ってくれと。

デイケイドは取り出したカードを装填しようと、バツクルを開く。

「空を飛ぶライダーは、お前以外にもいるんだよ！」

デイケイドが持っていたのは、『Form Ride OOO-T
AJADOLE』

空中戦が可能で、更にタジャスピナーによって、遠距離攻撃の手段を持たないスカイライダー対策を取れるカードだ。

クウガはヤモリジンを抑えるため、パンチを放とうとする。

フェイントも何もない馬鹿正直な一撃。ヤモリジンはニタリと笑い、クウガの腹に蹴りを入れた。

「雑魚が！」

「うぐっ！？」

「…はっ！」

ヤモリジンは自身の右腕のリーチを生かして、ディケイドの手からカードを弾き飛ばす。

しまった、とディケイドは手を伸ばすが、先にカードをキャッチしたのは…よりもよって、スカイライダー。

スカイライダーは暫くカードを眺めた後、ヒュンと風を切るようにそれをヤモリジンに渡す。

「これで空は飛べまい！」

「つく…残念だが、まだあるんだ…これが！」

「Kamen Ride BLADE！」

「Form Ride BLADE-JACK！」

ディケイドは、ライドブッカーから別のカードを取り出し、カメンライドを行う。

——仮面ライダー・ブレイド…

更に、そこから姿を変え…金の翼を広げる、Dブレイド・ジャックフォーム。

ライドブッカーを構え、低空飛行をしながらスカイライダーに斬りかかる。

しかしその攻撃は軽くかわされ、隙だらけの腹部にパンチを叩き込まれてしまう。

軽く咳き込みながらも、「だったら」と相手がかわす隙がないほどの速さで連続斬りを行うが…

スカイライダーは突如、両手で花を描くような独特の構えを始め、電柱の影からそれを見ていたカズヤは目を見開く。

「…コオオオ」

「！あの構えは…」

「うおおおおおおおおおおッ！」

DブレイドJF、怒涛の連続攻撃。

スカイライダーは避けることもできず、棒立ちになっていた…わけではない。

襲い掛かるライドブッカーの一閃を総て、両手で受け流しているのだ。

まるで、梅の花を優しく包み込むように…

カズヤは「間違いない」と思い、ごくりと息を呑んだ後…呟いていた。

「…【梅花の型】」

「な、なんですか？それは…」

「俺が祖父から教えてもらった、赤心少林拳の奥義…梅の花を優しく包み込むように、相手の攻撃を受け流す守りの拳。——だけど、あれは…」

何かを言いかけたカズヤであったが、DブレイドJFの攻撃の手が止まり…スカイライダーのパンチが直撃してしまう。

DブレイドJFが吹き飛ばされた方向は、カズヤと夏海が隠れていた電柱。

「ぶつかる」

そう思った二人は、慌ててそこから逃げ出した。

その2秒後にDブレイドJFが電柱に激突し、電柱や壁の一部が崩れ、そのままカメンライドが解除されてしまう。

ディケイドは苦しそうに起き上がりとしていたが、その直後に、スカイライダーが重力低減装置でセイリングジャンプを行いながらの必殺技…スカイキックを浴びせてきた。

更なる追撃を浴びたディケイドは、今度は背後の壁すら突き破り完全に倒れてしまう。

「ぐがつ!?!」

「土!」

「土君!」

カズヤと夏海が、ディケイドに駆け寄る。

相当強いダメージを負ったのか、カマキリガンとの戦いのダメージも相俟って…土の変身が解けてしまう。

咳と一緒に真っ赤な血がアスファルトの道路に飛び散り、先程止血したばかりの傷も開いていた。

一方のスカイライダーは、ゆっくりと歩いてくる。ディケイドにトドメを刺すつもりなのだろう。

クウガはそれを見て夏海達に叫ぶが、その直後、ヤモリジンの腕の鞭によって首を絞められてしまう。

「土!…夏海ちゃん、逃げ!…ぐッ!?!」

「余所見をしている…場合か!」

「うわあああッ!」

クウガも派手に地面に叩きつけられ、ヤモリジンは数発ほど腕の鞭でクウガを殴った後、倒れたままの彼の心臓のある場所を力強く踏みつける。

ぐああ…クウガの苦しそうな叫びが、断末魔のように聞こえてきた。

ユウスケ、と夏海は叫ぶ。

そうしている間にもスカイライダーは迫っており、土と夏海を守るうと、カズヤは咄嗟に彼らの前に出た。

「俺が…相手だッ！」

「…」

…正直、土をあんなにも容易くあしらえる相手に、勝てる自信などない…

だが、自分がやらなければ夏海まで怪我をする。夏海は女性だ、男よりも体を覆う肉が柔らかい分、とんでもない大怪我を負う危険だつてありえる。

「カズヤさん！」

「夏海さん、土を連れてここから離れて！…俺なら大丈夫！！」

「…ガアアッ！」

スカイライダーは、カズヤに攻撃を仕掛ける。

夏海は彼に言われたとおり、土の肩を背負ってその場からゆっくりと離れていた。

その際、チラッと背後を振り返ると…

相手の攻撃を、相手が先程使ったものと同様の——しかし構えと攻撃を受け流す精度が完璧な【梅花の型】で、受け流しながら叫んでいた。

「なあ、一つ聞かせてくれ。あんたの赤心少林拳は、何処で学んだんだ！」

「…」

「赤心少林拳は、古来よりある武術だが…それを梅花まで習得でき

る人間は、ほんの一握りだ！よって、最後の口伝者は……沖波ゲンカイ師範のみだったはず！！」

「……」

「だけど、師範は10年前に他界した！師範の弟子の多くは梅花の極意を知ることなく……知っていたとしても、俺と俺の兄以外は有り得ないんだ！！」

直後、スカイライダーの放った、ドリルのように腕を回転しながら殴る“スカイドリル”がカズヤに放たれる。

梅花の型で受け流そうとするカズヤであったが、精神の乱れがあったのか、右腕に軽く掠ってしまう。

更に、そこから血飛沫が舞い……カズヤは腕を押さえながら、スカイライダーを見る。

——意思のない戦闘マシーン。

その例えが相応しいほど、彼には、感情もなければ己の考えすらない……目の前にいる敵は、ライダーであろうが人間であろうが滅ぼすために動く。

続けてスカイクICKの体勢に入ろうとし、あれを直撃されれば、いくらカズヤでも死んでしまう。

そんな時だった。

「やめろ。折角【協力】を取り付けたのに、こいつを殺してしまつては、どんな手に出るか分からない」

スカイライダー、そしてヤモリジンの元にやってきたのは……アポロガイスト。

その姿を見た士は、口から血を流しながら、信じられないような目でそれを見る。

ヤモリジンはフン、と腹ただしそうにながらも…クウガを蹴りつけ、彼もまた変身が解けてしまう。
ユウスケも、頭から流血しながらも、苦しそうにアポロガイストに言い放つ。

「お、前…【ライダー大戦の世界】で、死んだんじゃ…！？」
「何の話だ？私が敗北した好敵手は、後にも先にもXのみだが」
「ごたくはいい…揃いも揃って、何を企んでいやがる…ゴッドシヨッカーってのは、何なんだ！」

士も身を乗り出しながら叫ぶが、傷口からの激痛が激しく、すぐに膝をついてしまう。
ヤモリジンは人間の姿となり、カーキ色の軍服に身を包んだ男が現れる。

…ゼネラルモンスター。それが彼の名前だ。
ゼネラルモンスターは腕組みをしながら、士達に言い放つ。

「ゴッドシヨッカーとは、【神】が作りし集団。…先程も言ったが、我々は神の力で生き返り、我々を倒したライダー達への復讐を行ううとしている。その手始めに、この【ライダーのいない世界】で戦力を補強していたのだ！」

「【ライダーのいない世界】、だって…？」

「……ここは、【スーパー1の世界】じゃなかったのか…！？」

「スーパー1は元々、惑星開発用のサイボーグ…ドグマが地球に侵攻しなければ、そして“沖一也”という人間が進んで改造手術を受けなければ…それがドグマ・ジンドグマを倒すことも、仮面ライダーを名乗ることもなかった」

そう告げたのは、アポロガイスト。
更に、彼の話によると…

この世界はライダーが存在しない。それ故に、自分達の計画を阻止するほどの力はないと判断し……戦闘員補充の為の足がかりとして選んだ。

後は、ヤモリジン…もといゼネラルモンスターの説明に繋がる。

三年前からその下準備を進め、とりわけ優秀な人間は力の強い怪人や仮面ライダーとして改造された。

そうして戦力を拡大させ、ライダーの世界に侵攻を行い、圧倒的な戦力差で仮面ライダーを完全に根絶やしにする。

…それこそが、復活したヤモリジンらの望む“復讐”というわけだ。

その話を黙って聞いていた士は、眉を寄せながら言い放つ。

「つまり、ライダーに倒された逆恨みってことかよ…！」

「そういう者もいるだろう。現に私は、Xとさえ戦えればそれで構わない…しかし中には、復活させた【神】への忠義を誓う者…いつか【神】を出し抜き、自分がゴッドショッカーの大首領の座に就こうとしている者と様々だ」

「なら、そのライダーを使って支配するっていうのは…どうなんだ？」

「“従わせる分には構わない”…それが【神】の意味だ。それ以前に、コイツは仮面ライダーではなく、ただの改造人間。そう言っていたはずだが？」

ゼネラルモンスターの言葉に、士とユウスケ…夏海は敵意を剥き出しにする。

だが、逆らえるほどの力は残されていない。

カズヤも腕をタオルで止血しながら、スカイライダーを見ている。

そして、突然スカイライダーが変身を解き…その姿を見たカズヤの表情は、一変していた。

「…ヒロシ!?」

「……」

「検体名G - 0193のことか? ああ、そういえば、冷凍保存されていたネームプレートネームプレートの所に月島ヒロシという名があったな」

「…月島?」

「ってことは、あれは…」

「カズヤの、死んだはずの兄…!?!」

夏海が、ユウスケが、土が。

そして、カズヤも。

その場にいた総てが、ゼネラルモンスターの言葉に目を見開いた。しかしそれを聞いても、当の本人…ヒロシの方に表情の変化はないカズヤは「嘘だ」と何度も否定しながら、ゼネラルモンスター達に叫んでいた。

「嘘だ…嘘だ! ヒロシは、あいつは三年前の事故で死んで…棺に入られたのも、この目で見ていた! …… そんな、冷凍保存されていたなんて、…ッ」

「だが、実際に我々は冷凍保管室でこいつを発見し、スカイライダーとして改造した。知りたければ、自分で調べるんだな。最も生かして返すつもりも——」

「やめろと言ったはずだ。確かにお前に下った命令は、デイケイドとクウガの抹殺…だがそれで、私の任務の邪魔をされては困るのだから」

「…くっ」

ゼネラルモンスターは舌打ちしながらも、踵を返す。

アポロガイストもまた、白のマントを翻し、歩き始めた…

その後についていくようにヒロシも歩き始める。

「…ヒロシ！」
「……」

カズヤは彼を呼び止めるように叫んだが、彼は振り返ることもなく去っていく。

それをただ呆然と、見送ることしかできなかったカズヤ…
その場に座り込み、カズヤは突然笑い始める。

―死んでいたはずの兄が、改造人間になっていた

―心も感情も総て失くして、襲い掛かってきた

―しかも、死体は冷凍保存されていて、それを利用された
あまりにも色々ありすぎて、気が触れたのだらう。カズヤでなくても、おかしくなりそうだった。

「は、はは、…あはははは…」
「カズヤ」

「――なんだろう、士、…もう…ワケが分からない。どうしてヒロシが、……どうしてッ…！」

（
）
）

重傷を負った士とユウスケは、夏海とカズヤが何とか運んできていた。

特にユウスケのほうは、ヤモリジンとの戦いはかなりの激しいものだったのだろう……

霊石アマダムの方でも、完全回復までに時間が掛かっている始末だ。夏海はユウスケの手当てを、出迎えて早々運ぶのを手伝う羽目になった祖父・光栄次郎と、キバット族の白い蝙蝠・キバーラに任せ……士とカズヤの手当てを行っていた。

カズヤは士達ほど重傷ではなく、傷口を消毒して患部に薬を塗ったガーゼを貼りつけ、包帯で固定するだけだった。

しかし士は、カマキリガンとの戦いの傷も開いている。

ユウスケ同様に、すぐには動けないだろう。

「……ぐつ、……ナツミカン、もう少し優しくしろ」

「屁理屈言う元気があるなら、治りますね。……元気にならないと、笑いのツボです」

「いつもしてるくせに、こんな状態でもかよ……ッッ！」

「動かないでください！」

包帯を強く巻きつける夏海。

もう少し加減しろ、と言いたいが、ヘタなことを口走ればその時点で【笑いのツボ】が来る。

……それこそ、また傷が広がりがねない。

カズヤのほうがよっぽどマシだったと思いながらも、士は、ソファに項垂れるように座っていたカズヤに声を掛けていた。

「——カズヤ。お前の兄のことだが」

「……俺達兄弟は、本当は月島じゃない。あまぞら天空つて苗字だったんだ。だけど、俺達が3歳の頃に……両親は他界した」

その言葉に、士と夏海はカズヤの顔を見る。

いきなり過去を話し出した。そこにどんな意図があるのかは、夏海は全く分らない…

だが、士はちようど…カズヤから過去について聞こうと考えていたのだ。

再戦する可能性が高い相手。

ならば、相手の情報はできるだけ欲しい…それに、カズヤの過去を聞くことで、彼の迷いを受け止めようとしていた。

「俺達は、母方の祖父…沖波ゲンカイに預けられた。祖父は赤心少林拳の最高師範で、俺達は祖父に赤心少林拳を学びながら、過ごしていた」

けれども、その祖父も今から10年前に他界した。

さつきも言っていた通り、赤心少林拳の【梅花の型】は、それを習得できる人間は少なく…祖父が俺達以前に受け持っていた弟子達は、皆その極意が分からずにいた。

俺とヒロシが梅花の存在を教えてもらったのは、7歳の頃…

実際に教えてもらうに至ったのは、9歳の時だ。

冬の寒い日に階段上りの稽古をしていた時に、ひっそりと可憐な花をつけていた梅の花を見て、それを両手で優しく包み込むようにして手を添えたその時、影でずっと見ていた祖父が現れ…

『荒々しい戦いの中にあっても、なお梅の花を慈しむ心こそ“赤心少林拳”の心』

『怒りや憎しみのような心に囚われ、呪縛となって逃れられない心こそ、何にも耐え難い真の敵そのもの』

そう俺達に教えると、俺達に、梅花の型を授けてくれた。

まるで、赤心少林拳の心に気付いた俺達に、次代にその技と心を受け継がせる願いを込めたかのように…

祖父の死後、俺達は身寄りがいなかったことから、二人とも月島の家に養子として引き取られた。

月島の両親は父親が宇宙飛行士で、母親が天文学者。

根っからの宇宙一家だったものだから、当然家には宇宙の資料ばかりで。

それからだったかな。

ヒロシは自然と宇宙の方に興味を持って、『月に行って月の石を持って帰ってくる』『今いる場所とは違う、別の惑星に行って宇宙人と友達になりたい』って感じで。

俺は別にそれでもよかった。

ヒロシにはヒロシの夢があるだろうし、俺は俺で、赤心少林拳の心を広く教えるために…祖父の沖波流を受け継ごうとしていた。

…そして、あの交通事故が起こった。

原因は、運転手の居眠り運転…

運転手はアクセルを踏み続けたまま眠ってしまい、車は信号を渡っていた小学一年生の女の子のところに突っ込もうとしていた。

それを見たヒロシは、その女の子を助けようとして飛び出して…

女の子は車に衝突する寸前、ヒロシに突き飛ばされて無事だった。

だけど、ヒロシは車と正面衝突。

病院に搬送されたけど、病院まで後3分と言う所で、命を落とした。

…ヒロシが棺に入れられて、俺は泣き崩れて、三日ぐらい寝込んでケイスケの世話になっていたことは覚えている。

だけど、“ヒロシの棺がどうなったのか”は…まったく分からなかった。

きっと、焼却されて墓に埋まっているものだと思い込んでいた…

思えば月島の両親は…休みの日に必ず何処かに行っていて、俺はそれを墓参りだと思っていた。

…だけど、ヒロシの墓を見たら本当にあいつが死んでしまつと…

心のどこかで思っていたのか、なかなか一緒には行けなかった。

——でも、本当はヒロシの遺体は焼却されていなくて

——冷凍保存されていて

——そして、それを使って…あいつらは……！

その話を聞いていた夏海は、どうやっていいのか分からなかった。士もだ。

こういうときに、気の利いたことの言えない自分の天邪鬼さが嫌になってくる。

カズヤはソファアをドン、と怒りをぶつけるようにして叩く。そして…

「士には言ったよな。宇宙飛行士になって、宇宙に行くのが俺達の夢だって」

「ああ…。…もしかして、お前」

「俺はヒロシの求めた夢を、あいつのために叶えたい…そう思って、赤心少林拳の師範の夢を捨てた。だけど、…もう、どうしたらいいのか分からなくなったよ」

「カズヤ、」

「ヒロシは生きていて、だけど、本当は死んでいて…改造人間になつて、俺のことが分からなくなっている…」

カズヤは、混乱していた。

怒り。悲しみ。絶望。困惑…

答えの出ない感情に振り回され、どうしていいのか分からなくなっていた。

気が狂いそうな状態。何を仕出かしても、おかしくない状態。

「それに多分、月島の両親はヒロシが冷凍保存された理由を知っている。知っていて、俺に隠していた…俺以外の皆がそのことを知っているってなった時、もう、誰を信じていいのか分からなくて」

「……」

「カズヤさん…」

「…そしたら俺は、何のために自分の夢を捨てたのか…何のために……ッ！」

士も、夏海も、それ以上何も言えなかった。

言えるはずがなかったのだ。

今日会ったばかりの自分達に、カズヤの抱える問題を正しく答えられるはずがない。

むしろ、自分達も同じ状況に置かれたら、どうなっていたのか…その答えを出すことは簡単だ。『カズヤ同様に、激しく混乱するだろう』と。

誰も明確な答えを出せずに、時間だけが過ぎていく

——そんな時だった。

カズヤの携帯に、一本の着信電話が入ったのは。

携帯を手に取り、カズヤは通話ボタンを押す。その相手は…

「…はい、」

『カズヤ。夕飯出来たけど、何時いつぐらいに来れる？』

今のカズヤが唯一頼れる人間

…仁ケイスケだった。

T O B e C o u n t e d ...

次回予告

「一体、どういことなんでしょう」

「もし、お前らを馬鹿にする奴らがいたら、俺がぶっ飛ばしてやる。
昔みたいに」

「君の決意は、固いんだな」

E p i s o d e 5 : 固い絆

Episode 4：梅花の型（後書き）

ラトラーターは変なところで頭を使いすぎてゐるぞw
とにかく、あらすじからネタバレ満載の4話。

え、分からない？

ヒントは…こんな感じですかね

←

たしかに、普通に読んでいては分からないですね
てんさいじゃないと分からないんじゃない？いえいえ。

よく見てみると分かると思います。携帯だと少し分かりにくい
ですかね？

みなさん、もう分かりましたか？

スピノフでは（スカイライダーだけに）フライング登場していた、
天空ヒロシ

…もとい！

【月島】ヒロシ君です。

一応、見た目は高校生・実年齢はハタチという、某江戸川ピット並
みのギャップです。

いや、そこまでギャップはないのか…

作中でもありましたが、ヒロシはカズヤの兄で3年前の交通事故で
他界。

しかし遺体は冷凍保存されており、それをゴッドショッカーが利用
してスカイライダーに…ということです。

昭和の仮面ライダーは、約一部を除いて辛うじて脳改造を免れているんですね。

そして脳改造が成功していたなら、きっと「レッツゴー仮面ライダー」みたいにショッカーの一員としてその力を振るっていたことでしょうね。

勿論、ショッカーの世界制服を止める者はいないわけですから、瞬く間に世界制圧・1号や2号以降のライダーは存在しないことに…

タジャドルは不憫の象徴です（断言）

まあ、オーズばかりもアレだと思ったので、ここはブレイドで行きました。

一応カズヤの兄として、祖父の下で赤心少林拳を学んでいた設定であるヒロシ。

あれ…スーパー1のアイデンティティ…↑

でも武術の才能に秀でているのは弟・カズヤではあるんですけどもね。今後、赤心少林拳の技を多く出すのは、実際には……おっと。しかし、ディケイドまた電柱壊したなあww

さて！

ようやく1話の答え合わせと行きましょう。

正解は【仮面ライダーのいない世界】

ゴッドショッカーが介入してこなければ、仮面ライダーという存在が作られることは絶対になかった世界…ということなんです。

マスターハンドの意向で、ライダーを呼び寄せなければ仮面ライダーの存在すら浸透しなかったであろう、スマブラの世界と少し近いですね。

だってスーパー1はそもそも、【惑星開発用のサイボーグ】であって、アポロガイストの言うようにドグマが地球に侵攻さえしなければ、惑星開発用の改造人間としてその手腕を発揮していたであろう

改造人間。

つまり地球に侵攻しようとする敵がいなければ、（そして谷さんがいなければ）仮面ライダーを名乗ることのなかった“はず”なんです。

これに少し近いのが、深海開発用のカイゾーグであるXライダーですね。

ゴッドショッカーは、若干一枚岩ではなさそうですね。

しかし、「仮面ライダーへの復讐」の為に手を組んでいる。

…といっても、やはり【神】に我が物顔で指揮されることに不満を感じている者もいれば、アポロガイストのように自分の宿敵と戦えればそれでいい人もいます。

ちなみに、天空（と書いて『あまぞら』と読む）は…やはりスカイライダーだから、ということでした。苗字ですね。

両親は3つで他界して、

祖父は10歳で他界して、

17歳で唯一の肉親でもある兄も他界して、

しかもその兄は冷凍保存されていた上に改造人間にされて、

…カズヤの周囲が若干重いです。

そりゃあ土や夏海も、何も言えなくなりますね。

今回はケイスケ・ヒロシ・カズヤが友人付き合いを始めた理由が明らかになります。

そして

…がんばれケイスケ！

お前にカズヤの未来が掛かっている！！（あまり間違っていない）

次回予告で嫌な予感してますけどね。

Episode 5: 固い絆（前書き）

サゴーズ「これまでの、DCDRWは…！」

ディケイド達は、ヤモリジン率いるネオショッカー兵との戦闘に巻き込まれた。

しかし、そこで待ちうけていたのは、スイカ…違う、スカイライダー先生…

いや、これも違った！

スイカバー…

スイカ…

西瓜…

萃香…

S u i c a …

W a t e r M e l o n …

垂下…

水化…

垂加…

水火…

水禍…

誰何…

スイカアアアアアアア！どうしてもスイカって言うてしまう
ウウウウウ！！

ええい、とにかく某空飛ぶライダーが、ゴッドショッカーと共に襲

撃！

更には、カードを奪われたりと…相変わらず扱いが安定しまくっているタジャドルなのであった！！

サゴーズ「スイカの破壊者ディケイド、いくつものスイカを叩き割り、その瞳は何を見る！」

士「スイカ割ってねーよ！」

ユウスケ「嘘つけ、冬映画で破壊しただろ！」

士「あー、そういえばそんなスイカいたな」

この後、あらすじを担当した全員ライダー竹とんぼシュートを食らいました

Episode 5：固い絆

「——ふう」

夏海は、ばたんと扉を閉め、憂鬱な表情をしていた。

ベッドに寝ていた土は、眉間に皺を寄せながら、ゆっくりと起き上がる。

その際、傷口に鈍い痛みが奔ったが、土はそれを表情に出さないよう夏海に尋ねる。

「夏海。：ユウスケはどうだった」

「はい：おじいちゃんの話だと、傷は見たこともない再生力で治っているけれど：意識を取り戻すのは、まだ時間が掛かるって」

「そうか」

「それよりも、土君。：良かったんですか？カズヤさんのこと」

この部屋：この写真館の中に、既にカズヤはいない。

ケイスケとの電話の後、彼はこの写真館を出て行ったのだ。

：答えを、探しに。

恐らく、ケイスケと話しても何も解決しないかもしれない。

だが、カズヤのことを一番知っているケイスケなら：ヒロシの件で混乱しているカズヤを支えてくれるだろう。そう思った土が、「俺達のことはいいから行け」と言っただのだ。

夏海は不安な表情を浮かべながら、椅子に座る。

「…まだ、あのゴッドショックって人達がうろついているかもしれないのに…」

「今更そんなことを言った所で、何も知らずに安穩と暮らしていても、奴らに捕まって改造される人間だっているんだ…それに」

「それに？」

「アポロガイストの奴。あいつは、少なくともカズヤを殺さないようゼネラルモンスターを止めに来た。…ということはだ。カズヤには、生きてもらわなくちゃいけない理由があるんだろ」

…最も、その『生きてもらわないといけない期間』は、どのくらいまでなのかは知らないがな…

士はそう言おうと思った。

だが、それを言った所でこの怪我ではどうしようもない…それに、夏海を余計に心配させてしまう。

ならば言わないでいたほうが、いいだろう。

士はそう思い、代わりに、ふと疑問に思ったことを呟いていた。

「——しかし、再生怪人とはいえ、何故俺の手の内を…」

そう。

ゼネラルモンスターことヤモリジンは、士の手札を知っていた上で、タジャドルのカードを奪った。

お陰で、ディケイドの攻撃リズムが乱れ、スカイライダーの戦闘力の高さもあってかこちらのペースに持ち込めなかった…

それだけではない。

カマキリガンも、ディケイドにカードを装填させる隙を与えないほどの攻撃をしてきた。これは明らかに、“ディケイド対策”だ。そつえば、と、夏海もファイヤーコングとの戦いを思い出す。

「…確か、ユウスケが相手をしていたゴリラみたいな敵も…接近戦を主体にしていました。まるで、ユウスケに超変身をさせないような動きで」

「なら、そいつは“クウガ対策”を予め取っていた…いや、変身する人間のことは知っていなかったことから、ライダーの特徴だけは知っていたのか」

「一体、どういうことなのでしょう」

「さあな。考えられるのは、ライダーのことをよく研究してきたか…ライダーに詳しい奴が情報を与えたか、それとも…あいつらの崇める【神】は、本当に神様なのかもしれないな」

~~~~~

——月島夫妻に引き取られ、この星ノ宮町にやってきた当初、ヒロシとカズヤは虐められていた。

…血の繋がった親子ではないこと。

…3歳から10歳まで、青森の山奥で育ち『田舎者』扱いされたこと。

都会の子供に虐められる理由は、様々あった。

その気になれば、祖父から教わった赤心少林拳でいじめっ子達を追い払うことも出来た。

しかし、その祖父から厳しく言われていたのは…

『よいか。赤心少林拳は子供の喧嘩などで使ってはいかん、理由は分かるな』

ヒロシもカズヤも、拳法の腕前はかなり高く…特にカズヤには、祖父の血を濃く受け継いだのか武術の才能は突出している。

そんな彼らが、子供の喧嘩で拳法を使えばどうなるか。

…軽い怪我で済んだら、「運が良かった」と言えるほどだ。

流石に祖父の思いは無下には出来ないのか、ヒロシもカズヤも、ただひたすら我慢していた。

ある日。

学校で二人の机に陳腐な落書きがされており、酷いもので【死ね】と書かれているほど…

流石にシヨックだった。自分達は何もしていないのに。

しかし味方は誰もいない。虐める気のない子供も、いじめっ子グループの力が大きかったことから、「逆らったら何をされるか分からない」と怯えていたのだ。

その日はちょうど、自分達の一つ上の学年の先輩が…教室の改装工事——後で知ったことだが、クーラーの取り付けと新調したスピーカーの付け替え作業だったらしい——で、カズヤ達の教室を使うことになっていた。

頑張って消そうとしたが、油性ペンで書かれているせいでなかなか消えない…そんな時だった。一番乗りで、五年生が一人やってきた。カズヤ達の一時間目は、図書室で読書。階が近いことから、誰もまだ移動しておらず…クラスメートは全員驚いたような目でその五年生を見ていた。

予め自分の教室の席で座るように言われていたのか、五年生はカズ

ヤの席に向かう。

そして…

「…おい、何だこれ」

五年生が机の落書きを見て、険しい顔をする。

何とか必死に消そうとしていたが、無理矢理消しゴムで消した痕が残って余計に汚い。

更に、【いなかクセー】と書かれた文字ははっきりと残っており、「やべえ」とそれを書いていたいじめっ子グループは逃げ出そうとする。

だが、五年生はそれを見逃さなかった。

逃げようとしていたいじめっ子達を走って追いかけて、人混みを掻き分けながらも、リーダー格の大柄で体格のいい子を見事に捕まえる。そして、その子をカズヤのところに無理矢理引っ張っていくと、逃げないように左腕を掴んだまま、いじめっ子のリーダーに言い放つ。

「お前と、あと逃げた4人だろ。コイツと…それから、あそこの奴の机に落書きをしたのは。何でこんなことをした？」

「…だって」

「虐めなきゃいけない理由でもあったのか？どうなんだハッキリしろ！」

「…」

流石に、五年生で自分よりも力の強い相手に、いじめっ子のリーダーとも言えどもまるで赤子のようだ。

それから暫く沈黙が続く、五年生は溜息をつく、バチンと軽くリーダーの頬を叩いた。

いじめっ子は赤く痕のできた場所を手で押さえ、目を潤ませる。

しかし、五年生は尚も険しい顔で、言い放っていた。

「大した理由もないのに、相手が抵抗しないことをいいことに好き勝手しやがって。この机は、お前の家のものじゃない学校のものだ！それすら分らない馬鹿か！！」

「う…うう」

「今、叩かれただけで痛かっただろ？…虐められている奴は、お前らの倍以上痛い思いをしてるんだよ！叩く側は、叩かれる側の痛みを理解しないといけないんだよ！！」

それだけ言うと、五年生は…今度はカズヤ達のところに来てきた。カズヤもヒロシも、オドオドした様子で五年生を見る。五年生は腕を組むと、溜息をつきながら二人に尋ねていた。

「お前ら、名前は？」

「…天空…じゃなかった、月島…カズヤ、です」

「月島ヒロシ…です」

「“月島”？ってことは、…ああお前らか、月島さんが引き取った子供って」

五年生は、月島夫妻と面識があるようで、すぐに状況を理解してくれた。

——上級生の名前は、仁ケイスケ。

父親が科学者で、星ノ宮天海大学で深海科の教授をしているらしく…月島夫妻とも長年の付き合いなのだそうだ。

ケイスケは父親経由で、月島夫妻が双子の兄弟を引き取っていたことも…その兄弟の生い立ちも聞いていた。聞いていたからこそ、一つだけ疑問があった。

「お前ら、赤心…ナントカっていうのを習っていたんだろ？それで

追い払おうとか、思わなかったのか」

「……できないです。祖父から、きつく言われてましたから……」

「子供の喧嘩で、赤心少林拳を使うなって……それを使うときは、大事なものを守る時だけだって」

「……そうか」

それを聞いたケイスケは、優しく笑った。

そして、泣きじゃくっていたいじめっ子のリーダーと……後から教室に顔を出してきた他のいじめっ子達、それからクラスの全員に、言い放つ。

「——こいつらのほうがよっぽど分かってる。無意味に手を挙げたら人を傷付けるって、分かってる。……お前らはこいつらの優しさに胡坐を掻いて、調子に乗って虐めたり……見てみぬフリをしたり！恥ずかしくないのか！！」

「……」

「今度こいつらを虐めたり、誰かが虐められたりしているのを無視してみる。……その時は、本気で怒るぞ！」

……それが、ケイスケとの出会いだった。

正義感が強くて、他人ともすぐに打ち解けられるような性格だった。ただ熱いだけじゃなく、思慮深い一面も持っていて、よく相談にも乗ってくれたりしていた……

——カズヤは今、ケイスケの自宅の前にいる。

あの事件で知り合ってから、ヒロシとよく遊びに来たりしていたし……たまに夕飯と一緒に食べたりしていた。

いつもなら気軽にチャイムを鳴らせる。家の中に入れる。

だが今は、玄関だけでなくチャイムすら遠く感じる…

そうしていると、窓から見て家の外にカズヤがいると分かったのか、ケイスケの方から玄関の鍵を開けた。

「どうしたんだ、カズヤ。そんなところで」

「ああ、うん、ちよつと…」

「いいから入れよ。もう、オムライス用意してあるぞ」

うん、とだけ返すと、カズヤは仁家に入っていく。

父親と二人暮らしだそうだが、部屋は随分と広い…前にケイスケから聞いた話だと、地下には地下で父親の研究所があるようだ。

ただし、そこは鍵が掛けられていてケイスケでも入った事はないそうだが。

リビングの方に歩いていくと、ケイスケの宣言通り、二人分のオムライスが作ってある。

カズヤは席に座ると、黙ってケチャップを取ろうとする。

…だが、手が震えているせいでうまく取れず、ケチャップは倒れてしまう。

「カズヤ」

「あ、ごめんごめん…」

「…何があつた？」

その問いかけに、カズヤはどきりと胸を弾ませる。

どうやら、彼が来た時から浮かない表情をしていたことで、何かあったのだと察していたようだ。

…隠し通せない。

昔からそうだった。何か隠していても、ケイスケにはすぐ分かってしまう。

カズヤは数秒黙った後、ケイスケが帰ってから起きたことを総て…

話していた。

ヒロシが生きていた、否、冷凍保存されていたことはケイスケも知らなかったようだ。

更に、その体をゴッドショッカーが使い、人体改造をしたこと…

“スカイライダー”という改造人間となって、襲いかかってきたこと…

ケイスケはただ、黙って聞いていた。

信じてもらえるか不安だった。何せ、死んだと思っていた人間が襲い掛かってきたなど、冗談としか言いようがない。

…だが、ケイスケは【冗談】で言い表すことが出来ない事態に、直面していた。

何度も頷きながら、俯いたままのカズヤに告げた。

「どうしたらいいのか、何を信じていいのか分からない…か」

「……うん」

「そりゃあ、信じられなくて当然だよな。分からなくなって当然だ」

ケイスケはそう言いながら、目を瞑る。

氷と麦茶の入ったグラスが、カランと音を立てる…

——自分も同じ立場だったら、恐らく、混乱する。

ケイスケはそう考えていた。事実、祖父の元で鍛錬を積んでいたカズヤですら、この始末だ。

同情でどんな言葉を並べても、それは所詮、『カズヤの立場に立っていない人間の綺麗事』なのだ。

士達もそれを分かっていたからこそ、言わなかったのだろう。

そう思うと、ケイスケは真っ直ぐにカズヤを見、「だけど」と声を発する。

「だけど、… たった一つだけなら、信じられるものはある」

「それって… 一体？」

「自分だよ」

信じられるのは自分。

それを聞いたカズヤは、一層戸惑っていた。

だがケイスケは、スプーンでカズヤを指しながら言い続ける。

「お前は今、どうしたい？ その事実を聞いてなお、お前自身はどうしたいんだ」

「俺自身が… どうしたいか…」

「ヒロシが冷凍保存されていて、改造された。月島の両親が何故、自分に内緒で冷凍保存なんてしたのか。ヒロシが生きていて、そしてたらあいつのために夢を諦めた自分はどうすればいいのか」

「…」

「そんなのはどうでもいい。“ヒロシが悪者に操られていて”、それを“お前がどうしたいのか”… まずはそれを考える。その後のことは、それからだ」

迷いのない言葉。

だが、様々な情報が一気に入ってきて、錯乱していたカズヤの頭に… その単純明快な【問い】は、情報を一旦リセットさせた。

確かに一番重要なのは、その二つだ。

冷凍保存の真実や、月島夫妻がそれを黙っていたことは、気にはなるが後で本人か… 知っていそうな敬一郎に聞けばいいだけの話。

… 今は、カズヤ自身がどうしたいのか。改造人間となったヒロシの為に、何が出来るのか。

答えはすぐに出た。しかし、その答えを実行できるだけの力は、今

のカズヤにはないこともすぐに理解できた。

「……俺、ヒロシを止めたい。止めたいけど、…今の俺の力じゃ絶対に…止められない。助けることも出来ない」

「カズヤ」

——そう、今のヒロシを相手に、俺が止められるはずがない。

——あの土でさえ、止めきれなかったのに。

必要なのは、スカイライダーと対等に戦えるための“力”、そして“体”。

攻撃の殆どは、赤心少林拳【梅花の型】で流せる。だが、それだけでは止められない…自分の声すら届かなかったスカイライダーには、防御を取りながらの説得は無意味。

それに、体だけはどうしようもない。現に人間の体は脆く、攻撃が掠っただけでも血が出ていた。

…その上、万が一説得して戻ったとしても…ヒロシが改造人間として生き返ったのは、どうしようもない事実。

彼のことを考えると、カズヤの答えは決まった。

「もし、もしもの話、…俺が…あいつを止める為に、敬一郎さんにS-1にしてくれて頼んだら、お前はと思う」

その言葉に、ケイスケは目を見開く。

S-1を志願すると言うことは、自分も改造人間になるということだ。

つまり、人間には戻れない道なのだ…

流石にそればかりは、ケイスケも制止に入った。しかし、カズヤの考えは変わらなかった。

「…S-1を使うのか？ヒロシを止める為に…それがどうい

となのか」

「分かってるよ！分かってる、もう二度と普通の人間には戻れない  
ってことも分かってる！！だけど、そうでもしないと今のヒロシは  
止められない……それに、」

「……」

「それに！……俺が人間のままで止めて、運よくヒロシが元に戻っ  
てくれたとしても……それでヒロシが人間に戻れるわけじゃない。一  
度死んでいた事実が変わるわけじゃない！！」

ヒロシが、人の生命の理から外れたのなら。

……総てが終わった後、ヒロシは一人になってしまう。

改造人間になってしまえば、人と違う力に苦しむことも当然だが、  
歳も取れるかどうか……

そうなった場合、ただでさえ三年間の空白があるというのに、ヒロ  
シは完全に取り残されることになる。

“時間”という、どうしようもない流れの中に。

「そうなったら、……それこそヒロシはずっと一人で、生きていかな  
いといけない。改造人間として、孤独に生きていけないといけない」  
「……」

「……その力で人を傷つけた記憶を刻みつけたまま、長い時を過ごさ  
なくちゃいけない！……だってらせめて、……俺だけでもあいつと  
一緒にいてやりたい。あいつ一人、苦しませたくない」

死んだ兄の為に夢を捨て、

その兄の為に人間であることも捨てることになる。

……そんな生き方、普通なら猛反対を食らうだろう。敬一郎も恐らく、  
この場にいたらS-1にしたいとは言わない。

むしろ、最初からカズヤは候補から外していたのだろう。

ヒロシの夢の実現を現実なものとする、惑星開発用システムの改造人間候補から…

しかし今は違う。

「俺は、…腕一本失わせてでも、ヒロシを止める気でいる。あいつと戦う覚悟は、出来ている」

「カズヤ」

「あいつが俺を傷つけた苦しみを背負うなら、俺はあいつを傷つけた苦しみを背負う。だから俺は、改造人間になるんだ…それが、今…俺が一番やりたいことなんだ！」

コップの中の氷が、完全に溶けた。

それほど、時間が流れていたのだろうか…

ケイスケはただ、黙って聞いている。

…無理もない。自分の出した答えは、他でもなくケイスケへの裏切りにも近いだろう。彼の父親の夢の結晶を、兄弟喧嘩の終結のために使うなど。

カズヤは、ケイスケに嫌われることは覚悟していた。だが

「…ごめん、ケイスケ。軽蔑するよな。……人類の希望でもあるS

-1を、こんな」

「——いいんじゃないのか」

「え」

「お前が決めたことだろ、俺にはとやかく言う権利はない。それに、お前に『自分を信じる』って言うておいて、……今更信じるなって言えないしな」

ケイスケの答えは、予想外のものだった。

彼は、カズヤが改造人間となることを肯定した。

…だがそれは、カズヤが自分で考えて決断したからこそ。覚悟を決

めたからこそ。

大した理由もなく「改造人間になりたい」、だったら、今頃ビンタで張り倒していただろう。

ケイスケは麦茶を一口飲むと、コップを置きながら、カズヤに告げる。

「だけど、一つだけ。……お前もヒロシも、俺の弟みたいな存在だ。改造人間になってもそれは変わらない」

「ケイスケ……」

「もし、お前らを馬鹿にする奴らがいたら、俺がぶっ飛ばしてやる。昔みたいに」

はは、と軽く笑うケイスケ。

その言葉に、カズヤは目を潤ませる……

時間の止まってしまった自分達。時間の動きがあるケイスケ。

普通だったなら、自分との時間の流れの違うものを畏怖し、嫌悪する。それが人間だ、人間の心の弱さだ。

しかしケイスケは、違う。

例えば自分も一緒に非難されることになったとしても、二人の味方であり続ける。

それが『昔みたいに』という言葉に詰まった、ケイスケなりの覚悟だった。

「俺だけが爺さんになって、お前らが今のままの姿であつたとしても、ずっと親友だ。住む場所がなくなつたとしても、俺はお前らを受け入れる」

「だから、……絶対に……二人一緒に帰って来いよ。その時、また、お前らの好きなもの作ってやるからさ」

その言葉に、…カズヤは完全に涙を流していた。  
申し訳なかった。天空の両親から貰った、人としての体を捨てるこ  
とに。

嬉しかった。人でなくなったとしても、自分達を受け入れてくれる  
場所があることに。

——相談してよかった。

——ケイスケと出会えてよかった。

恐らく相談していなかったら、自分は迷い続けていた…そして、意  
思を持たないヒロシに殺されるか、何も出来ないまま後悔するかだ  
った。

そもそも、あの時、ケイスケと出会ったことがなかったら…

「……ケイツ、…ごめん…ありが、とう……！」

「いいから、行くならオムライス食ってから行けよ。食べてからで  
も、遅くないだろ」

「…うん、…ぐすつ、…ひっぐ…！」

〃  
〃  
〃

夜も更け、星が疎らに見え始めていた。

星ノ宮町では、昔から星が綺麗に見えると評判だ…

町長がこの星空を美しく思い、昔ながらの星空を守る為に、環境には気を使っている。

そのため、星ノ宮町の空は昔と変わらず、綺麗なままである。

——星ノ宮天海大学。

その技術室で作業をしていた敬一郎の前に、一人の影が現れた。  
…カズヤだった。

こんな時間に何をしているのか。

そう思っていたが、カズヤは真剣な顔で敬一郎に告げていた。

「…敬一郎さん、お話があります」

「どうしたんだ、こんな遅くに。忘れ物でも…」

「……ヒロシのことです」

その言葉に、敬一郎は目を見開いた。

カズヤは少し間を置いた後、今日あった出来事を総て話していた…

——ゴッドショットカーは敬一郎の作ったS-1システムを狙っていることを。

——ヒロシを冷凍保管室から盗み出し、改造人間として兵力の糧としていること。

——そして、ヒロシを止める為にS-1への改造を志願したいと言うことを。

敬一郎は、いくら理由があるとはいえカズヤをS-1にするわけにはいかなかった。その場限りの時間稼ぎとはいえ、既にゴッドショットカーに魂を半分売ってしまった身としても。

だが、カズヤは考えを断固として曲げなかった。それどころか、強い意思を秘めた目で敬一郎を見ている。

「分かっているのか、S - 1は」

「——分かっています。でも、決めたことですから」

「だが…カズヤ君」

「確かに俺は、ヒロシを止めたいからS - 1になる。あいつを一人に残せないから、改造人間になる。でも、…改造人間になっても、帰る場所はちゃんとありますから」

その言葉に、敬一郎は眉を寄せた。

改造人間となった人間…特にS - 1への改造を施された者の行く場所は、星ノ宮ロケット発射場か、宇宙衛星センターだ。

だが、カズヤはそのどれでもないと言う。

それが気になって、敬一郎は、尋ね返していた。

「それは…一体」

「ケイスケのいる場所。約束したんです、二人一緒に帰ってくるって……そしたら、ケイスケが俺達の好きな蟹玉チャーハン作ってくれるって」

「そうか、ケイスケが…そんなことを」

「だから絶対に、ヒロシを連れて帰りたい。そのために、……お願いします！俺を、改造人間にしてください！！」

カズヤは、勢いよく頭を下げる。

敬一郎としては、カズヤを改造人間にすることは断固として反対だ。…しかし、ゴッドショッカーは大掛かりな誘拐だけでなく、冷凍保管室のコールド状態の人間をも使ってまで改造人間勢力を増強している異常性を持っている。

それに、約束を違えたのかそれともアポロガイストとは別の敵の独断か知らないが、カズヤやケイスケにも襲い掛かっていた事実。放っておけば、世界は終わる。

それだけではない…このままゴッドショッカーに完全に協力してし

まえば、S - 1 も“アレ”も、他の世界の命を根絶やしにするための兵器にされてしまう。

敬一郎はカズヤから背を向け、静かに話し始めた。

「…元々、S - 1 の改造を施す予定だった人間は、……ヒロシ君だった」

「ヒロシに？」

「月島夫妻から頼まれたのだ。ヒロシの夢のためにも、そして、カズヤが自分の夢を犠牲にしなくて良くなるように、ヒロシをS - 1 にしてくれ…」と

敬一郎の話によると…

月島夫妻は、ヒロシが完全に死んでしまったら、それこそカズヤは天涯孤独となる。

それどころか、兄思いの彼のことから、自分の夢を捨ててヒロシの夢を追いかねないと。

それを危惧して、敬一郎が開発していたS - 1 にヒロシを使って欲しいと、遺体を冷凍保存していたそうだ。

頼まれた当時は、多少を惑ってはいたものの…最終的には二人の説得で、それを了承していた。

——だが、その数日後に冷凍保管所から『遺体がいくつか盗まれた、その中にヒロシの遺体が含まれている』という連絡が入り…

結局、ヒロシにS - 1 への改造技術を施すことは出来ず、月島夫妻は休みの日も使い、出来る範囲で搜索していたそうだ。

「……そう、だったんですか」

「すまない。だが」

「もういいです。どんな形であれ、ヒロシは生き返った…後は、…  
…あいつを取り戻すだけです」  
「君の決意は、固いんだな」

ヒロシの為に使われるはずだった、S - 1システム。

しかし、そのS - 1システムは弟であるカズヤが、改造人間として  
利用されるヒロシを止める為に使うことになる。

運命とはなんと皮肉なことか。

敬一郎はそう思いながらも、S - 1もヒロシもこの世界も、そして  
息子・ケイスケのことも彼に託すしかない自分を嘲笑うかのように、  
苦い顔をしていた。

「だが、本来S - 1は戦闘用ではない。ただ、普通の人間よりは頑  
丈である程度だ」

「分かっています」

「それから、…両腕にはファイブハンドと呼ばれる機能がつけられ  
ているが、…それは手術を行いながら説明しよう」

「…はい」

「では、——行こう。カズヤ君」

敬一郎はそう言うと、カズヤをS - 1用の改造手術室に案内する。  
だが…

その話を機材の影から聞いていたのは、海東だった。

「…S - 1の候補が見つかったのか。さあて、…どうしたものか  
な」

T O B e C o u n t e d …

\*\*\*

〈次回予告〉

「挑戦<sup>ラブレター</sup>状とは、随分と古風な真似をするな」

「…カードが、使えない…!？」

「情報どおり、裏切ったな。仁博士!」

E p i s o d e 6 : その名はスーパー1

## Episode 5：固い絆（後書き）

スिकासイカ言うなw

そんな前書きです。

本気でベクトルの方向性が、本編と魔逆なオーズ兄弟…今回は、シリアス話をやらかしたシャウタだよ！↑

ユウスケの傷については、アークルひいてはアマダム効果によるものです。

しかし、それでも意識は失ったままという…

ゴッドショッカーがディケイドの対策をしてきた理由として正しいのは、次のうちどれでしょう！（発覚するのは14話目です）

1・【神】がディケイドについて詳しくった

2・鳴滝が情報を売った

3・スーパーショッカーの残党or大ショッカーの残党が情報を漏らした

4・大ショッカーのデータベースをハッキングして、ディケイドの情報を詳細に得た

5・リイマジの中に裏切り者がいる

ちなみに、このうちの1つは次回で外れることになりそうです。

天空兄弟が青森で育てられて、岡山に来た理由としては…

・元々天空夫妻は岡山で暮らしていた

・血の繋がった母親と月島の母親が学生時代の友人で、月島の母親は生まれつき子供の出来ない体で、近々天空の母親が自分の子宮に

月島夫妻の精子と卵子を入れて変わりに産む予定だった

・しかしその前に、天空夫妻が事故で死亡

・唯一の肉親であるという、青森にいる祖父の下に兄弟が送られることに（この時、月島夫妻も葬式に参列していた）

・だがその祖父も10年前に他界

・その葬式の際に、施設に送られる話が出たが、その前に月島夫妻が養子縁組の手続きを行い、月島家に引き取られることに

…ということですよ。

しかし、天空のお母さんは赤心少林拳の師範代の娘ってことになるんですよ…

名前は義経でしょうか（笑）

ちなみにこの二人の、虐められていた時の対処としては

ヒロシ↓悲しい感情を抑えて、笑顔で黙って落書きを消したり、カズヤを励ましたりしていた

カズヤ↓悲しいという感情は表に出ていたが、それを堪えていた  
どちらも、大人に相談することはしませんでしたね。

基本的には、月島の夫妻にはあまり負担は掛けられないのか、自分達で済ませられるものは自分達で、と考えていたのでしょうか。

なお、予備知識としましては、レモンなどの柑橘系だと油性ペンの落書きは消しやすいです。

書かれた対象にもありますが、

消しゴムでも、一応摩擦の力で消せることは消せます。ただしこちら、紙なんかだと消えないです。

学校の机のように、つるつるしたものなら消しゴムでも消せますよ。

ケイスケは色々顔が広いです。

主に、父親のお陰でw

彼の顔の広さは、今後でも色々出てくるでしょうね…色々…

…ちなみに、敬一郎もカズヤも嘘をつくのが下手ですが、ケイスケの方がもつと下手くそなんですよw

後は、相談役としてもそれなりに。

ただし相手の辛い過去や状況を受け止められる反面、自分の事に関してはかなり脆いです。

それなりにケイスケもトラウマは持っています。

相談できない悩みを抱え込んでいます。

持っているのですが、抱え込んでいるのですが…それは、追々。

カズヤは兄のために色々と捨てすぎのような気がします。

自分の夢を捨てて。

自分の体を捨てて。

まあ、少なくとも人の体は捨てないとS-1にはなれないのですが

…↑

この辺は、“人類の夢のために”という明白な希望を持っていた、  
沖さんとは違う部分ですね。

…しかし、それと同時に、カズヤの周囲は死にすぎのような気が  
(色々な意味で)

月島兄弟の好物は蟹玉チャーハンです。

いや、何となく。

この間、ある店で蟹玉チャーハンを食べたのですが…塩味ベースでしたけど、凄く美味しかったです！

…これは関係ない話ですね(笑)

結構「何となく」で話を作ったりするのですが、それでも意外と…  
という…

執筆時点では、蟹玉チャーハンの材料を詳しくは知りませんでした

次回（次々回？）、ドS先生VSスイカ先生の白熱した戦い  
…違った

DCD冬映画で激情態に殺られた二人組

…これも違った

スーパーになるはずだった男と、スーパーになってしまった男  
の戦い！

## Episode 6：その名はスーパー1（前書き）

シャウタ「前回までの、DCDRWは！」

ゴッドショッカーの襲撃により、タジャドル誘拐！

いくら頭が、アポロガイストに似ているからって…

いくら優遇されているからって…

いくら作者が、初めて被ったLRだからって…

いくら作者が、最初に引いた金ぴかチェンジカードだからって…

その結果、三回連続で俺にコンボチェンジする暴挙をしたからって

…あ、ちなみに俺はプティラが多かったよ？

タジャドル「こんなのってないよ、あんまりだよ！」

電柱の破壊者・ディケイドこと士の辺りは端折って

士「ワケが分からないよ」

一方で月島ヒロシは、悩んでいた。

どうすれば兄を救えるのか。

どうすれば兄を止められるのか。

そして、その考えの末に辿り着いたのは…

敬一郎「来たのかね」

カズヤ「はい…俺、ようやく、決まりました」

敬一郎「そうか…君は、どんな祈りでそのソウルジェムを輝かせるのかね？」

カズヤ「——俺は、ヒロシを救いたい。そして、ケイスケに守られ

るだけじゃなくて…ケイスケを守れる自分になりたい！」  
敬一郎「おめでとう、カズヤ君。君の祈りは、エントロピーを凌駕した…！」

シャウタ「存在の破壊者、ディケイド。自らの存在すら破壊し、その瞳は何を見る！」

士「待て…まだ！まだ存在しているぞ俺は、っていうか、俺が主人公だ…！」

シャウタ「嘘つけ、主人公らしい出番なんて2話だけしかないくせに」

士「うがあああああああああ！」

## Episode 6：その名はスーパー1

翌日…

朝日が、カーテンの隙間から差し込んでくる。

台所では包丁の音が聞こえる。恐らく栄次郎が、いつものように笑顔で料理をしているのだろう。

トン、トン、トン。

それはまるで音楽を奏でるかのように、軽やかで素敵なものだった。これが、日常の音。

そして…“ガコン”と郵便受けから聞こえてきたのは、日常でもなんでもなく、非日常の始まりを告げる音だった。

光写真館は基本的に、世界中を移動している。よって、住所などあつてないようなもの…郵便が届くとしても、宛先不明で済まされるはずだ。

不思議がつて夏海が郵便受けを見に行くと、中には1通の手紙が入っていた。

夏海は、土の眠っている部屋に入る。

丁度起きたところだったのか、包帯の上から服を着ていた土…

「きゃあ」と夏海は土から背を向けるが、土は心外だと言いたげな顔で、反論していた。

「俺の裸なんて、昨日手当てしている時にも見ただろうが」

「そ、それはそうですね、…じょつ、…女性が入ることも分からないで堂々と着替えているなんてツツ」

「お前だって、俺が着替えている可能性ぐらい考えろ。つか、ノックぐらいしろナツミカン」

夏海です、と反論を返すと、土に背を向けたまま手紙を差し出す。土に手紙が届くなど、全く持って珍しい。

光写真館は住所不定に近いが、土に手紙を書く人間など珍しいにも程がある。

夏海から手紙を受け取り、封を開ける土。…そして、真剣な表情でそれを読んでいた。

「…」

「どんな手紙だったんですか？」

「気にするな。単なる、ラブレターだ」

「ら、ラブ…ッ!？」

——土君が、ラブレター。

そんな。

それこそもつとありえない！

夏海は好き勝手文句を言っていたが、土は軽く流すのみ。

しかし、手紙を見る目は至って真剣で…夏海に奪われないうちに懷に隠すと、怪我をしているままの体で“待ち合わせの場所”まで向かっていた。

「どうした、俺のような男にラブレターを出す女なんて、いてもおかしくないぜ？」

「そ、そうかもしれないですけど…でもつ、土君みたいな人にラブレターだなんて…物好きすぎます!」

「随分な言いようだな。まあいい、お前はユウスケの看病でもしてるんだな、ナツミカン」

「あつ、土君！そんな体で何処に…」

夏海は引きとめようとしていたが、土は既に立ち去っていた後。

まったくもう、とぷりぷり怒りながらも、夏海は土がラブレターを貰った事実、ちょっとだけがっかりしていた。

そんな彼らのやり取りを、一部始終聞いていたのか…キバーラはクスクス笑いながら、夏海をからかう。

『あらあ？夏海ちゃん、ひょっとして焼きもち？』

「そ、そんなことないです。…それよりキバーラ、ゴッドシヨッカイって知ってます？」

『全然聞いたことないわ。何なの、それ？』

キバーラは元々、鳴滝の仲間。

ならば、“ゴッドシヨッカイ”についても詳しいのでは…と思った夏海。

しかし、キバーラは体全体を横に振って否定。

嘘をついているような感じではない。恐らく、本当に知らないのだろう。

「いえ、知らないならいいんです。…」

『もしかして、ディケイドやユウスケが大怪我して帰ってきたことと、関係あるのかしら？』

「はい。今度の敵は、そのゴッドシヨッカイらしくて…とにかく、謎が多いんです」

大シヨッカイ、スーパーシヨッカイの残党でもなく。

ディケイドに敗れたはずのアポロガイストも復活、しかし何処か別人。

【神】と呼ばれた、ゴッドショッカーの大首領。

…総てがすべて、謎なのだ。

そうしていると、突然部屋に灰色のオーロラが出現し、現れたのは

…鳴滝だった。

彼はかなり焦っているのか、それとも何かから逃げてきたのか、額には大量の汗が伝い…服も乱れている。

「鳴滝さん！」

『どうしたのよお、鳴滝さん』

「夏海君…今すぐ、私と共に来るんだ！早く！！」

鳴滝は脇目も振らず、夏海の腕を掴む。

夏海はその奇怪な行動に、反射的に抵抗してしまう…

一方でキバーラも、鳴滝の強引なやり方に非難の声を浴びせる。だが、鳴滝は強引に夏海をオーロラの奥に引き込もうとするばかり。

「きゃあっ！？」

『ちよつと、鳴滝さん！いつになく強引じゃない？』

「いいから早く、…先程【アギトの世界】がゴッドショッカーの襲撃を受けた！それだけではない、他の——」

その時だった。

夏海を掴んでいた手に、ビシッ！と銀色のメダルのようなものが当たる。

その痛みで、鳴滝は夏海から手を離してしまうが…それを見計らっていたかのように、オーロラの奥から、突然腕が

伸び…鳴滝はオーロラの中に引きずり込まれてしまった。  
しかもその腕は、——ディケイドのものと酷似している。  
酷似していたが、色は、マゼンタの部分が黒に近い灰色となっている。

「うつ、……うわあああああああ！……！」

「鳴滝さん……？」

『…誰！？』

夏海が消えたオーロラを呆然と眺めていると、キバーラがメダルの  
投げられた場所に隠れている人物に叫ぶ。  
彼女も遅れて背後を振り返ると、

——そこには、一人の人間が立っている。

しかもその顔は、夏海達にとって見覚えのある顔だった。

「あつ、あなたは……」

「…大丈夫？」

~~~~~

星ノ宮ロケット発射場。

ここはロケットの発射場があるだけでなく、学術資料用の“星ノ宮

宇宙博物館”や制御室など、色々な建物が存在する。カズヤの母親は天文学者、父親は宇宙飛行士として、ここで働いている。

士はマシンディケイダーを所定の駐車場に停めると、ロケット発射場の前で待ち構えるゼネラルモンスターとアリコマンド集団に言い放つ。

「挑戦状^{ラフレター}とは、随分と古風な真似をするな」

「ほう、約束どおり一人で来たのか…ディケイド」

「お陰様で、ユウスケの意識がまだ戻らないんだよ。海東の野郎は、今頃何をしているか分からないしな」

士は仕方のなさそうな顔で、ゼネラルモンスターに言い放つ。

…届いた手紙の内容は、こうだ。

『ディケイドよ 星ノ宮ロケット発射場前にて待つ』

『必ず、一人で来い』

『制限時間はこの手紙が届いて、一時間後』

『時間までに来なければ、また、約束を破れば…その時点で発射場を爆破させる』

『万が一にでも発射場が爆破すれば、その周辺の建物はどうなるか。【破壊者】である貴様なら、分からないはずはないな？』

…確かに、発射場を爆発されたら、その周辺への被害は甚大だ。

それだけではない。

今の時間でも働いていたり…中にいる人間も、少なからずいるだろう。

多くの犠牲を生まないために、士は一人で行くしかない

——否、士本人が言ったとおり、ユウスケも海東も当てにできないので、一人で来ざるを得ないのだ。

「ったく、昨日の今日で飽きない奴らだぜ」

「その減らず口を叩けるのも、今日までだ」

「どうだかな。少なくとも、それと同じことを言ったカマキリ野郎は…鉄くずになったがな！変身！！」

『K a m e n R i d e D E C A D E !』

士はディケイドへと変身し、ゼネラルモンスターに向かっていく。

だが、それを遮ったのはアリコマンド…

くそつと舌打ちをしながらも、ディケイドは“アタックライド ス
ラッシュ”で応戦。

襲い掛かるアリコマンドを、次々と切り払っていた。

しかし、数はあちらの方が圧倒的に有利。

軍団戦といえば、オーズのガタキリバコンボ。ディケイドはライド
ブッカードから、カードを取り出そうとした。

だが…

「…！？」

取り出したガタキリバのカードが、突然、ブランク状態となつてしまつた。

まさか、と思い、ディケイドは他のオーズ関係のカードも取り出したが…

ラトラーター、サゴーズ、タトバ、シャウタ。

奪われたタジャドルや、コンプリートフォームでないと召喚不可の
プトティラ、未だブランクのままのカードを除いても、総てのカー
ドがブランク状態と化していた。

「カードが、使えない…!？」

「くはは。デイクイドが厄介なのは、他のライダーに変身する変則
性。ならば、その変則性を奪えばいい」

「どういうことだ!」

「奪ったのだよ。オーズを」

ゼネラルモンスターは、それだけ言うとヤモリジンへと変身する。
アリコマンドの合間を縫って走り出すと、ヤモリの尾のような右手
を振るい、デイクイドを攻撃。
咄嗟にライドブッカー・ソードモードで防御をし、連続して放たれ
る相手の攻撃をかわしながら、問い始めていた。

「“奪った”だと?どうやってだ!」

「お前の持つライダーカードは、その世界のライダー達との友情…
という生温い力と【神】は仰った。つまり、それを失わせればカー
ドも力を失う…簡単なことではないか!」

「ということは、…オーズは!」

「そう!オーズは昨夜の内に、ゴッドショッカーの部隊が制圧した
!!!」

ヤモリジンは鋭い蹴りを放ちながら、叫ぶ。

デイクイドは軽く三步離れると、ヤモリジンは「持っていても価値
なし」と感じたのか、昨日奪ったタジャドルのカードを投げ渡す。
やはり、返されたカードもブランクとなっており、使えなくなつて

いる…

——ディケイド最大の弱点は、【友情によって得たライダーカード】そのもの。

それぞれの世界で、仲間にしたライダーの友情の証とも言える、ライダーカード。しかしそれは、同時に“何らかの形でそのライダーに異変があれば”使えなくなってしまう。

例えば、世界融合による消滅…現にそれで、【ブレイドの世界】が消えた時にブレイド関係のカードはブランクとなってしまった。

ケータッチは“それぞれのライダーの友情”とは無縁なのか、機能していたが…

「つまり、オーズを倒したか…オーズをそっちの味方にしたか、というわけか」

「そうだ」

「だが、俺の知っているオーズは…お前らに屈するはずがない人間だ！それを、どうやって…！」

「それを可能にするのが、【神】の力だ！」

ヤモリジンがそう言い放つと、アリコマンドが再び一斉に襲い掛かる。

ディケイドにとって、オーズを封じられたのは致命的だ。

オーズのコンボには、特殊能力が備わっている…ガタキリバが分身、サゴーズが重力操作、ラトラーターが熱線放射…という具合に。

特に個対多の戦いの場合、ガタキリバの分身能力は戦況を一気に覆せる。

敵もそれを考慮して、最初にオーズを封じたのだろうか…

だったら、とディケイドは別のカードを使おうとした。この混戦を脱するには、カブトしかない。そう思ってライドブッカーを開く。

だが…

「——ッ！」

空中から、飛び蹴りを放つ存在がいた。

スカイライダーだ。

狙いを定めて急降下する…その姿はまるで、獲物を狙う隼のよう。デイケイドは何とか直撃を免れたが、カードを持っていた腕に掠ってしまい、カードが散らばってしまう。

急いでカブトのカメンライドのカードは回収したデイケイドだが、残りのカードはアリコマンドに奪われ、彼らはそれを持って遠くに逃走。

「待て」、とデイケイドは叫ぶが、その前にスカイライダーが立ち塞がる。

カードも奪われ、デイケイドは仕方なくコンプリートフォームになろうとケータッチを取り出すが、それを狙っていたのか今度はスカイドリルで強襲。

スカイドリルはかわしたが、相手の避け方を予め予測していたヤモリジンの攻撃はかわせず、ケータッチも弾き飛ばされてしまう。

そして、ケータッチすらアリコマンドの一人に回収され、彼もまた逃走…

攻撃手段の大半を奪われたデイケイドは、舌打ちしつつ目の前のスカイライダーを見る。

「…オオオ」

「くそつ、最初からこれが目的だったのか」

「そうだ。…カブトはなかなか手こずらせているようだが、ゴッドショッカーの手中に落ちるのも時間の問題だ」

スカイライダーに、ヤモリジン。

その上、このアリコマンド集団…

ディケイド一人では、どう足掻いても勝ち目のない相手だ。

他のカードを使おうにも、アギト・電王・ブレイド・響鬼・ダブル・ファイズと無力化されているカードが多い。

…唯一使えそうなのは、“カメンライド カブト”と龍騎全般…

（くそつ、ソウジは何となく予想がつくが、他はシンジ以外全滅かよ！）

むしろ、何故ほぼ一般人の龍騎が粘っているんだよ。

あれか…ノーマークなのか、龍騎は。

それとも、まだそこまで侵攻されていないのか？

ディケイドはそう思いながらも、圧倒的戦力差の前に、次第に追い詰められていく。

そして、スカイライダーがディケイドに一撃浴びせようと、走り出した

——その時だった。

……ブオオオオン！

ブオン、ブオオオオオン！！

バイクのエンジン音が、戦いの場に響き渡る。

一体誰が、とディケイドやヤモリジンは周囲を見渡すと、ディケイドの背後からそれは聞こえていた。

向かってきていたのは、惑星開発用バイク・Vマシンに乗った青年。青年はバイクの車体を傾け、ジャンプでディケイドを飛び越すと、彼とヤモリジンらの間に割って入る。

颯爽と現れ、被っていたヘルメットを取ったのは……月島カズヤだった。

「…カズヤ！何をしに来たんだ、戻れ！！」

「士、それはできない」

「なんだと？……お前、まさかつ！」

「そのまさかだ。——俺は、ヒロシを…スカイライダーを止めるために、来た」

そう言うのと、カズヤは赤心少林拳で使われる構えを取る。

更に、独特な呼吸に合わせてポーズを取り…

そして、そのまま両手を正面で合唱し、梅の花を表現するような構えの手を突き出す。

するとサイクロードが出現・バツクルが開き、中の風車が回転。

そのままカズヤは、ゆっくり歩き出しながらその姿を変えていく。

——見た目はまるで、銀色のスズメバチ。赤い複眼が見据える先には、改造人間となった兄。

「カズヤ…！」

「まさか、貴様が…S-1を！？」

「…」

その場に現れたのは、惑星開発用S-1システム

否——仮面ライダー・スーパー1

カズヤが改造人間になってしまったことに、ディケイドは少なからず憤りを感じていた。

何があってもそれだけはないと、信じていた。

その結論に至ったとしても、ケイスケが止めてくれると思っていた。それなのに。

「カズヤ、お前…どうして改造手術を受けた！」

「ごめん士。だけどこれは、俺の決めたことなんだ」

「兄を助けるために改造人間になったって言うのか。改造人間になった兄のために、夢だけじゃなく人間すら捨てたのか!？」

「責められる覚悟も、できている。それと同時に、……人を捨てた代償を背負う覚悟も、つけた」

そう言いながら、ゆつくりとスカイライダーに向かって歩くスーパー1。

アリコマンド達は、ディケイド側についたスーパー1を攻撃するべく、一斉に群がって行ったが

…攻撃は総て、梅花の型で流され、逆に顔面に正拳を食らう者が後を絶たない。

そして一定の間合いを開け、スーパー1は言い放つ。

「それに、改造人間になったとしても…帰る場所はある。俺は、俺達を待っていてくれる場所に、二人で一緒に帰るだけだ」

「……」

「俺はお前を一人にさせないために、決断した。お前を独りにしたくないから、俺は改造人間になった……お前の手を、これ以上人の血で汚したくないから、止めに来た」

スーパー1が、構える。

それと同時に、スカイライダーもゆつくりと構えを取る…

元々同じ流派の同じ拳法を学んでいた兄弟。攻撃の構えが似るのも、無理はなかった。

スカイライダーと対峙するスーパー1を見ていたヤモリジンは、「何故だ」と呟く。

…アポロガイストの話では、仁博士に協力を取り付けたはず…

…それも、調整に使ったための三日の猶予を得、その間ケイスケとカズ

ヤの安全も保障させる約束で。

考えられることは一つ。——カズヤが、昨日のことを敬一郎に話した可能性だ。

アポロガイストと敬一郎の交わした約束など当然知らないヤモリジンは、ディケイドやクウガだけでなく、夏海やカズヤも殺そうとしていた。抵抗するなら尚更。

だが、殺せばいつかその事実は耳に入り「約束違反」として誰かを改造人間にしていたかS-1そのものを破壊するか…殺さずとも、ヒロシの件を話せば同じことをするのは、当然だろう。

こうなってしまうては、…スカイライダーとの戦いで疲弊したスーパー1に不意打ちを浴びせ、ゴッドショッカーの技術班に脳改造してもらおう他ない。

そう思っていたが、……その前にディケイドが数少ないカードの一つ・龍騎のカメンライドを使ってヤモリジンに攻撃してきた。

『Kamen Ride RYUKI!』

「…余所見とは随分と余裕だな!」

「ぐっ!」

ライドブッカーの一閃が、油断していたヤモリジンの背を裂く。

そのまま背後を振り返り、D龍騎を見据えるヤモリジン…

——先にこいつを倒さねば、どうにもならない。

——援軍の期待は出来ない以上、私がやるしか…!

ヤモリジンはD龍騎に向かって特攻し、一方で、スカイライダーとスーパー1も互いに拳をぶつけ合っていた。

~~~~~

敬一郎は、カズヤの改造手術を殆ど徹夜で行っていた。

昨日は朝から大学にいたことや、ゴッドシヨッカーへの気の張りすぎで、一層疲れているのだろう。家に帰るまでの間、睡魔が何度も彼を襲う。

しかし、それ以上に……彼の中には、『本当にこれで良かったのか』という不安があった。

カズヤの頼み。そして、S - 1を悪用されない為に……カズヤをS - 1に改造した。

——だがその決断は本当によかったのか？

——私は、S - 1を守りたいがために一人の若者の未来を潰したのではないのか？

——そのために、改造人間となった二人の兄弟が戦うことになったとしても？

心の中の葛藤は、靄のように渦巻いている。

そうしているうちに自宅に辿り着き、乗っていた車を車庫に入れると、玄関の鍵を開けようとする

「……？」

……が、どうやら鍵は開いていたようで、よく見れば食台の電気も点けたまま。

何かおかしいと思いながらも、敬一郎は家の中に入り、靴を脱ぐ。そしてそのままリビングに向かうと、——テレビをつけたままソファで熟睡しているケイスケの姿があった。

テーブルの上には、敬一郎用のオムライスがラップに包まれて置いてある。

それだけではない。卵にタマネギ、長ネギ、カニ缶、片栗粉といった蟹玉チャーハンの材料が、台所のテーブルに乱雑に並べられているのだ。

まさか、

そう思った敬一郎は、熟睡していたケイスケの肩を揺する。

「ケイスケ。起きなさい」

「……ん、ふああ……親父、……帰ってきたのか……」

「向こうのテーブルにある、食材。もしかして」

まだ眠気が取れないのか、欠伸をするケイスケ。

だが、「ああ、それ……」と目を擦りつつも、彼は二度目の欠伸をした後に、敬一郎に説明した。

「ヒロシとカズヤが帰ってきた時、作ろうと思ってさ。そういう約束だったし……」

「……もし、帰ってこなかったら……？」

「それはない。——あいつらが俺との約束を破ったことなんて、一度もなかったから」

やはり。

この子は信じている、二人が帰ってくることを。

例え改造人間になったとしても、迎え入れる覚悟で……

“どちらかが帰ってこない”ことも、“どちらも帰ってこない”ことも考えず。

ただ、“どちらも帰ってくる”ことを信じて。

ケイスケは半分眠気が取れてきたのか、三度目の欠伸をした後、敬一郎に告げる。

「こんなに遅かったってことは、…カズヤと会ったんだな」

「…ああ」

「S-1にしたのか？」

「…そうだ」

「そっか」

それだけ言うと、ケイスケは黙って敬一郎の分のオムライスを温めに行く。

ケイスケはとつくの昔に、折り合いをつけている。

ヒロシとカズヤの二人が改造人間になったとしても、彼は普段どおり過ごすのだろう。

それが例え、一人だけ年老いて死ぬことになったとしても…

敬一郎は先程までケイスケの寝ていたソファに座り、レンジ加熱を始めたケイスケに訊ねる。

「——これで良かったのだろうか。これで…」

「あの兄弟の問題は、あの兄弟にしか解決できない。カズヤが改造人間になる覚悟を決めたから、親父も覚悟を決めたんじゃないのか」

「…そのつもりだった。だが、私は家に帰るまでの間、ずっとこれで良かったのかと悩んでいた。もっと別に方法はなかったのか、もっと——！」

「後悔するぐらいなら、S-1を作らなければよかったんじゃないのか」

ケイスケが、静かに告げる。

…確かに、S-1さえなければゴッドショッカーが干渉してくることも、カズヤが改造手術を願い出ることなどなかっただろう。

現に敬一郎は、カズヤが来るその前まで、S-1を破壊するべきかどうか悩んでいた。

だが、できなかったのだ。

S-1はそのプロジェクトに携わった全員の夢でもあり、敬一郎の夢の欠片でもあった。

それを無駄にすることなど、できなかった。それが例え、一人の人間を改造人間としてでも。

「……」

「親父はさ。自分の夢の為に、S-1を作ったんだろう。海の神秘を解明し、宇宙への希望を作る…自分が死んだとしても、自分のやってきたことが未来の技術者達に受け継がれていく。それが望みだったんだろ」

「…ああ」

「だったらそれでいいだろ。…少なくともカズヤは、親父のそういう想いを分かった上で、S-1になろうとしていた。だったら親父は、……こういう形であれS-1となったあいつを、サポートするべきだ」

それに、とケイスケは加熱し終わったオムライスをレンジから取り出し、ラップを外す。

その上に手作りのケチャップソースをかけ、スプーンと一緒に持つてくると、敬一郎にそれを渡す…

そんな彼が見せた表情は、…決して清々しい、とは言えないものの、それでも何かを決めた笑顔だった。

「……それに、人を改造したことを罪として親父が背負うなら、俺もそれを背負う。少なくとも、親父より俺のほうが長生きできるしな」

「ケイスケ」

「いいから、オムライス早く食べろつて。冷めるぞ」

ケイスケから渡されたオムライスを、スプーンで一口分掬い、口に運ぶ。

…美味い。

母親を早くに亡くし…父も研究などで忙しく、ケイスケは独学で料理を学んでいた。

最初の頃は、見た目も味もある意味で期待を裏切らず、正直、食べられたものではなかった。

しかし、息子の作ってくれた料理は、敬一郎にとっても支えになっていたのだ。

今は、子供の頃に初めて作った料理とは違い、形の整ったオムライス。

レンジで温められたばかりとはいえ、それとは違った温かさを、敬一郎は感じていた。

そんな親子の団欒を、破壊する者

——アポロガイストだ。

彼は憤りを隠せない声色で、敬一郎に言い放つ。

「情報どおり、裏切ったな。仁博士！」

「アポロガイスト…！」

「我々にS-1を提供するためならまだしも、スカイライダーを止めるというくだらない理由で、S-1を普通の人間に渡すなど…裏切りの代償は重いぞ！」

そう言い放つと、アポロガイストは持っていた細身剣を構える。

それを見たケイスケは、近くにあった箸を手に取り、敬一郎を守る

ように彼とアポロガイストの間に入った。

正直、真剣相手に…それも、昨日戦ったドグマファイターはおるか、ファイヤーコングなどとは遥かに別格の相手に勝てる自信など1%もない。

だが、それでも。動かずにはいらなかった。

「ほう、貴様が…仁博士の息子というのは」

「ああ。それがどうした！」

「お前の父は愚かだな。たった一人の人間の戯言の為に、【神】に逆らうなど」

「…戯言？はっ、神様神様って煩いお前らよりは、よっぽどまとまだ…それに俺は、親父を愚かだとは思わない！」

… ケイスケは、薄々感付いていた。

昨日の、父の電話の時点です。

ゴッドショッカーは恐らく、自分達の知らないところで敬一郎に接触してくるだろう。頭の回る者なら、尚更。

だからあの時、電話越しに探りを入れた。本当に何もなかったのかどうか。

そして…悪いほうの予感当たった。

敬一郎は隠し事をする時、必ず3秒ほど間を空ける。そして、決まってその後は半音低い声で答える。

「親父はお前らに手を貸すことはないって、信じていた。…S-1を、自分の夢を！悪いことに使う奴らに手は貸したりしないと、信じていた！！」

「成程…泣かせる話だな。さて、いい話を聞かせてくれた礼をしよう…今回の件を水に流して、君達をゴッドショッカーの一員に迎えたい所だが、博士はともかく君は」

「断る！」

「そう言うと思ったよ。……それでは、これはどうかな」

アポロガイストはそう言うと、鋭い一突きを放つ。

ケイスケはその一撃を寸前の所で右に体を反らして避けると、アポロガイストに簪を叩きつけようとした。

だが、その一撃がアポロガイストに当たることはない。  
何故なら

「ッ、」

——素早くアポロガイストは細身剣を構え直すと、音速に近い突きでケイスケの心臓を捉えていた。

ケイスケは目を見開き、口から赤い血を流す。

アポロガイストは剣を抜くと、ケイスケはそのまま、力なく倒れていく……

その行為は、『礼』などではない。

報復だ。自分や【神】に逆らった、仁親子への。

「……【神】への捧げ物、という名誉を与えよう。——見た所、君は優秀な改造人間になりそうだからな」

「ケイスケEEEEエッ！」

真つ赤な血を流し、倒れるケイスケ。

そんな彼を見て、敬一郎は悲痛な叫び声を上げていた……

To Be Counted…

\*\*\*

次回予告

「——赤心少林拳、諸手打」

「焼きトカゲならぬ、焼きヤモリにしてやるぜ！」

「さあて、俺も帰るとするか。…居場所とやらに、な」

Episode 7：空と宇宙

## Episode 6：その名はスーパー1（後書き）

シャウタww

とりあえず、混ぜるな危険。

ラブレターのくだりは、完全に楽しかったです。

やきもちを焼いている夏海を書くのが。

これにユウスケも混じれたら…もつと面白かったのに…

っていうか、その夏海自身が「物好きな女性」なんですよねえ。

そしてやつと出せたキバーラ。正直ごめん、栄次郎さん以上に忘れていたよ…

前回のクイズですが…

2・鳴滝の可能性、消えましたーw

しかし、銀色のメダルということは…まさか…？

本当は大学のグラウンドにする予定でしたが、色々と不都合が生じたので星ノ宮ロケット発射場にしました。

そっちの方が、スーパー1すぐ来れそうな気がしなくもないんですけど…

ほら、主役は遅れてやってくるっていうじゃないですか↑

ちなみに、時間通りに来たら発射場は爆発させないという、律儀なゼネラルモンスター様でしたw

ディケイドの最大の長所で、最大の短所。

それは、“カード”なんですよ。

様々なカードを使うことで、ディケイドは無限大の可能性を秘めている。

しかし、そのカードの数を減らされれば？

ケータツチは一応起動できましたが、奪われれば使えないのと同じ。ちなみに…

奪われたカードの種類は

- ・タジャ××
- ・カブト（クロックアップ、FAR、FFR）
- ・クウガ全般（カメンライドからFFRに至るまで）

使えないカードは

- ・キバ
- ・ブレイド
- ・ファイズ
- ・アギト
- ・電王
- ・響鬼
- ・W
- ・オーズ（ただし、ブランク1枚分は元々使えなかった）

…土、詰んだなw

まあ、そんな詰み状態を解消するのが…

終末龍騎

…違った、スーパー1です。

確かに龍騎は全部使えますけど、使えるんですけどw

何気に赤心少林拳正拳突き、やっていることになるんでしょうか。梅花と併用して。

蟹玉チャーハンの材料は、この回を執筆する際に調べました。

そしたら、何と役に立つものがあるのか！

卵、長ネギ、タマネギ、カニ缶、片栗粉…このうちの2つは、後々に出てきます。

ちなみに塩ベースでも、ケチャップベースでも美味しいようですが、兄弟が好きなのは後者です。

ケイスケは他人を受け入れる度量なら、大きいです。本気で。

ただし自分に関しては以下省略。

ケイスケは今後も料理ネタが関わってくる予定ですが、リイマジ昭和の中では2番目ぐらいの美味さですね。

さて、一番は誰でしょうw

モツプの次は、第w

ケイスケさん！あんな順調に死亡フラグ立てんな！！

…というより、ケイスケは前回の時点で死亡フラグビンビンでしたね…

そして、完全にこれは…

最強最悪のフラグが立ちました…

読者の皆さんは、このフラグは見なかったフリをしてください

次回のタイトルは本当に一回やってみたかったもの。

リイマジ昭和を書くなら！

スーパー1とスカイライダー関係で書くのなら！

そして、2話の賢吾のセリフを「宇宙でやれ」と脳内再生した者なら！

やってみたかった、そんな読み。

これをやりたいがために、あと、オリジナルでのスイカとドSの絡みを楽しみにしている馬鹿であるがために、月島兄弟はスカイライダー・スパー1になりました。

…

ここまできたら、ケイスケはいつそフォーゼでもいいんじゃない？  
…↑

## Episode 7: 空と宇宙(そら) (前書き)

タトバ「これまでの、DCDRWは…！」

俺、門矢士20歳！

今日は郵便受けにラブレターが届いていたから、るるんステップで待ち合わせ場所に…

そしたら、待っていたのはゴッドシヨッカー！

手紙を出したのは…ゼネラルモンスターだって！？

そんな…

てつきり、素直になれない柑橘系女子・Nが書いたと思っていたのに！

でも、ラブレターのお返しはしないと！

ディケイドに変身するけど、持っていたカブトのカードをいくつかと…クウガのカードを全部、そしてケータッチすら奪われたんだ！士、ピンチ！

だけどそんな士のピンチに現れたのは、ドS…違った、スーパー！そんな！

スーパー！とスイカ…スカイライダーは実の兄弟なのに！兄弟対決なんて、そんなの聞いてない！！

一方その頃、アポロガイストが攻めてきて…

ケイスケが心臓をぐさりと刺された！？

どうなるケイスケ！

どうする敬一郎博士！

そして「なのだ」はどこにいったアポロガイスト！？

タトバ「希望の破壊者、デイケイド…数々の希望を叩き潰し、その瞳は何を見る！」

士「おいタトバ、お前ちょっと覚えとけ」

## Episode 7: 空と宇宙(そら)

某所にある、ゴッドショッカー総本部。

そこでは、【神】として崇められるゴッドショッカー大首領が、一仕事を終えた後…立派な椅子に座って構えていた。

とはいえ、その姿はカーテンで覆われており、まるで正体が分からない。

連れてこられた人間は勿論、改造されたばかりの改造人間達や下端、ゴッドショッカーに協力する科学者達も、その姿を見たことはない…

知っているのは、幹部級の者達ぐらいだろう。

そんな【神】の前に跪き、報告を開始したのは、地獄大使とジャーク將軍だった。

「それで、状況は？」

「はっ。——現在、ディケイドとゼネラルモンスターが交戦中とのことですが…」

「S-1…いや、スーパーがディケイド側に加わったようです。如何致しましょう？」

「スーパーだけなら放っておけ。それで、…仁博士は？」

「アポロガイストが向かっております。……アポロガイストめ、三日という猶予など与えず、その場に連れて来ればよかったものを」

地獄大使が、ぎりり…と拳を握り締める。

彼にしてみれば、アポロガイストのやり方は生ぬるいのだ。

息子の命を人質に取るなり、先程言ったように、無理矢理協力させることも可能だったはず。

しかし、ジャーク將軍はそれを「否」とした。

理由は簡単だ。

無理矢理連れてきた所で、素直に協力してくれるとは思えない。彼ほどの天才なら、緊急時のためにS-1に関するデータやその存在そのものを破壊する方法も作っていたはず。

それに、『仁博士はS-1とは違う“モノ”を作っている』と聞く非公式である以上、こちらにも情報が入りづらく、それがゴッドシヨッカーにとって有益なのかそうでないのかの判断のしようがない。

そうしていると、ゆっくりと別の影が現れる。

その顔を見て、地獄大使は顔を不機嫌そうにしながらも、影に訊ねていた。

「——貴様か。何の用だ？」

「報告しよう。……【カブトの世界】にいる、カブトのリ・イマジネーションが消えた」

「何？どういうことだ」

影の話によると…

【カブトの世界】に侵攻したジンドグマの兵は、一旦はカブトを追い詰めることに成功した。

しかし、突如空から飛来したハイパーゼクターにより、カブト・ハイパーフォームへと変身…

そのまま、姿を消したそうだ。

それを聞いた地獄大使は、影に対し、「カブトの家族や仲間を人質に取れ」と叫ぶ。

しかし、影は「自分に言われても困る」と返した後、困ったような表情で、【神】やジャーク將軍らに話す。

「それに、…オリジナルのカブトが、リ・イマジネーションと入れ替わりに【カブトの世界】にやってきたそうだ。勿論、……オリジナル相手に最低限の兵力で向かったジンドグマが、勝てるはずもない」

「オリジナルが？」

「恐らく、カブトのリ・イマジネーションの要請を受けたか…それとも独断か。いずれにしろ、カブトのリ・イマジネーションを捕まえるのは、現状では不可能に近いそうだ」

くそ、と地獄大使が舌打ちを打つ。

リ・イマジネーションのライダーで、一番逃してはならないのはカブト…

戦闘能力だけではない。その持つ“クロックアップ”は、敵に回すと大変厄介な能力。

そうすると、ゼナルモンスター直属のアリコマンドがやってきて、ジャーク將軍にあるものを献上する。

——それは、ディケイドから奪ったばかりの“アタックライド クロックアップ” やカブトのFAR…他、クウガ関係のカード。

更には、コンプリートフォームに必要なケータッチを持ってやってくる者もいた。

【神】はくくつと笑いを漏らしながら、影の男に告げる。

「…どうやら、クロックアップの件は心配しなくてもいいようだな。クロックアップできないカブトなど、ただのムシケラ同然…ディケイドはカブトを使いたくても使えなくなるだろう」

「確かに。殆どのカードも無力化され、ディケイドはほぼ終わったも同然…」

「ならばすぐにでも、総てのライダー達を滅ぼしに！」

地獄大使がそう言い放つが、…【神】はその意見に否定的だった。ジャーク將軍も、その理由が分かっていた。

今現在、造られている改造人間達…その中で仮面ライダーとなったのは、1号・2号・V3・スカイライダー・ZX。

しかし、1号となった人間は三年前に改造し、後は脳改造を施すだけだったが…その前に逃走。未だにその行方を掴めていない。

2号はほぼ失敗作に近く、脳改造寸前に暴走…数百体の兵を無駄にしてようやく押さえ込み、今はコールドスリープ状態で封印されたまま。

ストロンガーについては、今現在、新たに仕入れてきた検体を使って作り上げている最中…

——ライダー戦力が、充分ではないのだ。

デイクイドの元に、スーパー1だけでなく、逃げ出した1号や未だ捕まらないカブトのり・イマジネーションに合流されれば、それだけで不利となる。

捕まえたばかりのライダー達を使えば、抑えられる可能性はあるだろうが…それでも【神】や新しく作られた改造人間達以外は、ライダーにより辛酸を舐めている。警戒するに越したことはないのだ。

「……いいや、デイクイドを徹底的に孤立させる。小さなムシケラでも、集まればそれなりになるからな…それはお前も分かっているだろう？」

「くっつ…」

「【神】の仰るとおりだ、地獄大使。…それで、どうしますか？」

「デイクイドは決まって“ある行動”を起こす。その時が、スーパー1と別々になるチャンスと言っても過言ではない……スカイライ

ダーが敗れても、そこを潰せばいい」

「では、カードとケータツチは…」

「俺が持つていよう。——どうせ、ディケイドが死ねば…奴の“総て”は、俺の物になるんだからな」

〃  
〃  
〃

星ノ宮ロケット発射場前。

そこでは、スーパードとスカイライダーが拳をぶつけ合っていた。

——宇宙への夢を募らせていた若者。

——死んだ兄のために、宇宙への夢を受け継いだ若者。

そんな彼らが、この場所で戦うというのは…運命というのは、皮肉なものだ。

スカイライダーが攻めれば、スーパードはその攻撃を総て受け流し、逆にスーパードが攻めれば、スカイライダーが守りに徹する。

D龍騎は、スーパード…カズヤ自身から、自分と兄は双子だと聞いていた。

確かに、昨日見たヒロシの顔は…カズヤに瓜二つ。ヒロシを3つ歳を取らせるか、逆にカズヤを3つ若くすると、同じぐらいだろう。それほどまでに瓜二つで、しかも、二人とも祖父から赤心少林拳を学んでいる…

双子というのは大変不思議なもので、実験によると、じゃんけんを

して同じ手を出す確率は74%。

多少の違いはあれど、好みは大抵似る傾向にあるそうで、まるで意識を共有しているかのように、別々の場所で同じ行動をすることもあるらしい。

D龍騎は思った。

——下手をすれば、二人の戦いは決着がつかない。

——相手の次に出る手も分かり、戦法も似通っているのなら、感情云々を別にしても決着などつけられるはずがないと。

しかし、一見まったく差のない戦いに見えるが、実際二人の間には……大きな差が存在している。

それは二人がそれぞれ、『スカイライダー』と『スーパー1』であること。

例えば使う武術が同じでも、戦法が同じだとしても、改造されたライダーの能力の差は変えようがない。

特徴としては、スカイライダーは重力低減装置を用いて空を飛び、スーパー1はファイブハンドと呼ばれる機能を備えている。

現にこのままではまずいと本能で察したのか、スカイライダーがゼイリングジャンプで空を飛び始める。

「！」

「……アアアッ！」

スカイライダーは空から、キックで奇襲を仕掛けてくる。

相手は脳改造を受けている上に、自分の変身するライダーの戦い方も熟知している。

これでは、スーパー1に改造されたばかりのカズヤが一方的に不利そう思われていた。

だが、スーパー1は一瞬の判断で相手の攻撃を完全に見切り、隙だ

らけの背後に上段蹴りを放つ。

…初めて相手にダメージが入る。

スカイライダーは再び空中から攻めようとするが、今度は相手の攻撃をかわしたと同時に、ファイブハンドをスーパーハンドから冷熱ハンドに切り替える。

「チェンジ、冷熱ハンド！」

「グ…！？」

「…はっ！」

スーパー1は、片方の手で冷気を込めたパンチを放つ。

狙いは、セイリングジャンプの源・重力低減装置。

スカイライダーは防御の構えを取ったが、スーパー1が重力低減装置を凍らせるほうが0.5秒早かった。

そして、再びスーパーハンドにチェンジすると、油断していた相手の腹に重い一撃を与える。

戦いの様子をずっと見ていたアリコマンド達はたじろぐが、スーパー1は合掌しながら言い放つ。

「…ギギギ…！？」「」

「——確かに俺は、戦闘用の改造人間じゃない。だが、俺は改造人間である前に、一人の拳法家だった」

そういえば、とD龍騎はやモリジンと激しい攻撃をしながら、考える。

スカイライダーはスーパー1と違い、戦闘特化した改造人間。しかし、そもそもヒロシには…三年間の空白がある。

彼にはない三年間、カズヤが赤心少林拳の鍛錬を怠らなかったとしたら？

…それは大きな利点となり、改造人間としてのスペックの差を自力

で埋められる。

それにスカイライダーは、同じ拳法を使えるが、ただの戦闘マシンにされてしまっていてはその拳法の『真の意味』も生かせない。だからこそ、同じ梅花の型でも攻撃を受け流せる精度に違いが生じた。

スーパー1は合掌したまま、精神統一を行う。

「赤心少林拳、合掌」

精神統一を行うことで、敵の幻術を破つたり…分身を見抜いたりできる。

それが、赤心少林拳合掌。

スーパー1がこの場で、これを行つたのには理由があつた。

『無駄だ。そいつの脳改造は完璧…我々ゴッドショッカーに絶対的な服従を誓っている！』

昨日、スカイライダーとクウガが組み合つた時にヤモリジンが言い放つた一言だつた。

脳改造を受けたということは、何らかの形で、脳の信号を強制的にゴッドショッカーの都合のいいものに書き換えている装置があるはず。

それが脳の内部に取り付けられていたらアウトだろうが、脳を必要以上に傷付けることになり…下手をすれば使い物にならなくなる。とすれば、なるべくリスクが少なくて済むのは脳の外部…

「……見えたッ！」

合掌により、装置の場所を見切つたスーパー1。  
そのまま高くジャンプをしながら、相手に向かって右手を構える。

重力制御装置を用いない場合のスーパー1のジャンプ力は100m、用いた場合のジャンプ力は無限大…つまり計測不能に近い。

スカイライダーとは元々の構造などが違うために、自由に空を飛べるわけではないのだが…空を飛ぶことを封じられた相手にはそれでも充分。

「——赤心少林拳、諸手打」

空中から強襲するスーパー1の手刀が、スカイライダーの頭部に直撃。

その一撃は、ある一点のみを狙っていた…

それは、脳改造を行う際に取り付けられた、脳波信号妨害装置…つまり洗脳の源だ。

その部分のみに放たれた一撃を受け、スカイライダーはその場に倒れる。

スーパー1は地上に着地すると、変身が解け、気絶した状態のヒロシを見る。

ヒロシの肩が、ピクリと動く。…おそらく生きているだろう

——いや、本来なら三年前に死んでいたはずのヒロシが、改造人間となったことで生き返った…というほうが正しいのかもしれない。

「う、ん…」

「…これでもう、人を傷付けなくていい」

「馬鹿な…！」

スカイライダーが敗れた。

その事実、ヤモリジンは同様を隠せずにいる。

まさか、戦闘に特化していないライダーにやられるとは…

しかしその同様は油断を呼び、D龍騎にチャンスを与えることになった。

D龍騎はこれ見よがしにライドブッカー・ソードモードを一閃させ、それはヤモリジンを袈裟懸けに切り刻む。  
ぐああ…と呻き声を上げるヤモリジン。

しかしD龍騎は攻撃の手を緩めず、最後の一撃に出る。

「焼きトカゲならぬ、焼きヤモリにしてやるぜ！」

『Final Attack Ride RYU - RYU - RYU  
- RYUKI!』

「しまっ…！」

ヤモリジンはそう叫ぶが、既に遅かった。

“星ノ宮ロケット発射場”と書かれた表札が、朝日を受けてそれを反射するようにきらりと光る。

すると、そこから龍騎の契約モンスター・無双龍ドラグレッダーが出現。

油断していたヤモリジンの背後に、突進攻撃を浴びせていた。

更に召喚されたドラグレッダーは、D龍騎の周囲をぐるぐると回り、D龍騎はそれに合わせて攻撃の構えを取る。

そしてD龍騎とドラグレッダーは同時に空へと飛び上がり、D龍騎はその場で体を回転させながら、ドラグレッダーのいる頂点まで達する。

そこで相手に向けて右足を突き出し、蹴りの体勢を取ると…

ドラグレッダーは炎の球を打ち出し、その勢いでD龍騎はヤモリジンへと向かって必殺キックを放った。

『グオオオン!』

「…うおおおおおおおーッ！」

「ぐ、ぐあああああっ!？」

## 【ドラゴンライダーキック】

——龍騎の扱う最強の攻撃であり、その威力は計り知れない。勿論、それを受けてまともに生きていられる保障など……何処にも存在しないのだ。

炎を纏ったキックを受けたヤモリジンは、火達磨になって転がり、そのまま近くの壁に激突する。

息も絶え絶え、と言った様子でヤモリジンは尚も起き上がるが、D龍騎やスーパードの目からしても、『もはや戦うことは不可能』だ。だが、彼は何とか立ち上がると、最期の言葉をD龍騎に言い放った。

「調子に、乗るな……。たった二人、いや、三人で……ゴッドショットに、【神】に勝てると思うな……！」

「何か数え忘れてないか？……ユウスケや海東、夏海も足して、6人。それで充分だ」

「——ふははははははは！愚か、実に愚かだデイケイド……はははははははははははは……ッ……！」

狂ったように笑い叫ぶ、ヤモリジン。

そして彼は、膝から崩れ落ちるようにして倒れ……

——そのまま、爆発していた。

それを見たアリロイド達は、司令塔を失って一斉に散る。

D龍騎はバックルを開いてドライバーを取り出すと、土の姿に戻る。同じように、カズヤも変身を解除し、横になっていたヒロシの元に駆け寄った。

「……ヒロシ！しっかりしろ、ヒロシ……！」

「う、うん……あ、れ。カズヤ……？」

「良かった、元に戻ったんだな……ヒロシ……！」

「…………。あ、うん、……あれ？何かカズヤ……俺よりでかくなっている？」

ヒロシは一瞬顔を曇らせたが、すぐに笑顔を溢す。  
が、確かに彼には三年間の空白がある。

今の状況を上手く掴めなくても、仕方がないだろう…  
カズヤはひとまず、ヒロシとゆっくり話をできる場所をと思い、考  
える。

そこで思いついたのは、……ケイスケの家だ。

「あー、それは、…まあ色々あったと言うか」  
「？」

「とりあえず、ケイスケの家に行こう。ここだと、色々厄介だから」

「ケイスケの家かあ…美味しいものあるかな」

「作ってくれていると思うよ。ケイスケと約束したから」

ズレがあるとはいえ、あの激しい戦いの後で、暢気な笑顔をさせる  
ヒロシ…

士は彼を見て、「本当にあのスカイライダーと同一人物か」と頭を  
悩ませていた。

脳改造を受けていたとはいえ、流石にこの落差は大きい。

少しばかり調子を狂わされながらも、士はマシンディケイダーを止  
めてある駐車場まで向かおうとする。

そんな彼を呼び止めたのは、カズヤだった。

「士！ケイスケの家で、朝ご飯食べる？ケイスケのことだから、今  
頃、蟹玉チャーハン作って待ってくれていると思うんだけど」

「いや、その必要はない。料理好きの爺さんが、用意してくれてい  
る頃だしな」

「そっか。…じゃあ、大学で」

そう言うと、カズヤはVマシンに跨り…バイクを持たないヒロシも、ヘルメットを被って同乗する。  
彼らは一度ケイスケの自宅に向かう為、その場を離れる…  
改造人間を認めた、親友<sup>とも</sup>のいる場所に。  
やれやれ、と思いながらも、士はマシンディケイダーに乗って光写真館に戻るうとしていた。

「さて、俺も帰るとするか。…居場所とやらに、な」

くくく

Vマシンに乗って、ケイスケの家に向かう二人。  
その際、ヒロシはカズヤの腰に手を回し、落ちないように体を支えていた。  
しかし、その体温は自分が知っているヒロシの体温とは違い、少しばかり冷たい…  
これが機械の体。これが改造人間の体。  
ヒロシも恐らく、同じ思いだろう。特に彼の場合、自分の意思に係なく改造人間にされてしまった。  
これから思うと少しばかり憂鬱な気持ちになったが、それでもカズヤは、自分達の帰りを待つ場所に向かう。

久し振りに食べる蟹玉チャーハン。

ケイスケの作るそれは美味しくて、土にも食べさせたかったな。

——だが、その希望は淡くも崩れ去る結果となる。

「カズヤ、あれ、ケイスケの家からだよね」

「え？……ッ！？」

先に気付いたヒロシが、北東の方向を見て呟く。

カズヤもその言葉に釣られ、ケイスケの家のある方向を見たが

……そこから、黒い煙が立ち込めていた。

まさか。

それを見たカズヤは、Vマシンの速度を上げる。

制限速度は60km、などと悠長なことを言っている場合ではない。

今はカズヤやヒロシにとって、緊急事態なのだ。

いくつかの角を曲がり、そして、辿り着いた先には——

……黒煙が上がっていた。

火事に遭った様子ではない。火事ならば、建物から火が上がっていないければおかしいからだ。

どういうことだ。

カズヤがそう思っていると、家の中から出てきたのは、想定外の人物だった。

アポロガイスト。

何かに巻き込まれたのか、多少手負いだったが……彼はカズヤとヒロシの顔を見ると、「ほう」と呟く。

「スカイライダーに……スーパー！がお揃いとは」

「……お前は、」

「アポロガイスト……ケイスケに、何をしたッ！？」

ヒロシはアポロガイストを見て顔を顰め、カズヤはバイクを降りて戦闘体勢に入る。

一方で、問いかけられたアポロガイストは不敵な笑みを浮かべたまま……

自分を睨みつけるカズヤに、言い放った。

「――刺した。この手でな」

「な、に……」

「だが、一緒にいた仁博士が彼を連れて地下に逃げた。その前に、博士も斬ったが……傷の場所からして、息子のほうが早く死ぬだろうな。それ以前に、先程の爆発で死んだ可能性も」

「……うおおおおおおおおお！！」

それを聞いたカズヤは、アポロガイストに単身立ち向かう。

しかし、アポロガイストはそれを軽く往なし、逆にカズヤが地面に叩きつけられる。

バイクに乗ったままだったヒロシも、カズヤの元に駆け寄り、彼に手を伸ばす。

カズヤはその手を掴み、何とか起き上がる……だがその視線の先には、アポロガイストのみが存在する。

「カズヤ、大丈夫か？」

「ああ……、だけど、……ケイスケ……敬一郎博士……ッ！」

「人の姿のままで戦うなど、愚の骨頂。仁博士の息子みたいに、改造人間でないなら別だが……改造人間ならば、その姿で戦うべきだと思っが？」

「くっ……！！」

「……」

アポロガイストの言葉に、カズヤは怒りを…ヒロシは戦慄を覚える。  
——楽しんでる。

——【戦い】を、まるでゲームのように。

しかし、仁親子への弔い合戦以前に、アポロガイストとの戦いは気を引き締めなくてはいけない。

少なくとも彼からは、ゼネラルモンスター以上の“力”を感じるからだ。

ヒロシは両腕を広げ、カズヤは梅花の構えを取って変身を行う。

「スカイ、」

「…はああつ…」

「変身！」

同時に変身を行い、アポロガイストへと向かっていくスカイライダーとスーパー1。

そんな彼らに、アポロガイストは左手に太陽を模した盾を構え、右手には細身剣を抜いて…相手を見据えていた。  
くく、と仮面の奥で笑みを浮かべながら。

「…アポロガイストッ！」

「ケイスケと…博士の、仇…！」

「お前達はどこまで楽しませてくれるのか、見ものだ」

その同時刻…

「やっと着いたぜ」

士は、光写真館に帰宅していた。

いつもと変わらない、平凡な写真館。

マシンドイケーダーを置いてきた後、士は写真館の中に入る。  
そんな彼を最初に出迎えたのは、ユウスケだった。

「士。何処に行ってたんだ？」

「ラブレターの返事を返しにな」

「…ラブレター？それで、なんて答えたんだ？」

ユウスケの問いかけに、士は若干違和感を覚える。

いつものユウスケならば…

『はあ！？お前がラブレター…ありえないだろ、そんなの！』

と、大変驚いた様子で叫んでいることだろう。まるで、見慣れない人間相手に吼える大型犬みたいに。

そんな彼の反応が面白くて、普段なら士も、調子に乗ってからかっているのだが…

今日のユウスケは物足りないと思いながら、いつもの調子で冗談を言っていた。

「はつきりと…受けてやったぜ」

「へえ…」

「…おいユウスケ、どうしたんだ。『お前、夏海ちゃんがいながら！』とか『なんて羨ま…いやいや、そうじゃない、お前ばかりモテるなんて世の中不公平だ！』とか言えよ」

「もう、士君。ユウスケはやっと起きたばかりなんですよ」

階段を下りてやってきたのは、夏海。

彼女は多少呆れたような様子で、士に言い放つ…

夏海にそう言われ、士はようやく気付く。

ユウスケはあれでも病み上がりに近い。いや、傷自体は昨日のうちに治ったのだが、意識がなかなか戻らなかった。

きつと起きたばかりでテンションが低いんだな、と士は強引に纏める。

とにかく、まずは朝食。

それを食べてから、ゴッドショッカーに関する対策を練るとしよう…

士はそう思い、靴を脱いで二階に向かおうとする。

しかし

「…お前！」

「あ、士、実はお前が来る前に…お客さんが来ていたんだ」

「士君も前に会いましたよね。ほら、オーズに変身する…火野映司さん」

士の目の前に立ち塞がっていたのは、ここにいるはずのない人間。エスニック風の衣装に身を包んだ、旅人と言う言葉が似合う青年。

…火野映司。

またの名を、仮面ライダー・オーズ……だった男。

しかし、彼の目は何処か無機質なもので、光がなかった。

「どういうことだ。映司はここに来れるはずが…それ以前に、お前、アंकはどうした。一緒じゃないのか？」

「…アंकは、いるようでいない…かな」

「何？」

「これが、アंक」

そう言つて、映司が見せたのは…二つに割れたタカのコアメダル。それが意味することは、…アंकは映司のいた世界には存在しなくなつたということ。

前にアंकと会つた事がある土にとっては、少し寂しい気がしていた。

「何があつたんだ？まさかとは思うが、ゴッドショッカーの襲撃で」  
「違ふんです土君。話すと長くなるんですけど…」

夏海の説明によると…

アंकに関しては、ゴッドショッカーは一切関係なく、映司のいた世界で…恐竜グリードとして覚醒したある男の一撃を食らい、アंकの意識コアにヒビが入つた。

だが、その状態を押してアंकは最終決戦で、自分の意識コアを映司に託し…

限界が来たコアメダルが、砕けたのだ。

それだけではない。紫のメダルの力同士がぶつかり合つて、ブラックホールが生まれ、恐竜グリードとなつた男と共に、これまで壊されたメダルや割れたアंकのメダル以外は総て、その中に吸い込まれていった。

——つまり今の映司は、オーズにはなれない。

ならばゴッドショッカーが狙う理由もないだろうと、土は考える。

「色々あつたみたいだな」

「まあ、ね」

「とにかく、どうせなら朝飯でも食つか。爺さんの飯は美味いぞ」

「じゃあ、頂こうかなあ」

土は映司を通り抜けて先に二階に向かい、その後映司・ユウスケ・

夏海の順で続く。

その際、士は「そうだ」と映司に振り返る。

どういう経緯があったとはいえ、迷い込んでしまった以上、映司の本来いるべき世界に戻るまで暫く一緒に行動するか、キバーラの力ですぐ帰るか聞こうとしていた。

だが

無表情を貫く映司の手には、無いはずの紫のコアメダルが3枚握られていた。

「…おい、ちょっと待て、そのメダルは」

「ごめん士、一つだけ言い忘れていたことがあるんだ」

『プテラ！トリケラ！ティラノ！…プットツティラノザウルス

』

映司はメダルを順番にオーズドライバーに入れると、オースキャナーでそれをスキャンする。

たちまち周囲には冷気が立ち込め、氷を砕くようにして現れたのは…

仮面ライダーオーズ・プトティラコンボ。

総てを無に還す、恐竜や幻想生物の力を秘めた破壊のコンボだ。

プトティラは階段に右手を突っ込むと、そこから片手斧・メダガブリューを生成する。

そして、その刃を向けた相手は…

「映司…何を！」

「俺、……ゴッドショッカーの一員なんだ」

——士だった。

T O B e C o u n t e d …

\*\*\*

〈次回予告〉

「——まさか逃げ切れる気での!?」

「どうやら、【神】とやらに操られているみたいだね」

「貴様…まさか!」

E p i s o d e 8 : 逃走

「俺が相手だ、アポロガイスト」

## Episode 7：空と宇宙（そら）（後書き）

タwtwtwwバwww

もうタトバが病気です本当に。

ようやく、ゴッドショッカーの首領である【神】が出てきましたね。  
口調からして尊大な男です。

ソウジさんの生存確認されたよ！やったね！！

…ついでに、あのシンジもですけどw

いや、シンジはもう生き残って当然の域にいるな…あいつ…

ここで、現在ゴッドショッカーの作り上げている改造人間が判明しましたね。

1号、2号、V3、スカイライダー、ZX。

ストロンガーは、現在岡山の支部で作っている最中…恐らく、次回ごろにはその一端に触れるのでは？

そして敬一郎の作ったスーパー1を足せば、現在明らかになっていないのがX・ライダーマン・アマゾンですね。

更に1号は脱走し行方知れず、2号はコールドスリープと、問題点は多いようで…

色々な意味でフリーダムだな、改造人間達。

ついでに、カードとケータッチは【神】持ちです。

双子のじゃんけんの確率は、あるTVでの実験を参照にしました。

初回補正って何処でも強いなあ↑

その点、ディケブラシリーズ1作品目で初回補正もなく倒されたシンジは…今…それを払拭するレベルで…恐ろしく……

……ソウジさん超えかねない勢いで…ええ、もう……うん…うん…

…↑

ソウジさんの件？

あの人は仕方がなかった。シュナイド引き立てないといけなかったし、脱出の方法がそれしかなかったし。

ただしソウジさんは、敵のうち誰かと確実に仲良くなる（シュナイド、エグル）

シンジは…死の宣告をした相手を、容赦なく付け狙う上に本気で殺る…カズマしか止められないですマジで。

ちなみに、この戦闘は1〜2時間近く掛かって終了しております。

スカイライダーの脳改造を行った人は、よっぽどザルだったんでしようね。

腕のいい人なら、内部に取り込めるらしく、そうなった場合カズヤのやろうとした方法が確実に出来なくて本気で殺すしかない展開だったのですが。

…それでも良かったのですが↑

というのは冗談で、スカイライダーはまだまだ生きてもらわなくちゃいけません。

戦力的な意味でも、主役回的な意味でも！

龍騎さんはどこでも最強すぎませんか。

そして、最悪なことに本家龍騎こと終末サゴーズさんは今…

……普通に生きてるでしょうね↑

制限速度でちゃんと来たカズヤ律儀すぎるw

恐らく、発射場に行く時も制限速度を守ったんでしょね…

そしてケイスケの為ならそれを破るww

スカイライダーは一応リンチ後の強化形態の色なので、スカイ変身なんです。

そのために、他の人と合わせた場合

ヒロシ「スカイ、」

全員「「変身！」」

『Kamen Ride...』

『タカ！トラ！バッタ！（以下略）』

『Henshin（以下省略）』

<サイクロン！ジョーカー！>

……と、なります。

大力オスですね…ここにXが入ったら、セタップが大変身かでもつと凄いことにww

士がちよつとノリノリで、テンションの低いユウスケの代わりに代弁していますw

そして…

出ました！火野映司！！

最終回後なので、（ちよつとコア大戦とズレが生じますが）アंकがない設定です。

そんな彼が、何故紫メダルを持っているのか？

次のうち、どれ！

1・エイジスから奪った

2・王環エイジから奪った

3・ぷーちゃんから奪った

4・食玩

理由が明らかになるのは、9〜10話ぐらいですかね？

ちなみに映司洗脳の原因は、「アंकを失った心の傷」では決して

ないので悪しからず。

というより、士は「戦いが終われば写真館に戻る」と言う行動すら利用されていますね。

まるで、アंकを待ち伏せするロストアंकのような敵さんw

最後に出てきた人の正体は！？

## Episode 8：逃走（前書き）

ブラカワニ「前回までの、DCDRWは！」

・【神】が出た

・スーパーとスカイライダーが戦った

・スーパー1勝った

・龍騎がゼネラルモンスターを地獄の業火で葬った

・昭和組、アポロガイストと会う

・火野青年現る

・もやし襲われる

ブラカワニ「よし以上」

士「ちょっと待て！それだけか…それだけかお前！ッ！」

ブラカワニ「だってパパン、そろそろバイトの時間だもん」

士「…バイトなら仕方がない」↑背後からタジャドルとシャウタの殺気を受けつつ

## Episode 8：逃走

星ノ宮町の隣にある、あけぞら朱空町。

ここには、ゴッドショッカーの支部の一つがあった。  
朱空町にある支部の周辺区域から集められた人間は、ここで改造手術を受けた後、ゴッドショッカー本部へと運ばれていく。

今日もまた、改造されたもの達は専用の収容車に入れられて、本部に送られる…例えるなら、まるで家畜のような扱いだ。  
しかし…

「…追え！追えーッ！！」

「改造人間No.5103とNo.5104が脱走した！繰り返す…」

「No.5103だけは何としても逃がすな！」

今日は、違った。

ここで改造された改造人間が二人、隙を見て脱出したのだ。

いつもならば、改造される際に脳への改造手術も行われ、ヒロシ同様ゴッドショッカーの忠実な兵士になるはずだった。

だが、どうやら脳改造手術を担当された研究者が装置を取り付けようとした瞬間に、意識を取り戻したNo.5103が反抗して…同じように脳改造を受けるはずだったNo.5104と脱走を試みたのだ。

科学者や戦闘員が総出で追いかけるも、二人…というより、主にN

0・5103の圧倒的な戦闘力の前に黒焦げにされていた。

「……くつそお、まだ追ってきやがる！」

「本当にこれでよかったの!？」

「煩せえ！俺達をこんなワケの分からない体にした奴らなんて、まともじゃねえに決まってるだろ!！」

「それはそうだけど！」

脱走を続けていたのは、胸に“S”の文字を刻んだカブトムシの男と、天道虫を模した女。

一人は、改造人間N0・5103…仮面ライダー・ストロンガーこと、“紫電シゲル”

もう一人は、改造人間N0・5104…電波人間・タックルこと、

“花崎ユリコ”

元々は、同じ『朱空町立 櫻蘭高等学校』の三年生で、シゲルはアメフト部のエース…ユリコは学校一の美女と言われている。

彼らもまた、数日前にゴッドショッカーによって誘拐され、改造人間にされていた…

タックルは背後を何度も振り返りながら騒いでいたが、ストロンガーは得意の電撃で邪魔をする戦闘員達を蹴散らしながら、彼女と口喧嘩をしていた。

今、自分達が何処を走っているのかは分からない。

しかし、敵は地の利があるのか、次第に二人を追い詰めていく…

タックルはそもそも、『逃げ切れる』とは思ってもいなかった。

むしろ逃げる気力すらなかっただろう。

自分と同じように捕まえられ、少しの間言葉を交わして仲良くなった、同じ年頃の少女も…タックルが改造される前に改造手術を受け、失敗し、死骸はゴミのように捨てられていた。

だから「自分もあなるのだ」という諦めもついていたし、改造が上手くいったとしても、自己を奪われ心のない兵士へと変わっていくことは予測できていた…

だが、シゲル…ストロンガーはそれを【拒絶】した。

必死に抵抗して…改造されて間もないと言っのに、偶然自分の能力でもある電撃を発し、研究者が怯んでいる隙に隣にいたタツクルも助けて一緒に逃げ出した。

「ちょっと!」

「ああん? 何だよさつきから!」

「…何で私まで助けたの!」

「はあ?」

ストロンガーには、タツクルの問いの意図が分からなかった。

——タツクルは、少なくとも自分まで助ける必要はないだろうと、やや自虐的になっている。

ストロンガーの戦闘能力は高い。

タツクルと一緒に逃げるより、単独で逃げたほうが、足手纏いを抱える必要などなく…脱走の成功する確率は高かっただろう。

しかし、ストロンガーの答えは単純なものだった。

「馬ア鹿、一人より二人ってよく言うだろ! ノリだノリ!」

「ワケ分らない! 私と一緒に逃げたところで、何も変わらないじゃない!」

「…だーっ、口煩い奴だな! いいからお前もやれよ、正直人手が欲しいんだよ!」

「——まさか逃げられる気での!?」

正気?

この数よ。それに、こんな広い施設よ?

正直、いつの間にこんな施設ができたのか……朱空町の出身であるはずのタツクルも頭を悩ませていた。

しかし“今まで誰も気付かないように準備されていた”と考えるところな奴らを相手に、これから自分達はとうすればいいのか。こつやつて、逃げ続けるしかないのだろう。ずっと、永遠に。だがストロンガーは、はつきりと言い放つ。

「誰が逃げるって言った？」

「え？」

「……戦うんだよ！俺達が、俺達として生きる為になー！！」

——そんな理由で、こんな大組織を相手に逃げる

「いえ、戦うっていうの？」

馬鹿だ。馬鹿を軽く超越した馬鹿だ。他に例えようがないぐらいの馬鹿だ。

しかし、そんな馬鹿に自然と付き合っている自分も、馬鹿だと言うことにタツクルは気付く。

「ああもう」とタツクルは振り返ると、背後から迫ってくるシヨツ  
 カー戦闘員に両手を向ける。

そして、自身の中の電波エネルギーを衝撃波に変換し、敵に触れずに十数体ものショットカー戦闘員を投げ飛ばしていた。

「電波投げ！」

「「「イツ!!?」」」

「おお、やるじゃねえか！その調子で、後ろ任せたぜ！！」

「……たくもう、あんたホントに馬鹿——あんたみたいな男に付き合う私も、大馬鹿ツ——私とこいつを一緒に改造したゴツドシヨッカーなんて、もつと大馬鹿——ツ——!!」

タツクルはぐちぐちと文句を言いながらも、ストロンガーが仕留め損ねたり後から追加で追ってきたりする戦闘員達を、得意の電波投げで蹴散らしていく。

「馬鹿上等」、と叫びながらストロンガーも高い戦闘力を生かしてひたすら突き進む。

互いに喧嘩しながらも、そのコンビネーションは絶妙だった。

少なくとも、二人は学校でたまに顔を合わせる程度で、話をしたことも関わったこともないのに。

「それにな、噂で聞いたんだよ！俺達と同じようにして、ゴッドシヨッカーから逃げ切った奴がいるってな！！」

「そうなの！？…っていうか、その人きつと軍隊の人とかじゃないの、私達に同じことができると思ってるの！！？」

「先人がいるならできる！それに、もしかしたら脱走した改造人間が他にもいるかもしれない………そいつらを集めて、ゴッドシヨッカーに対抗するんだ！！あ、お前副リーダーな」

「出来るわけないでしょ、完全に逃げ切ってから言いなさいよ！それと…勝手に副リーダーに決めないでよーッ！！」

くくく

オーズ・プトティラコンボの構えるメダガブリューの一閃が、土を襲う。

ギリギリの所で土は攻撃をかわし、斧の一撃は、写真館の壁に放たれる。

ガラ…と壁の一部が崩れ、土は息を呑む。

避けられなければ、今頃は、自分があゝの壁と同じ末路を辿っていただろう…

そう思いながらも、自らを『ゴッドショッカーの一員』と言い放った映司に言い放つ。

「映司！一体どういうことなんだ、お前が…ゴッドショッカーの仲間だと!?!」

「ああ。嘘じゃない」

「正気か。人間を改造して、総てのライダーに復讐しようとしている奴らなんだぞ!」

「——それが?」

冷たく放たれた一言。

同時に、今度はメダガブリューを垂直に振るおうとするプトティラ。だが…

そんな彼の背後から、銃声が聞こえる。

ダン！ダン、ダン!!

三発の銃弾はプトティラに直撃し、土はその隙に、通路とプトティラの間に僅かに開けられた合間目掛け…階段を滑り落ちるようになして降りていく。

すぐさま立ち上がると、土の視線の先には、ディエンドライバーを構えた海東が立っていた。

「やれやれ、ゴッドショッカーに動きがあったと思っただら…」  
「海東!」

「士、逃げるよ。…ほら、そこで棒立ちしている二人も来たまえ」  
「あつ、そ、そうでした」

「ああ。あんなの相手に、勝てるはずがないし…！」

夏海とユウスケも、慌てた様子で写真館の外に出る。

プトティラは「待て」と言わんばかりに追いかけてくるが、海東はふふんと得意げにある物を取り出す。

…直径2cmほどの、小さな丸い玉だ。

それをプトティラ目掛けて投げつけ、それは反射的にメダガブリュ―で叩き斬る。

しかし、その瞬間斬られた玉からは粉のようなものが舞い散り、プトティラは苦しむ。

士は訝しげな顔をしながら、海東に尋ねる。

「…海東、あの玉は何なんだ？」

「胡椒だよ。まあ、士から前に貰ったお宝に比べたら、その辺に売られている陳腐なものだけだね」

…胡椒で最強フォームを止められるものなのか？

士はそう思っていたが、現にプトティラは想像以上に苦しんでいる。胡椒と言え、普段ならば“くしゃみ”を思いつくだろう。

しかし、今回の場合はプトティラの視界そのものを潰し、そのために苦しんでいるのだ。

仮面をしていると言っても、視界を覆われてしまつては、透視するしか相手を確認する術は全くないだろう。その隙に士と海東も写真館から逃げ出す。

士は海東と共にマシンディケイダーに、ユウスケは夏海と共にトライチェイサー2000に乗って写真館から逃走。

プトティラはようやく視界を戻したのか、翼を広げて追ってくる。二つのバイクが、一体の恐竜に追いかけられる。

傍から見れば、随分と奇怪な光景に見えることだろう…しかしプトティラに追われているのは、現実。

海東は再びディエンドライバーを構えると、プトティラに照準を構え、銃弾を発射する。

それはプトティラの空中での姿勢制御に必要なエクスターナルフィンを貫き、バランスを崩されたプトティラは道路の上に倒れる。

この隙に、マシンデイクイダー・トライチエイサー2000は速度を上げ、数km離れた場所にある廃工場に逃げ込んで、その中で息を潜める。

「…これで、ひとまずは安心だな」

「ああ…」

「それにしても映司さん、どうして…」

士は激しく息を切らせながら、建物の壁に背もたれる。

ユウスケと夏海もその場に座り、チラチラと外の様子を窺いながら、プトティラがいないかどうかを探る。

海東も、工場内の機材に身を隠すように座りながら、士達に言う。

「どうやら、【神】とやらの操られているみたいだね」

「なんだって？…映司が操られている、だと」

「ああ…」

海東は視線を落ししながら、士に説明を始める。

——海東は昨日、士と別れた後…偶然にも人間を誘拐しようとしていたゴッドショッカーの一員を発見し、その後を尾行していた。そうして辿り着いたのは、朱空町にあるゴッドショッカー支部。

海東はショッカー団員の一人を気絶させて身ぐるみを剥ぎ、変装し

た上で、ここで造られた改造人間を輸送する為の車両の中に忍び込み本部まで向かった…

本部に到着した海東は、ゴッドショッカー内部に自分の求める【お宝】を探す…というのは建前<sup>ついで</sup>で、ゴッドショッカーの目的を探ろうとしていた。

そして…

「僕は【神】とやらと幹部級が話している様子を目撃してね。…聞き耳を立てていたら、………そういうことらしい」

「映司が操られた………待てよ、じゃあ、俺の持っているカードがブランクになったのは」

士は、懷からオーズのカードを取り出す。

カードは未だにブランク状態のまま、それを見た海東は、同情したような目で士を見る。

「…ゴッドショッカー大首領、つまり【神】によつて、洗脳されたせいだろ。オーズはディケイドの仲間ではなくなった、カードの力が消えるのも仕方ないことだよ」

「じゃあ、あの話はなんだったんだ…。アंकが消えて、コアメダルも総て無くなったって言う話は！嘘だったとでも言うのか！？」

「それは…きつと真実だよ。僕も詳しいことは分からないが、古代の錬金術師が作ったコアメダルが割れるなんて…普通じゃできないことだ」

士は映司から聞いたコアメダルの件は嘘だと疑うが、海東は否定的しかし、あのコアメダルを砕くなど、確かに総てを無に還す紫のコアメダル以外では、ありえないし…映司がアंकのメダルを破壊するとも、到底思えない。

つまりメダルのだりは真実なのだろう。

それと同時に、新たな疑問が生まれる…映司の話が本当だとすると、彼が使っていたコアメダルは一体誰のものなのか？どうやって手に入れることができたのか？？

それだけではない。

オーズである火野映司がゴッドショッカーに洗脳され、敵となったがために、カードがブランクになったのだとしたら。

…今手元にある、総てのブランクカードは…

「——まさか、他の奴らも…！」

士は、ヤモリジンとの会話では『リ・イマジネーションのライダーの大半は、ゴッドショッカーの襲撃に屈しただけ』だと思い込んでいた。

しかし映司の例を見る限り、洗脳されている可能性もあるのだ。

そんな。

だったら、あいつらは。

士はブランクカードとなってしまったアギト・ファイズ・ブレイド・響鬼・電王・キバ・ダブルのカードを眺める…

先程の戦いで、クウガの総てのカードとカブトのカードのいくつかは敵に奪われ、手元にあるのはカブトのカメンライドと、龍騎全般カブトと龍騎はブランクカードになっていない辺り、まだ大丈夫とも言えるのだろうか、それもいつまでもつか…

そうしていると、工場の奥から人影が現れる。

士達は、息をぐくりと呑み…海東はディエンドライバーを構えて警戒している。

すると、そこから現れたのは

——士が『そうであってほしくない』と信じていた、光景だった。

「お前ら……」

アギト、キバ、響鬼、そして……士としては顔を合わせたことのない一人の少女。

少女はオーズドライバーを装着すると、赤・黄色・緑のコアメダルをセツトし、オースキャナーで読み取る。

『タカ！トラ！バツタ！……タ・ト・バ、タトバ、タツトツバ！……』  
独特の歌が流れ、この場に現れたのは、映司と違う仮面ライダーオーズ・タトバコンボ。

何、と士は動揺しながらもディケイドドライバーを構えていた。

「オーズが、もう一人だと！？」

「成程……あつちは、リ・イマジネーションのオーズか。だったら、さっきのオーズ君がメダルを使えたのにも納得がいく」

「……きゃあああ！」

夏海の叫び声が響く。

背後を振り返ると、そこには、プティラコンボがゆっくりと歩いてきているのが見える。

……キバーラが何処にもいないせいで、5対3という圧倒的に不利な状況。

それも一人は、最強形態。

士は舌打ちをしながらも、何とか彼らを退けようとディケイドドライバーを取り出す。

「くそっ、やるしかないのか……！」

「やれやれ。ナツメロンはその辺に隠れていてくれたまえ」

「……」

「は、はい」

夏海は海東に言われたとおり、機材の後ろに隠れる。

士はカードを取り出してドライバーに入れ、海東は変身用のカードをディエンドライダーのスライド式装填口に入れ、銃口を天井に向けた。

ユウスケも、静かにアークルを出現させ、変身の構えを取る。

「変身!」

『Kamen Ride DECADE!』

『Kamen Ride DI-END!』

ディケイド。

ディエンド。

そして、クウガ。

三人の仮面ライダーは、操られた五人のライダーを見据え…そして、特攻していく。

〃  
〃  
〃

スーパー1とスカイライダーは、アポロガイストと戦いを繰り広げる。

しかし、アポロガイストの方が戦い慣れている上に、あちらは細身剣と盾の武器を持っている。

スーパー1が相手の攻撃を引きつけているうちに、スカイライダーが空中から攻めようと試みるも、先程のスーパー1との戦闘で凍らされた影響か、重力低減装置が起動しなくなっている。

「くっ！？起動しない…！」

「しまった…さっきの戦いで、凍らせるんじゃなかった！」

「くくく。どうやら、まともなメンテナンスをしない限り、セイリングジャンプは封じられたも同然のようだな」

仕方なく、スカイライダーは相手の懐に回りこんでキックを放とうとしたが、盾に受け止められてしまう。

アポロガイストにとっては、重力低減装置の故障などなくとも、彼らに勝てる自信があった。

理由は簡単だ。

二人とも、改造人間の体での戦いに慣れていない。

スカイライダーは三年も前から改造されていたが、脳改造によって自我を奪われゴッドショッカーの忠実な兵士だった為に、月島ヒロシとして戦うのはこれが初めてとなる。

スーパー1は実質2回目、敬一郎にファイブハンドやスーパー1の体の仕組みについて教えられていたとしても、それを戦いの中で活用するまでには時間が掛かるだろう…

その点、アポロガイストにはこれまで培われてきた戦闘技術がある。今の彼らの状態を簡潔に説明するなら、——熊に喧嘩を売る虫のようなものだ。

「だが、それが使えようが使えまいが…お前達程度では私には勝てない」

「くっ…」

「…ッ」

「さて、遊びは終わりだ」

そう言つて、アポロガイストは剣を振り上げる。

——勝てないのか。

——ケイスケや、博士の仇を討てないのか…！

スーパーは一瞬諦めた。だが、ここで諦めていてはそれこそ二人は浮かばれない。

せめて、刺し違えてでも…倒す！

そう思い、相手の攻撃に対するカウンターを放とうと、構えを取る…

その時だった。

ブォン、とバイクの音が聞こえる。

スカイライダーとスーパーは、バイクのエンジン音が聞こえる方向を向く。

音がするのは、アポロガイストの背後…彼もまた、後方を振り返る。すると、アポロガイスト目掛けて白いバイクが突撃してくる。

アポロガイストはバイクの突進を盾で受け止めると、操縦者を確認しようとする。だが、バイクは無人…

どういうことだと驚いていると、一つの影が、アポロガイストの頭上に見えた。

思わず上を見上げたアポロガイストだが、その人物の背には…太陽。勿論、太陽の光で視界は潰され、目が眩んでしまう。

その間に、相手は重力加速度を加えたキックをアポロガイストに放つ。

「ぐうつ…！？」

「あれは…」

「…誰？」

アポロガイストに初のダメージを与えた、その姿は…  
黒いマフラーをつけ、銀のマスクや赤の複眼、額にある2つの“V”  
”が特徴的。

右手には、両端に赤いグリップの棒を持っている。

その姿を見たアポロガイストは、仮面の奥で目を見開く。

「貴様…まさか！」

「俺が相手だ、アポロガイスト」

その人物は棒を構えると、軽く跳躍しながら、アポロガイストに勢いよく振り下ろす。

アポロガイストはそれを盾で受け止めようとするが、受け止められた瞬間、その勢いを利用してアポロガイストの背後に回りこむように反転。

そのまま着地すると、素早く棒を振るって相手の右脇腹に一撃を叩き込む。

——彼の戦い方に、スーパー1とスカイライダーは純粋に「凄い」と思っていた。

自分達は武術を学んでいるが、あのアポロガイスト相手に対しては、まともに通用しなかったというのに。

一方でアポロガイストは、幹部の意地か相手の右腕を狙う。

しかし、相手はそれを避けずに…武器を左手に持ち替えた上にあえて右で受け、代わりに武器を細身剣に近い形状へと変化させると、アポロガイストの体を貫く。

「な…！」

「…ライドルホイップ！」

「ぐうっ！？」

自分達では手も足も出なかった、アポロガイストをここまで。  
アポロガイストとしても、手応えのある相手に出会えて嬉しそうに  
している

…というだけではない。

まるで、【宿敵】を見つけたかのように、嬉々としていた。

「まさか、貴様がこの世界にいたとはな…X！」

“X”

それが、彼の名前なのだろう。

アポロガイストの口振りからして、知り合いなのかとスカイライダー  
Iは思っていた。

しかし、X本人はだらんと右腕を垂らしながら、左で武器…ライド  
ルホイップを構えてアポロガイストと対峙する。

それを見たアポロガイストは、若干違和感を覚える。

自分の知っているXは、利き腕をそう易々と犠牲にする戦い方をし  
たか？

それに、乗ってきたバイク…クルーザーで突進した上に、乗り捨て  
て確実な一撃を叩き込むなど、戦い方が既に破天荒。

「……いや、リ・イマジネーションのX…か。随分と荒い戦い方だ  
が、戦闘経験は？」

「ない。ゼロだ」

「…ぜ、」

その言葉に、双子は呆然としていたのは言うまでもない。

勿論、アポロガイストも。

…戦闘経験がゼロと言うことは、自分との戦いが実質、改造人間と

なつて最初の戦いとなるだろう。

それなのにあの動き、もはや、天性のセンスとしか言いようがない。右腕一本奪われた状態の相手に勝つことは容易いだろうが、それは普通の相手だった場合。

だが相手の戦法はまるで読めない。

それに、この場にはスカイライダー・スーパー1もいる…Xよりは楽な相手には違いないが、この場に仮面ライダーが三人。アポロガイストには、不利でしかない。

アポロガイストは高らかに笑いながらも、剣を引く。

「——ははは…実に面白い。さて、このまま戦ってもいいのだが…流石に仮面ライダー三人相手は不利も同然」

「待てッ！」

「…やめろ、無駄に死に行つて何になる」

スーパー1は踵を返したアポロガイストを追おうとしたが、それを止めたのはXだった。

「ただ、と反論するが」

…その直後にライドルホイップを向けられたかと思えば、それはライドルスティックに変形し…突然長さの伸びたそれに脳天を軽く小突かれていた。

軽く、と言つても『ごっん』という鈍い音が聞こえ、スーパー1は頭を抑えてその場に座り込む。

「…あだだだだだ」

「だ、大丈夫…カズヤ…？」

「——お前は、無駄死にする為に改造人間になったのか？」

Xは横転していたクルーザーの車体を起こすと、その座席に跨る。

その言葉に、スーパー1はすぐさま首を横に振る。

自分は死にたくて改造人間になったのではない。

ヒロシを、兄を助けたかったから。彼を孤立させたくないから、改造人間になった。

「違う。…違うけど、」

「だったら生きる。死んだ人間の分まで…生きるしか、ないんだ」

「X、」

「…勝てないと分かっている相手に向かっていくのは、勇敢でもなんでもない、——無謀だ」

それだけ言うと、Xはクルーザーに乗って走り去っていく。

そんな彼の背をぼんやりと眺めながら、二人は変身を解く…

しかしカズヤは、Xが最後に残した言葉。

あれは自分に言っていただけではなく、X自身の戒めであるかのように聞こえていた。

それに…どうしてか、自分達と会話を交わしていた時のXは、寂しそうな顔をしているようにも見えていたのだ。仮面で、顔は見えないはずなのに。

ヒロシも同じことを感じていたのか、ポツリと呟いていた。

「…強かったね」

「…ああ」

「だけど、…どこか悲しそうだった」

「そう、だったな。それに…なんかどこかで…」

しかし、こうやって立ち尽くしている暇はないと、二人は仁家に足を踏み入れる。

…アポロガイストは、敬一郎が深手を負ったケイスケを連れて、地下の研究室に逃げ込んだと言っていた。

アポロガイストが爆発に巻き込まれたところを見ると、研究室の口ツク解除に手間取っているうちに爆発が起きたか…、それとも扉に近付いた直後に爆発が起きたのか。

いずれにしても、中に仁親子がいたのなら、爆発に巻き込まれて確実に死んでいる可能性が高い。

現に…地下研究所に続く階段は、壁が崩れているせいでどの道行くことはできない。

「そんな…」

「…ケイスケ、敬一郎博士」

だが、それでもカズヤは諦めなくなかった。

もしかしたら、二人の死はアポロガイストの狂言で…本当は生きているかもしれない。

他人が聞けば藁に縋っているようなものだが、それでも良かった。何も信じないよりは、マシだった。

とにかく一旦外に出ようとしていたその時、ヒロシは何かに気付き、台所に向かう。カズヤもその後を追いかけて、そして、目を見開く。

——テーブルの上には、蟹玉チャーハンの材料。

更に、床には何故か床に散乱している片栗粉と…大量の血痕。

それを見たカズヤは涙を流しながら座り込み、ヒロシは悲しみを堪えるように、笑顔でケイスケ愛用のエコバッグを抱きしめていた。

「…ッ！」

「待っていてくれたんだね。…こんな姿になった俺達を、本当に、

…迎えようとしていてくれたんだよ、ね」

「……う、ケイ…スケ、——ケイスケエエエエッ…！」

うわああああ、とカズヤは激しい嗚咽を漏らす。  
そんな彼の背中を、ヒロシは鞆を抱えたまま、小さく撫でることしかできなかった。

T o B e C o u n t e d …

\*\*\*

〈次回予告〉

「ああ、ショッカー戦闘員の皆さん落ち着いて。俺達は仲間なんです」

『プットッ ティラーノヒツサッ』

「戻ってこい、ヒナ！…目を覚ませ！！」

E p i s o d e 9 : 合流

## Episode 8：逃走（後書き）

フリーダムパパンw

適当だけど、もう、それがパパンですww  
そして4番目がなんら間違っていない罫：

5103番だけは遊びました、完全にw

後藤さんのリイマジじゃないけど。

しかしユリコ、美女設定のわりにシゲルとケンカ腰w

ちなみに年齢としては、シゲル18歳・ユリコ17歳です。  
名前の由来としては

紫電シゲル↓電氣の名前に拘りたかった

花崎ユリコ↓「百合」の「花咲き」乱れる」と言う感じに

ストロンガーは馬鹿です。

どうしようもない馬鹿です。

でも曲がったことは嫌いな、純粹な馬鹿です。

多分城戸より馬鹿ですが、そこそこ頭はあります。ただの馬鹿じゃないです。

誰にでも、基本的にオープンな馬鹿です。

でも何でもかんでも鵜呑みにするほどの馬鹿じゃないです。

…あとがき含めて、今回の話で何回“馬鹿”言っただけw

ちなみに、忍び込んだ車両はオーロラでショートカットしたため、海東が半日で星ノ宮まで帰って来れました。帰る時は、どうせこの世界に来た時と同じ移動手段でいいですね。海東もまた、世界の旅人ですから。

そして…

ワタル！シヨウイチ！アスム！ヒナ！映司！

友よどうしてライブマン！！↑

更にヒナちゃんがいることで、ある可能性が浮上してきましたね…  
というか、次回予告でもうばれてますがw

そして、スカイライダーも重力低減装置を使えないと言う非常事態が…

誰かメカニックを！

と思っていいたら、別の意味でメカニックライダー来ちゃいましたね。そして初回補正付きの

…といってもこの人、多分、補正続くと思います。

初回補正以上に強力な、「謎の仮面戦士」補正（通称：キュアミューズ補正）がありますから…！

分かっていても知らぬフリをなるべくしてください

ちなみにタキシード仮面はノーカウントです

リイマジと言うよりは、この世界のXが正しいですね。

そして、当然ながら戦闘経験がまったくないという…なんという…

ゴリバゴンツツコミに続く、ライドルツツコミですかそうですか  
ケイスケさんの遺品マイバッグ…

この人どこまで仁家の生活担っていたの…

次回は、ヒロシがドS先生。

## Episode 9：合流（前書き）

プトティラ「これまでの、【仮面らいあーじけいど…リーまじねー  
しょんわー】は！」

えーじがプトになって、もやち…もにやち…もにやちい…みよにや  
ち…

ケイスケ「もーやーし」

もーやーし！

…に、襲い掛かったけど、なまきよ…なみやこ…ななこ…なみやき  
よ…

ケイスケ「ナーマーコ」

ナーマーコ！

…がえーじのプトに何か投げて、目が痛いよう

ケイスケ「お前じゃないぞ？…埃が目に入ったなら、水で洗ってこ  
い」

はーい…omO

（2分後）

ケイスケ「はい再開」

うん！

もやち達は工場に逃げ込んだの。

そこにあじと…あぎちよ…あじちよ………ぶええO□O

ケイスケ「アーギート」

アーギート！

…と、きぶあ…きびや…びば…

ケイスケ「キーバ」

キーバ！

…と、ひびち…ひひひ…ひびち……ぷえ？

ケイスケ「ヒービーキ」

ヒービーキ！

…と、ヒナのタトバが、もにやち達に襲い掛かってきたの！

ケイスケ（タトバとかは言えるのか…）

それからね、あぼりよがいしゅと…あぴよりよがいしゅと…あばぽ  
ぽばがいちゅと……○□○

ケイスケ「…長い名前無理そうだし、アーポーロ」

アーポーロ！

…が、しゅかいらいだーせんしえとしゅーぱーわんせんしえーと戦  
つてたよ！

ケイスケ「スカイライダーとスーパー…まあどうでもいいや…通  
じるし……」

うん○○○

それからね、えつくしゅせんしえーがやってきて、あぼりよ逃げた  
の！

ケイスケ「先生達のフルボツコか…」

うん○○○

プトティラ「…価格の破壊ちゃじけーど、プトに高いお肉を買わせ  
て、そのまちゅろは何処に行く！」

ケイスケ「はいよくできました」

士「ちよつと待て！」

## Episode 9：合流

仁家を後にした、ヒロシとカズヤ。

カズヤは涙を拭い、一方でヒロシは、周囲を見渡している…

街の外観は自分の知っているものと同じのようで、少しずつ違っていたりする。

例えば、ケイスケの家の隣は犬を飼っていなかったのだが、赤い屋根の犬小屋がある辺り飼い始めたのだろう。

小さい頃に通った駄菓子屋は潰れ、小奇麗な理髪店になっている。その向かいのラーメン屋も、昔は汚れが目立っていたのだが、【新装開店】という看板を掲げ、壁も真っ白になっている。

——三年という月日は、三年前で時間が止まっていた彼を困惑させるには、充分だった。

行くあてもケイスケ達への手がかりもなく町を彷徨いながら、ヒロシは呟いていた。

「……なんだか、俺の知っている場所じゃないみたい」

「ヒロシ？」

「カズヤも、町の様子も『変わっている』のに…俺だけが『変わっていない』っていうか」

ああ、でも、俺も変わっている部分はあるか。とヒロシは困り顔で笑う。

その変わっている部分というのは、【人間ではなくなった】という

ことなのだろう…

それを聞いたカズヤは、視線を落とす。

今のヒロシは恐らく、浦島太郎と似たようなものなのだ。

竜宮城から帰った後、自分だけは全く変わっていないのに、周囲の様子や人は変わっていった。

そして、乙姫様からの土産物である玉手箱を開けたがばかりに、大人になる過程を飛ばして老人になってしまった浦島太郎。

…最もヒロシの場合、歳を取るのではなく、『改造人間となって』しまったのだが…

カズヤも、どう声を掛けていいのか分からない。それどころか、自分のしたことは間違いだったのかと心のどこかで思い始めていた。

そうしていると…

「イーッ」という声が複数から聞こえ、それを聞いたヒロシが過剰反応する。

カズヤにしてみれば、一体何なんだと思えるような奇声だが、ヒロシはカズヤの手を取って、隠れようと叫ぶ。

「…ゴッドショッカーの手下だ！」

「えっ、…あの『イーッ』が!？」

「それは…ええと、掛け声みたいなの…返事みたいなの…よく分からないけど、とりあえず言えることは、隠れたほうがいいってことだ！」

しかし、近くに身を隠すようなものはどこにもない。

どうしようとヒロシが戸惑っていると、カズヤはゴミ置き場の影にVマシンを隠し、自分もそこに隠れた。

その際、カズヤは手を伸ばして「こっちへ」と手招きをし、ヒロシも身を隠して様子を窺う。

やってきたのは、全身黒タイツという奇抜な格好の軍団。

ヒロシの話によると、元々は“シヨツカー”という組織のシヨツカ  
ー戦闘員らしい。

夜ならば、黒タイツであるために姿も視認できず、ある意味で恐ろ  
しいのだが…白昼だと随分と間抜けな格好に見えなくもない。

その中には、黒の羽をつけた赤いベレー帽を被ったシヨツカー戦闘  
員——恐らくは、その隊のリーダー的な存在なのだろう——がおり、  
他の戦闘員達に言い放つ。

「……何としても、No. 5103とNo. 5104を探し出せ  
！特に5103は、ディケイドと合流させるな！！」

「「「イーツ！」「」」

(No…?)

(多分、改造人間か…改造人間用の実験体の名称。……俺は“ネオ  
シヨツカー”や一部の幹部にはスカイライダーって呼ばれていたけ  
ど、それ以外にはNo. 193って呼ばれていたから)

ヒロシの解説に、カズヤは「成程」と納得していた。

そして、ヒロシは覚えている範囲で言葉を付け足す…

まず、ゴッドシヨツカーには日本に15の支部と本部を構えており、  
支部ごとにナンバーの違いはある。

ここではNo. 193と呼ばれていたヒロシを例に挙げると、改造  
人間となったものは一度本部の方に運ばれて、その能力を図ること  
になる。

その際、同じ番号が重ならないように、今度は番号の前にAやBと  
いったアルファベットを振られるのだ。つまり、本部に運ばれた瞬  
間ヒロシはNo. G-193となる。

改造人間の中で能力が高い者は本部に残し、『来るべき戦いの日』  
に備えて待機・訓練を重ねており、そうでない者は各支部に配属さ  
れる。

スカイライダーへの改造が成功したヒロシは、本部で待機していた。しかし“ディケイドとクウガの抹殺”を命じられたゼナルモンスターは、「同じライダーと戦わせれば動揺し、確実に任務を遂行できる」ということで、彼を同行させていたのだ…

（じゃあ、実際には…改造人間化に失敗した人達を含めて、万単位の人間が…）

（誘拐されたりして、改造されて、廃棄処分されるかそのまま戦力にさせられるか。…特に、仮面ライダーを作るためにはかなりの数の人が犠牲になったらしいし）

（…人間を何だと思っているんだ！）

（よくは覚えていないんだけど、俺達の他にも仮面ライダーはまだいるらしいよ。最も、俺は会ったことはないんだけど）

ヒロシの言葉に、カズヤは、まだ仮面ライダーと呼ばれる改造人間がいることを知る。

ならば、先程会ったXも、そこで造られた改造人間なのだろうか。カズヤはそう考えていたが、ヒロシの話だと、Xは本部でも支部でも見かけた記憶がないらしい…

と言っても、ヒロシが知らないだけなので、本当はそこで作られて脱走した可能性もあるが、それだとアポロガイストが驚いていたことと一致しない。

しかし、今ここにはいない相手のことを話しても仕方がないだろう。今は何とかこの場をやり過ぎしながら、土と合流しなければ…

カズヤはそう思いながら、ショットカー戦闘員達が何処か別の場所に行ってくれる事を待っていた。

そうしていると、帽子を被った偉そうなショットカー戦闘員は、複数の戦闘員を率いて別の場所に向かう…他の団員達は、周辺の搜索をするために残ったのだろう。

「あーあ、復活しても俺達は下っ端かぁ…世知辛イーツ」

「しょうがなイーツで…シヨツカー幹部の一部だけじゃなく、その他の世界から集めてきた奴らまでイーツるんだから…」

「それに、仮面ライダーまで脳改造手術の成功だけじゃなく、【神】の力で仲間になってイーツるんだから…俺達目立たないイーツよな」

(……何故、所々『イーツ』が…)

(でも、このままだといずれ見つかるし…どうしたら)

愚痴をこぼす戦闘員達はともかく。

確かに、このままでは隠れていることもばれてしまうだろう…そうになったら、周囲にいるであろう仲間まで呼ばれてしまう。どうすればいいのだろう。

そう考えていると、ヒロシが「そうだ」と提案を出してくる。

彼の出してきた提案は、下手をしたら自分達が捕まってしまう可能性が高いもの…

しかし、何もしないでいるよりは、大分マシだろう。

となると問題はVマシンだが、敬一郎博士がカズヤを改造中に、S-1自身の意思で呼び出すことができるとのことだったので、このまま隠していても問題ないだろう。

二人は飛び出し、シヨツカー戦闘員は反射的に武器を構えるが、ヒロシは笑顔で説明する。

「ああ、シヨツカー戦闘員の皆さん落ち着いて。俺達は仲間なんです」

「…何イーツ…?」「」

「その証拠に…スカイ、変身!」

ヒロシは変身ポーズを構えると、変身ベルト・トルネードが出現し、スカイライダーに変身。

それを見たシヨッカー戦闘員達は、イイツ!?!と驚いている。

——ヒロシの作戦は、『敢えて敵の中に飛び込んで、この場をやり過ごす』こと。

敵にスカイライダーが脳改造から解放されていることを知られていればまずアウトだろうが、そこは、相手を油断させる為に洗脳から解けたフリをしていた…とでも言えはいい。

ヤモリジンからの情報が行き届いているのならそうすればいいし、そうでなかったとしたら、味方のままで通せばいい…

今回の場合は、——後者だった。

「スカイライダー!ということは…」

「こっちの味方で、間違いなイーツてことか…」

「で、隣の男は?」

「スーパー1です!」

「ちょ」

堂々と、惜しげもなく正体をばらされたカズヤ。しかも兄の手によって。

どうなるんだと思いつつも、カズヤはシヨッカー戦闘員の出方を窺う…

すると戦闘員達は、スカイライダーの言葉に過剰反応していた。

恐らく、下っ端と言うことで詳細な情報は入ってきていなかったのか…それとも本部や支部側がゴタついていて連絡が上手くいっていないのか。とにかく、自分達のことを知らないのはラッキーだ。

「…スーパー1!?!」

「仁博士に協力を要請して、優秀な人間を改造してもらったんです。なので、スーパー1も味方です!」

(大丈夫なのか、これ…)

「ほら、証拠」

「は？」

「変身」

「…は！？」

結果として、カズヤもまた、変身させられてしまう。

変身したことで、ショッカー戦闘員達も完全に信用したので、よしとも言えるが…

心の中で仁親子に謝罪するスーパー1をよそに、スカイライダーは戦闘員達に尋ねていた。

（敬一郎博士…ケイスケ…、……ゴメンなさい…）

「これから、スーパー1と共にディケイド殲滅に向かおうと思うんですけど…どの辺りにいるか分かります？」

「ディケイドだったら、確か、星ノ宮三丁目3-15にある廃工場に誘き寄せたと聞イーツた気が」

「え？でもあれ、もう人数は足りてイーツるんじゃないか？」

「そうそう。確か、ディケイドの仲間だったライダーを使って…」

——ディケイドの仲間のライダーを使う。

それを聞いた二人は、顔を見合わせる。

…嫌な予感がする。

流石双子だけに、反応速度はピタリと一緒。

スーパー1はVマシンに乗り、スカイライダーは空を飛んで移動しようとする…が、重力低減装置は壊れたままで、移動ができない。仕方がないので、スーパー1のバイクの後ろに乗って、ショッカー戦闘員達に手を振る。

「…どうもありがとうございまーす！」

「しつかり捕まってる！…結構飛ばすぞ！！」  
「「「イーツ！」「」」

武運を祈るように、敬礼するシヨツカー戦闘員達。  
だが…

そのうちの一人が、首を傾げながら呟いていた。

「……あれ、でも確か、スカイライダーってゼネラルモンスター様と一緒にディケイドを始末しに行って、逆にやられたって聞イーツたような」

「「「イーツ？」「」」

そのまま、考えること2分…

彼らはようやく、スカイライダー（と、スーパー1）に騙されたのだと理解していた。

~~~~~

「……へっ、どーだ、…ちゃんと生きて出てこれたじゃねえか…」
「……何言ってるのよ…偶然逃げ込んだ場所に、コレがなかったら、今頃何されていたか分かったものじゃないわよ…」

シゲルとユリコは、ボロボロになりながらも口喧嘩を続けていた。ゴッドシヨッカー支部から脱走する際に用いた、カブトローとテントロー。

ユリコの言ったとおり、——二人は警備に残っていた戦闘員達に追いつめられ、逃げ場を失いながらも、改造マシン用車庫に逃げ込む。その際、ストロンガーが例によって「こいつを使って突破する」と言い出し、タツクルは何度も「無理」と言うが、それでも突っ切っていく暴走牛^{ストロンガー}……

一人残されてもどうにもならないと悟った彼女も、テントローに乗ってストロンガーの後をついていくように飛び出す。

そして……向かってくる戦闘員をバイクで跳ね除け、障害物は跳び越し、脱走に成功したのだ。

今は二人とも変身を解除し、何処か身を隠せそうな場所を探している。

「しかし、逃げているうちに、星ノ宮町にまで来たのか……」

「……隠れる場所なんてあるわけないわよ……この辺にもきつと、あいつらが張っているでしょうし……」

「何とかなるだろ」

「ならないわよ!」

何処までノープランなのよ、とユリコは心の中で悪態を付く。

……しかし、彼がいなければ今頃自分はゴッドシヨッカーの手駒になっていただろう……

そのお陰で、自分まで追われる羽目になったのだが、人の心のないままよりは少しはマシだろうと前向きに考えようとしていた。

朱空町出身の彼らは、星ノ宮に身を隠せそうな場所があるかどうか分からない。それよりも、自分達を匿ってくれるところなどあるのだろうか？

そう思っている…

「——おい！お前ら、そんなボロボロでどうしたんだ」

二人に声をかけてくる男が、一人。

見たところ、二十代前半だろう。

ユリコはゴッドショッカーの人間だろうかと警戒していたが、シゲルは、気軽に男に話しかけていた。

「いや、実はちょっとワケありでさあ…隠れる場所を探してるんだよな」

「って…馬鹿ーッ！」

「成程な。…俺もちょっとワケありで、隠れられる場所に行こうとしていたんだ。よかったら、そこに行くか？」

明らかに怪しい誘い。

ますます男を不審に思うユリコであったが、男は不意に右腕を抑え、それを見たシゲルは男に怪我をしているのではと問い詰める。

とにかく、何事にも突っ込んでいく男。

それが、この数時間でユリコが学んだシゲルの性質であり…会って間もない男が感じた第一印象。

「…怪我しているのか？」

「大丈夫だ。まだ少し、痛いぐらいで」

「そうか…なあ、あんた、何があっただ？——あー、俺らは、ゴッドショッカーに追われて…」

「俺もそんなところかな。後、友人探し」

「…友人？」

そう、と男は苦笑い気味に言う。
傷の痛みか、それとも、その友人のことが心配なのか……
どちらにしても、今はここで立ち話をしている場合ではない。
男は「ついてこい」と言わんばかりに、シゲルとユリコを案内していた。

——その同時刻。

デイケイドはアギトとオーズ・タトバコンボを、デイエンドは響鬼を、クウガはキバとオーズ・プトティラコンボを相手に戦う。
数の上では、圧倒的に不利。

デイエンドが歌舞鬼や轟鬼を出して援軍を増やすが、それもいつまで持つか……

アギトは身体能力に優れるストームフォームとなり、ストームハルバードと呼ばれる槍を振り下ろす。

デイケイドはライドブッカー・ソードモードで攻撃を受け止めながら、アギトSFに向かって叫んでいた。

「目を覚ませ、ショウイチ！……俺達が分からないのか！？」
「……知らない」

感情のない言葉。

彼だけではない。オーズ二人も、響鬼も、キバも……まるで感情のない人形のように、淡々と命令をこなしていたのだ。

『ディケイドを始末する』

彼らに打ち勝っただけではなく、洗脳までしてディケイドの戦力を奪う…

ゴッドシヨッカーの徹底されたディケイド潰しには、ディケイド本人も正直賞賛していた。

その時だった。

オーズ・タトバコンボがバツタレッグの跳躍力を生かし、縦横無尽に飛び回りながらディケイドとの間合いを詰める。

何処から来るか分からない攻撃。

ディケイドは相手の出方を警戒しながら、今の状況について考える。

——状況は、最悪だ。

カードの力はほぼ総て奪われ、クウガやカブトのカードの一部も奪われてしまっている。

まともに使えそうなのは、龍騎単体。

しかし龍騎は今の状況を打破するには向かない。それは何故か…
廃工場の中は薄暗く、電気も点かない上に反射するものは殆どない。
唯一の頼みは外からの光だが、最悪が重なって天候は曇り。

これでは外からの光で、機材が照らされて鏡面反射をすることが不可能。鏡面になるものがなければ、ミラーワールドを移動する戦法は不可能。

「こうなったら、ブラフを掛けてみるか…」

『K a m e n R i d e K A B U T O!』

もしかしたら、いくら強大な敵でも、連絡が充分に行き渡らなければ…今オーズ達を操っている奴らは、カードを奪われたことは知らないはず。

そう思い、ディケイドはカブトにカメンライドした。

カブトの最大の特徴はクロックアップ。

いくらあいつらでも、高速の世界を翔ける相手への対処はできない

はず！

…キバはユウスケが抑えている。咄嗟にバツシャーで対処されることもない。

そう思つて、ライドブッカーを振るつたDカブトだったが

「——クロックアップできないカブトになって、何の意味がある？」
「何ッ…」

アギトSFの言葉に、一瞬驚いた。——それが、命取りになった。彼の腹部に、ストームハルバードが横薙ぎに直撃。

がっ、と苦しむDカブト…

更にオーズ・タトバコンボがDカブトの背後に回つてトラクロード強襲。

腕を交差するように切り裂き、Dカブトへのカメンライドが解除されてしまう。

オーズ・タトバコンボはゆっくりディケイドに近寄りながら、足のメダルをゾウに変化…タカトラゾへとメダルチェンジを行う。そして、倒れていたディケイドの頭部を軽く踏みつけていた。

「ぐああっ…！？」

「……あなたがカブトになつても意味がないことは、皆、知ってるの。残念だったねディケイド、あなたにはもう、どうすることもできない」

「くっ…」

「確実に止めを刺してあげる」

オーズ・タカトラゾはそう言いながら、セルメダルを四枚取り出す。それをオーズ・プトティラコンボに投げ渡し、彼は何も言わず、メダガブリューにそれを装填していた。

——ストレインドウム。

メダガブリュー・バズーカモードでの必殺技であり、オーズのコンボの中でも、圧倒的な破壊力を誇る大技。

セルメダル1枚でもかなりのものなのに、4枚も使われれば…下手をすればここにいるアギトS.F.らを含めて全滅する。

ディエンドは響鬼によって召喚ライダーを撃破され1対1に持ち込まれ、クウガはキバと取っ組み合いを続けているせいで、止めに入ることはできない…

ディケイドは必死に叫ぶが、その声はプトティラには届かない。

「やめろ、映司！今使ったら、俺だけじゃない…他の奴らも全員消し飛ばぞ！！お前はそれでいいのか…それがお前の望んだことなのか！？」

「ごめん士。でも…さよなら」

『ゴックン』

メダガブリューが、セルメダルを4枚飲み込んだ。

そして、そのままバズーカモードに変形されたそれを構え、プトティラは照準をディケイドに向ける。

今の位置で撃てば、プトティラ以外総てが吹き飛ばことになるだろう…

少なくともそれは、映司の一番望まないことだ。

だからこそディケイドは止めたかった。止めたかったが、止められなかった。

『プットッティラーノヒツサツッ』

銃口にエネルギーが蓄積され、全員その場に固められた状態で動けない…

夏海も、プトティラの圧倒的な威圧感に腰を抜かしたのか、今いる

場所から動けない。

ディケイドは何とか夏海だけでも逃がそうとしたが、タカトラゾによって動けない状態ではどうすることもできないでいた。

プトティラは引き金を引き、紫の光線が放たれる

……その前に、何者かが鞭のようなものでメダガブリューを奪い取るうとしていた。

プトティラはそれを奪われまいと抵抗し、両者の引き合いは拮抗状態に陥る。

結果として、照準を完全に反らされた状態でストレインドウムは発射…ディケイド達に当たることなく、工場の屋根に大穴を開けるのみに留まった。

誰、とタカトラゾが叫ぶが…その前に彼女に掴みかかる形で、何者かが飛来して来た。

頭部はプテラノドン、胸部はトリケラトプス…といった、紫色のグリード。

紫のグリードはオーズ・タカトラゾを引き剥がし、ようやく解放されたディケイドは起き上がりざまにアギトSFにライドブッカーを一閃。

必殺技を阻止されたプトティラは鞭を手繰り寄せようとするが、

「……映司イイツ！」

「！」

引き寄せる力を利用され、プトティラに突っ込むオーズ・シャウタコンボが視界に入った。

両腕を塞がれた状態のため、スキヤニングチャージには至らなかったが…相手の力を利用した蹴りは、意外と効いているようだ。

三人目のオーズ。そして、紫のグリード。

流石にこればかりは想定外のように、この場にいたほぼ全員が戸惑っている…

そうしていると、シャウタは一旦間合いを取ったプトティラに液化しながら接近する。

「馬鹿」とディケイドが叫んだ。

「何やってるんだ！プトティラコンボは…」

「……おおおっ！」

ディケイドが忠告する前に、プトティラがエクスターナルフィンを広げ、強力な冷気の風を送る。

プトティラの属性は、氷河期を思わせる氷。

つまり液化化するシャウタとは、相性が非常に悪い…特攻するとしても、タジャドルかラトラーターぐらいしか効果がないだろう。

案の定シャウタはそのまま凍らされ、プトティラはそれを容赦なくティルディバイダーで砕く。

だが

——氷結範囲外にあった一滴の水がゆつくりと動き、空気中の水分を集めてシャウタは姿を再生。

プトティラの背後を取ると、電気ウナギムチで相手を拘束し、そのまま電撃を放つ。

一方でオーズ・タカトラゾもタカジャゾにメダルチェンジを行い、恐竜グリードに応戦するが…相手の力が違いすぎるのか、歯が立たない。

しかし、恐竜グリードも決定的な一撃を叩き込めず、タカジャゾに向かって叫ぶのみ。

「くっ…」

「戻ってこい、ヒナ！…目を覚ませ！！」

「無駄だ王環。——完全に洗脳を受けている以上、余計な感情を捨てないとお前がやられるぞ！それで、メダルを3枚も奪われたんだろっ！！」

王環、と呼ばれた恐竜グリードは……くっ、と未だに割り切れないような顔でオーズ・タカジャゾを見る。

一方でシャウタは、橙のコアメダルを3枚取り出し、プトティラを見る。

どうやら、恐竜グリードはヒナと呼ばれたタカジャゾ……シャウタは映司ことプトティラと関係があるようだ。

しかし戦力が増えたことに関しては、正直、ありがたかった。

このまま、一気に形勢逆転できれば……！
そう思っていたその時だった。

『退け。恐竜グリードはともかく、三人目のオーズは想定外だ』

その場に小型の飛行カメラがやってきたかと思えば、取り付けられていたスピーカーから声が聞こえる。

音声加工されているのか、相手が男か女か分からない……しかしただ一つだけ言えることは、……突然アギトSFらがその場に跪いた。一体なんなのか。

そう思っていると、恐竜グリードが敵意を剥き出しにして言い放っていた。

「貴様……ヒナを返せ！」

「王環、落ち着け！……成程、お前が、ソウジの言っていたゴッドショッカーの【神】か」

「……この声の主が、【神】……！？」

ディケイドは驚いたように、飛行カメラを見上げる。
この場に直接姿を現さないで、見下ろすかのように告げる存在……
とりあえず、得体の知れないことだけは分かった。

『理解が早くて助かるぞ、三人目のオーズ。……しかし、リ・イマ
ジネーションの世界でもない住人でも仮面ライダーになれるとは、
興味深いものだな』

「そんなことどうでもいい。…今すぐ、俺の仲間を帰してもらおう
か！」

『それはできない。我々にとっても、いい手駒だからな…お前もそ
のはずじゃないのか、ディケイド』

「なんだと…？」

『お前は今、手駒の力を失ってほぼ無力に等しい。脱走した改造人
間や、今その場にいるオーズらが集まったとしても、ゴッドショッ
カーには勝てない……絶対にな』

そう告げると、飛行カメラは言うだけ言って立ち去っていく。

更に、その後を追うようにキバ達も無言で去る…

恐竜グリードとディケイドはその後を追おうとしたが、シャウタの
電気ウナギムチで足を引っ掛けられ、派手に転倒してしまう。

「おい、待て…ぐおっ！？」

「ヒナ…ぐあっ！？」

「だから落ち着け。——ボロボロの体で行ってもやられるだけで、
それに王環、……お前は襲撃された時の傷が癒えていないだろう」

「……彼の言うとおりだよ、士。それと恐竜グリード君。今の状態
で戦って、まともに勝てる相手じゃない。かつての仲間だったら、
尚更ね」

シャウタだけでなく、変身を解いた海東にも言われ、ディケイドは悪態をつきながら変身を解除する。

恐竜グリードも人間の姿に戻り、シャウタもメダルを外して変身を解除する…

その際、シャウタの変身者が映司に似た顔と知り、驚愕。

その人間は本来なら、ここにはいけないはずの者だし…それにオーズであるとは、到底考えられなかった人物でもある。

そんな時だった。

遅れてようやくスーパー1とスカイライダーも合流し、スーパー1は首を傾げながら土に尋ねていた。

理由は勿論、彼にとっても初の顔見せとなる二人の男だ。

「土——あれ、その人達は…」

「ああ、こいつらは…といっても、右の奴しか知らないんだが…」

「……王環エイジ。…リ・イマジネーション…とかいうのに分類される世界の、——恐竜グリード・ギルだ」

「俺はエイジス・レーヴァティン……通りすがりの仮面ライダー・オーズだ。宜しく頼む」

To Be Counted…

〈次回予告〉

『俺もそう思ったんだが、タジャドルとシャウタに怒られた』

「俺は映司を止めたいから、来たんだ」

「———何でここにいるんですかぁッ!？」

Episode 10：侵食世界

Episode 9：合流（後書き）

待っていてくれるほどケイスケは暇じゃありません
ただしぷーちゃんには付き合います

ヒロシの状態は、他でもなくヒロシ自身が一番辛いでしょね。
自分にとっては何も変わっていないくて当然のはずなのに、少し眠っていただけなのに、三年と言う月日で人も場所も変わった。

三年間、改造人間として過ごした記憶はゴッドシヨッカーとしての悲惨な記憶ばかり。

それ以外については記憶に残っておらず、今までやってきたことと脳改造から解放されて思い出せた自分の感情・意思・記憶とのギャップ…

ちなみに、脳改造は感覚神経も若干麻痺させて、どんなに攻撃を受けても動かなくなるまで戦い続けるようになっていきます。

脳改造から解放された今は、今まで痛くなかったものが鋭い痛みを感じるでしょうね。

「イーツ」はギャグですw

目立たないどころか、目立ってますww
それより、ヒロシが若干黒い件について。

【敵を欺く為には、まず味方（≡弟）から（利用する）】…こいつスカイライダーじゃない、スーパー1だ。

どこかのDS先生だ…！

と言っても、本来ヒロシがS-1となるつもりだったので、ある意

味では正しいかとw w

そして気付くのが襲い戦闘員達…何このスカイライダーw
こっちに関しては、スーパー1が被害者って何だこの世界…

シゲルとユリコは、あれでよく逃げ出せたって感じですね。

逃げ出してもらわないと、戦力的にキツイのですが…

そしてシゲルが安定の馬鹿w

右腕を痛めている様子の男性ですが、さて、彼の正体とは？

シヨウイチ相手にカブトって…

火に油を注いでいるぞ士！それはむしろ燃料を投下している！！↑
ヒナちゃんマジ亜種。

そして無色メダルの有効活用してますねえ…今度出る時も、きっと有効的に使っているはず。

士の言葉でも説得できない映司。

彼を含め、洗脳を掛けられた者達は倒すしか方法がないんでしょうか？

ここでまさかの、王環ギル&エイジスシャウタ参戦！

生憎、エイジスはメダガブリューを引っ提げて来ていないようですが…

エイジスもエイジも互いに天邪鬼ですが、エイジスはからかい半分に・エイジは慣れていない相手にあだ名を使います。

少し違うのは、映司を交えて呼ぶ場合。

映司は「エイジス」「王環さん」で大丈夫ですけど、エイジは映司と同じ名前なので呼びづらく「火野」・エイジスは問題なく「映司」。

エイジがエイジスと呼ぶ時は、名前が長いし少しややこしいので「レヴァ」と仕方なく短く纏めているだけであって、実際エイジスの

ことは深く信頼してます。

エイジスは火野のほうを「えいじ」呼びにしているので、エイジは当然（後から知り合ったので）「王環」。

…しかし安定のエイジスシャウタ。

『恐竜グリード・ギル』と言う時の王環さんの間は、「言いたくないけど言わないといけない」みたいな感じです。

エイジスは…うん、サラツと士のパクリw

次回は何故タジャドルとシャウタが…？

Episode 10：優食世界（前書き）

タジャドル「これまでの、DCDRW…3つの出来事！」

1つ！

月島兄弟は、ショッカー戦闘員と鉢合わせ…土達の危機を知る。
しかし、その際自分のスカイライダーとしての立場だけではなく、
弟のスーパー1としての体をも利用する…

黒い、スーパー1先生並みに黒い！！

カズヤ「俺の貞操を何だと思ってるんだよお前orz」

ヒロシ「でも、ある意味体の童貞は奪われたようなものじゃん。S

-1に」

カズヤ「言っな！」

2つ！

紫電シゲルと花崎ユリコは、なんとか脱走に成功…

そうしていると、謎の男に声を掛けられていた！

男の正体は一体！？

シゲル「所で、あんた、名前は？」

???「通りすがりの…歩く他人への死亡フラグだ」

ユリコ「何それ不吉！」

そして3つ！

廃工場で襲撃されたディケイド達…

その危機を救ったのは、銃火器シャウタと破壊の王ギル！

相変わらず銃火器シャウタは、銃火器を使わなくても使い方が危なかった！！

エイジ「レヴァ、流石にあの戦い方は冷や汗掻いた」

エイジス「そうか？一回やってるんだが」

士「シャウタとして最悪だなお前」

タジャドル「主役の破壊者ディケイド、自らの主役の座を他者に奪われ、その瞳は何を見る！」

士「奪われてない！奪われてない！！」

シャウタ「えー？主役スーパー１じゃなかったっけ」

タジャドル「俺、Xだと思ってた」

Episode 10：優食世界

ディケイド達との通信を終えた後、【神】はフツツと笑っていた。

——想定外の出来事が起こった。

三人目のオーズ。

アポロガイストと対峙したという、Xライダー。

そして、【龍騎】の世界に送ったはずの部隊が未だ帰ってこない。

しかし、彼にとって想定外のことはいつでも覆せる。それほどまでに微弱な要素だということだ。

彼は自分の手の内にあるディケイドの物と酷似したカードを見て、ニヤリと笑う。

そこに描かれていたのは、オーズのカード。

一枚だけランクカードがあったが、気にするほどのものでもない。地獄大使や、ジャーク將軍と共に、近くに控えていた映司に【神】は訊ねた。

「——三人目はお前の知り合いのようだが、心当たりは？」

「……さあ、分かりません」

「まあ、お前の世界では石版の封印を解いた人間しかオーズにならない。……リ・イマジネーションのオーズは、かつての王の血脈しか使えない。……そのいずれにも該当しない奴がオーズなど、想定外もいいところだな」

「【神】よ、どう致しますか」

ジャーク将軍が、尋ねる。

その言葉に、【神】は少しだけ考える…

ディケイドを追い詰めるのも大事だが、来るべき日のために準備は進めておく必要がある。

そのためには、一番の障害となるであろう、ディケイドの無力化…つまりディケイドの仲間である、ライダーは確実に保持しておきたい。

取り返されれば、ディケイドの手駒が増える。それは非情に面倒だ。そうしていると、地獄大使がその場に跪きながら、ニヤリとした笑みで【神】に告げる。

「それでしたら、もう手は打ってあります」

「何？」

「——この世界の人間どもを、残らず改造人間にするのです。私の配下の戦闘員達は、既に実行に移しております」

「なっ…馬鹿者、それではこれまで、気付かれぬようにしてきた意味が…！」

地獄大使の独断行動に、ジャーク将軍が憤る。

だが…

それを諫めたのは、【神】だ。

「抑えろ、ジャーク将軍」

「しかし…」

「仮面ライダーというのは、目の前の人間は放っておけない。例え、自分達の功績は認められなくとも…奴らを誘き出すいいエサにはなるだろうな」

「……くっ」

【神】が賛成的では、ジャーク將軍にはこれ以上否定はできない。ふふん、と地獄大使は得意げな笑みを見せるが…

そこへ手負いのアポロガイストが、現れる。

彼はその場に跪くと、【神】に報告を開始していた。内容は……二つあった。

一つはXのこと。そして、もう一つは…

「——報告します」

「何だ？Xの件なら、既に聞いているぞ…三人目のオーズや紫のグリード同様、カブトによって召喚されたり・イマジネーションか。それとも…」

「それは私にも。一つだけ言えることは、…奴は普通のライダーとは少し感覚が違うようです」

「ほう」

「そしてもう一つ。……影からの報告で、ディケイド達は星ノ宮町三丁目の廃アパートに潜伏しているようです」

成程、と【神】は腕組みをする。

直接遊んでやってもいいが、絶望させるのはもつと後でいいだろう…そう思った彼は、自分では直接動かず、ディケイド達への攻撃は映司に任せた。

「……オリジナル・オーズ。お前は戦闘員100体を率いて、ディケイド達を襲撃しろ。メダルは、リ・イマジネーションのオーズから何枚か借りて行け」

「…分かりました」

それだけ言うと、映司は頭を下げ、静かに準備へと向かう…

それを見ていた地獄大使は、疑問に思っていた。

彼がいるなら、何故、リ・イマジネーションのオーズが必要なのか？

ディケイドを封じるなら、確かにオリジナルのオーズが必要だったが…メダルを借りる為だけに、リ・イマジネーションのいる世界を攻めるのは改造人間兵の無駄遣いだ。

その疑問が表情に出ていたのか、【神】はくくつと笑いながら、地獄大使に説明していた。

「――地獄大使。オリジナルもリ・イマジネーション、二つともいるのかという顔をしているが…二つとも必要だから、迎え入れたまでだ」

「何…？それは、どういう」

「確かに、ディケイドのカードの無力化にはオリジナルが必要だ。だが、…オリジナルの世界はコアメダルがもはや、存在しないに近い」

【神】によると…

オリジナルであるオーズの世界は、最終決戦で紫のメダルのギガスキャンにより発生したブラックホールで、メダルの殆どが吸収。

紫のメダルに至っては、砕け散っていた。

ディケイドの戦力減らしだけで考えるなら、彼との友情を築いた映司を捕まえる必要がある。…現に、オーズになれない上に、一人旅をしていてバスらとも離れていた彼を捕まえるのに、苦労はしなかった。

しかし、オーズのメダルを使えるに越したことはない。

そう思い、リ・イマジネーションのオーズの世界も襲撃した……そして、いくつか犠牲を出しながらも、最終的には【神】自らが向いてオーズを手中に収めた。

…戦いの中で分かったことだが、リ・イマジネーションのオーズは、危機的状況にあったとしてもコンボを使いたがらない。

オーズのコンボは強大な力を持つ。だからこそ、こちらとしては使わせたいところだが…長年のクセは、洗脳をしている状態でも抜け

ないようだ。

そこで重要性を増してくるのが、オリジナル。

彼はコンボを使うことに抵抗はなかった。

そこに目をつけ、亜種はリ・イマジネーション…コンボ——特にコンボのみの恐竜メダル——はオリジナル…という具合に区別をつけたのだ。

「見たところ、三人目もシャウタでやり続けていたところを見るに…コンボに見境がないか。それとも、コアメダル自体が特殊で、コンボへの負担もないのか…亜種を知らないか」

「しかし、オーズは分身攻撃を得意とするコンボもあります」

「確かに…数の差を少しでも埋められれば、こちらが不利に…」

「——それだったら、あの攻防でシャウタ単体に頼らない。……ひよつとすると、オリジナルにもリ・イマジネーションにもない“弱点”があるのかもしれないな」

三人目のオーズとの戦闘で感じたこと。

それは、相手が氷属性と分かっているにも…不利なシャウタで押し切ったことだった。

ラトラーターのライオディアスやタジャドルの炎なら、冷気は防げた。

それ以前に、ガタキリバの分身能力ならば、数の暴力で突破できたはず…

そのいずれもできなかった理由は、…上手く行けば次の攻防で明らかになるはず。

「オリジナルでも、リ・イマジネーションでもない、X…そして第三のオーズ。予想外ではあるが、だからこそ退屈しなくて済む」

くくく

外では、地獄大使の宣言通り…デストロン戦闘員やショッカー戦闘員達が人々を捕まえ始めていた。突然現れた黒タイツの集団。

文字通り“不気味”であるそれに追われ、人々は何がどうなっているのか分からず、混乱していた。その時だった。

乗り捨てられた雑誌回収用の青いトラックの上に、シオマネキングが立って言い放ったのは。

「——聞け！人間共…この世界は、我々ゴッドショッカーの戦闘員養成所として選ばれた！！」

戦闘員養成所。

それだけ聞いても、人々は何のことだか分からない…

しかし、シオマネキングの近くに控えていた蜂女は、細身の剣を撫で…妖艶な笑みを浮かべつつ説明していた。

「早い話が、私達と同じように改造人間となる。…それが下っ端の戦闘員か、それより上のものになるかは…素質次第だけれど」

「ふ、ふざけんな！……警察は何をしているんだ！？」

太った中年の男が、顔を青ざめながら叫ぶ。

周囲にいた人間達も、そうだそうだとゴッドショッカーのやり方には否定的。

それもそうだろう。いきなりやってきて、『改造人間にするから捕まえられる』では誰もが納得しない。

だが…

ゴッドショッカーに批判的な意見を出した瞬間、警察服に身を包んだ者が二人やってくる。

太った中年の男は、彼らを手招きした後、シオマネキングと蜂女に指を刺していた。

「お、おい、早くしろ！警察なら早くあいつらを捕まえる！！」

「……」

「聞いているのか！？」

「……イーツ！」

よく見ると、警官二人もショッカー戦闘員と同じ黒いマスクをつけている。

警官の一人は太った中年に手錠をかけ、鳩尾に一撃加えて気絶。

そして、そのまま二人がかりで男を運んでいく…

更に、テレビ中継で映し出されていた国会の映像でも、突如異変が起こる。

【神】が地獄大使の独断を公式に許した瞬間、政治家達の中に紛れ込ませていた改造人間達が動き出したのだ。

勿論国会も混乱に陥り、大物政治家がカメラを独占したかと思えば、その姿を人から蝙蝠と蟹の複合怪物…ガニコウモルへと変えていた。

『ゴッドシヨッカーは、三年前からこの世界を侵食し始めた！警察？自衛隊？政治家？…そんなもの、【神】の前には無意味！！』

「——この世界にある重要な場所の総てには、ゴッドシヨッカーの一員が紛れ込んでいる。これで分かったでしょう…」

「お前達は、我々ゴッドシヨッカーの一員となるしかない！…逆らえば、死ぬだけだ！！」

ガニコウモルが、蜂女が、シオマネキングが言い放つ。

それを聞いた人間達は、悟った。

——自分達に味方はいない。

——警察や自衛隊といった武力も総て、ゴッドシヨッカーの手の内なのだ。

いくつかの人間は戦うことも逃げることも諦め、素直に捕まえらるる。

少しばかりの希望を求めた人間は、どうすることもできないと知りながらも、逃げるのみ…

まさに星ノ宮町は、阿鼻叫喚の図と化していた。

星ノ宮町三丁目にある、廃れたアパート。

ここは人通りも滅多にないことから、隠れ場所には最適…かに思われていた。

しかし、ここに来る途中、いやに戦闘員を見かける。

ある者は無差別に人を攫っていくと思えば、ある者は「No.5103 達は何処だ！」と探し回っている…

いずれここにも、足が及ぶだろう。

単独でアパートの周辺を探ってきた海東は、「お手上げ」といった

表情で座っていた土達に告げる。

「……駄目だね。何処もかしこも、戦闘員だらけだったよ。…中には『スーパー1とスカイライダーを探せ』と言っていたショック戦闘員がいたけど、君達、何をしたんだい？」

「は、ははは…」

「やっぱり、あの後でばれちゃったんだなあ…」

海東に軽く責められ、カズヤとヒロシは苦笑いを浮かべることしか出来なかった。

本当に、何をした。土は呆れるように二人を見ていた。

だが、海東の言う通りだとすると、傷が十分に癒えない今の状態では不利になっていくばかり…

ただ一人、無傷で済んだエイジス以外は。

それに対して、王環エイジ…と呼ばれた男はかなり辛そうな顔をしている。

土は彼が、自分のことを「紫のグリード」と言っていたことを思い出す。

グリードということは、求めるものは決まっている……自分の体を形作るセルメダルと、自分そのものとも言えるコアメダル。

エイジスは窓の欠けた部分から外の様子を見ながら、エイジの代わりに説明していた。

「……王環は、ゴッドショックの襲撃の際に…不覚を取られて自分のコアメダルを3枚奪われた。恐らく、映司が使っていたメダルが……それだ」

「——しょうがないだろ、まさか、…ああなるとは思わなかったんだ」

エイジの説明によると…

ゴッドシヨッカーによる襲撃は、オーズである王環ヒナ・鵜方キリハという男の変身するバース・ライドベンダー隊・そして恐竜グライドのギル…つまりエイジが応戦していた。

しかし、ゴッドシヨッカーの圧倒的戦力差にライドベンダー隊はほぼ全滅。

これを好機と見て、乱戦に紛れてオーズのコアメダルを奪おうとしたグライドもいたが、彼らも深手を負い。

そして…キリハの変身するバースも大破し、残るはギルとオーズ・ガタトラドルのみ。

ギルは戦闘員を片っ端から蹴散らす。

機械の体のため、壊れた部分がシヨートし、恐らく攻撃した時の感覚も…“思っていたものと違う”のだろう。そのために、動揺したライドベンダー隊はその隙を突かれてしまった。生憎とギルには、相手を殴った時・触れた時の感覚が人間のものは違う。だからこそ、動揺することはなかった。

『お兄ちゃん』

突然、オーズ・ガタトラドルが声を掛けてきた。

ギルはその言葉に振り返り、そして

『——貰うね』

ギルの体に、トラクローを突き刺していた。

それを引き抜く際、ギルの背からセルメダルがいくつか零れ落ちる…

しかしセルメダルが放出されたのは、さほど問題ではない。

問題なのは、…トラクローの爪の部分に紫のコアメダルが3枚引っ掛けられていたことだった。

ガタトラドルの狙いは、恐竜コアメダル。

事もあるうに実の妹にやられ、ギルはその場に膝から崩れ落ちるように倒れ、王環エイジの姿に戻る。

彼の視線の先から、ゆっくり歩いてくる影…

まるで貴族のように煌びやかな漆黒の服を身に纏い、顔には仮面をつけた男。

男はガタトラドルの手にある恐竜コアを見て、ニヤリと笑みを見せた。

『丁度プテラ・トリケラ・ティラノの三枚か。…だが、この馬鹿力グリードはもう少し枚数を抜いて、使えなくしたほうがいいかもしれない』

『お、まえ…ヒナに、何を…！』

『協力を取り付けた。——リ・イマジネーションのオーズはもはや、我々の手の内だ』

その言葉に、エイジは「信じられない」と言うような顔をしていた。少なくとも、ヒナがそんな簡単に屈するはずがない。

“嘘だ”

口がそう告げる前に、ガタトラドルがトラクローを再びエイジの体に突き刺そうとしていた…

その時だった。

今まで誰もいなかった場所に、突然、赤と銀の装甲に身を包んだカブトムシの仮面ライダーが現れ…ガタトラドルの腕を掴んでいたのは。

『…！』

『成程、この世界のオーズも既に洗脳済みというわけか』

『…誰だ…？』

『ほう、リ・イメージネーションのカブトか…自分の世界を見捨ててここに来たのか?』

『ある男に任せてきた。……アスム君達を洗脳して、何をしようとしている!』

カブト、と呼ばれた仮面ライダーが男に言い放つ。

男はふつと笑うと、未だ状況を理解していないエイジと…カブト・ハイパーフォームに静かに告げた。

余裕綽々。

その言葉が似合うかのように。

『新たなるディケイドの誕生』

『…何…?』

『…自分が新しい破壊者になろうと。そういうわけか』
ディケイド

『そう。そのために必要なのは、…戦力。そしてディケイドの持つ、カード』

男がそう言った瞬間、カブトHFに攻撃を仕掛けてくるものがいた。特殊な軌道を描く銃弾だった。

上から、下から、右から。とにかく色々な方向から襲い掛かってくる。

カブトHFはハイパーゼクターを使い、ハイパークロックアップを起動。

安全な場所に移動し、それを解除すると…カブトHFから解放されたオーズ・ガタトラドルは、攻撃手であるダブル・ルナトリガーと合流していた。

まさかダブルまで操られていたとは…

仮面の奥でカブトHFは舌打ちし、仮面の男は余裕を崩さず、オーズとダブルに言い放つ。

『ここは撤退するぞ。…コアメダルはいつでも奪える』

『はい』

『待て、ヒナ…ッ』

『無茶をするな。…コアメダルを奪われた痛みは、相当のものはずだ』

胸を押さえるエイジの肩を、カブトHFが軽く触れる。

…違う、「痛み」はない。

…だけど、「奪われた」ことは分かる。

…完全だったはずの自分の体が、「欠けた」事は分かる…

成程。これはグリード達が完全になることを求め、コアメダルを奪われることを恐れるわけだ。

エイジはそう思いながらも、ゆっくりと起き上がり、去っていく男とオーズ達を見ていることしかできなかった。

その話を聞いた土は、まだ疑問に感じる部分があった。

…王環エイジがここで戦うための理由は分かった。

『コアメダルを取り戻すこと』そして『妹を取り返すこと』

そうになると、エイジがここで戦う理由が分からない。彼の立場を考えると、尚更。

「成程、大体分かった。…で？お前は何でここにいるんだ」

「俺の場合は、王環と天井…もといソウジがいきなりやって来てな。俺に王環を押し付けてきやがった」

——エイジの話はこうだ。

多忙な日々を送っていたエイジスが、丁度休息を入れていたその時

…カブトHFとエイジが時空を越えてやってきた。

天使が豪腕を振るい、勇者が今日も素面で仮面ライダーになる——その日は何故か王蛇だった——、そしてピンクの球体が空を飛び、鼠が電気を放ち、赤い帽子の髭の男がキノコで巨大化する。

拳句の果てには、その世界全体が誇る…否、恐れるマッドサイエンティストが目を輝かせては近場の仮面ライダーに殴られる。

非日常的なことなど毎日起こっているような世界のためか、いきなり誰もいなかった場所に人が現れるという事態に対して、特に驚きはしなかったらしい。

そして、カブトHFは一言

『……火野映司君が、ある組織の敵によって操られている』

正直、エイジスとしては信じられなかった。

しかしカブトHFが嘘をついているようにも思えず、更に手負いのエイジを見て事態は大まかにではあったが把握する。

カブトHFが行った説明としては…「その組織はデイクイドを倒そうとしている。既に、何人かの仮面ライダーも奴らの手中に落ちた」。

シンプルではあったが、長話をされるよりはよほど分かりやすかったのだろう

…いや、面倒ではなかったのだろう。

『それで？俺にどうしろと』

『王環君と…ついでにここに来る途中で会った一家の情報だと、君はオーズになれるんだろう。それも、二人のオーズが持たないコンボの力も含めて。…その力を貸してやってくれ』

『……その一家が俺の知っている一家なら、そいつらも呼んだらどうだ？』

『俺もそう思ったんだが、タジャドルとシャウタに怒られた』

世界の危機だというのか、とは一瞬思ったものの…

彼らの事情（特に次男と三男と六男）を考えると、無理もないだろうとエイジスは納得していた。

——ついでに、ぷうぷう泣いて傷付いたエイジの心配をするペット（無敵のコンボ）の姿も脳内補充しながら。それに、彼としても映司のことは心配だ。

敵によって操られているのなら、どうにかしたい。

生憎とメダガブリューは現在修理に出しており、不安要素はいくつかあるが、カブトHFの頼みに乗っていた。

「だからと言って…いいか、これはヘタすれば命を落とすかもしれないんだぞ。それでもいいって言うのか」

士は、睨むようにエイジスに言い放つ。

頼みに行ったソウジもソウジだが、それを受けたエイジスもエイジスだ。

彼はその世界の中心的な立場にいる人物。

そんな彼の身に何かがあれば、一体どうなることか…

しかし、エイジスは相当頑固のようで、士を睨み返しつつ言い返していた。

「死ぬ予定もなければ、素直に何もしないで帰る予定もない」

「おい！」

「…俺は映司を止めたいから、来たんだ」

そう呟きながら、エイジスはオーズドライバーを見る。

彼の話だと、このオーズドライバーやコアメダルは、士もよく知るマッドサイエンティストが作ったようだ…

エイジも、今の人の技術でそれらを作ることは不可能…できたとしてもすぐに壊れるものだと思っていただけに、驚きを隠せない。エイジスがオーズとなった理由も、映司の影響が強いといえば強い。映司はエイジスにとって、心の許せる貴重な友だ。だからこそ、放っておくことはできない。

「あいつが手を伸ばす先を見失っているのなら、俺は、手を伸ばして道を示すために…ここにいます」

「………つたく、勝手にしろ」

「ああ、勝手にするさ」

士は若干呆れながらも、少しでも戦力が欲しいこの状況だ。

エイジスがオーズの力を使えるのなら、生身でゴッドショッカーに挑むよりは安全だと考える。

…それに、オーズの力を奪われた今となっては、エイジスに頼らざるを得ない部分も出てくるだろう。特にガタキリバの軍団戦は。

それで、とユウスケはエイジスに質問をする。

エイジスは多少ユウスケの目を見て警戒しつつも、質問には答えていた。

「…ソウジさんは、今、何を？」

「さあな。俺に王環を押し付けた後、王環の世界からかつぱらってきたバースドライバーを持って、何処かに消えた……今頃、シス・コムセと同じ顔の…みたらし団子にでも会いに行っているんじゃないか？」

~~~~~

——【龍騎の世界】

辰巳シンジは、逃げていた。

突如現れたゴッドショッカーの劣兵達。彼らに追われ、何とか身を隠しながら今後のことを考えていた。

…なんで俺、あんな変な格好の集団に追われているんだよ…

…俺が何をした。前に一回、取材を台無しにされた腹いせに変な塔を壊したただけだぞ…

しかし、それでも追っ手がなくなるわけでもない。

最初は何とか龍騎に変身して追い払っていた。

だが、ヒトデヒットラーの最期の一撃でカードデッキ部分が欠け、変身できても三回…ダメージを一度でも受ければその場でアウトという事態に追い込まれている。

カードデッキが壊れれば裁判員としての資格を失う。それはこの世界の【ライダー裁判】上のルールであって、それ以外だとどうなるか…

「それにしても…念のために有給休暇届け出しておいて良かったのか、それとも逆に心配されるから出さない方が良かったのか」

ゴッドショッカーに追われている身である彼は、どう頑張っても暢気に仕事をできる状況ではない。

最悪、レン達や取材先の相手まで巻き込むことになる。

どうしてもそれだけは避けたい。だからこそ、急ではあったものの  
…有給休暇を申請したのだ。

…それが受理されているかどうかは、玲子次第だが…  
とにかく、これからどうするべきか。  
そう思っている

「よ」

…背後から、笑顔で声をかけてくるソウジがいた。  
その瞬間、シンジの心臓は胸から飛び刺すかのように大きな鼓動を  
打つ。

そして、相手が自分の知っている人物だと知ると、バクバクと小刻  
みに動く心臓の部分を押さえながら、ソウジに言い放つ。

「——何でここにいますかあッ!？」

「この世界が、ある意味で最後だからだ」

「…はい？」

「シンジ。今起こっている状況は、最悪だ」

俺にとっては、あなたの脈絡のない登場も最悪の一つなんですが…！  
シンジは正直、そう思っていた。

だがあえて言わなかった。我慢が基本の社会人の、世知辛い癖だ。  
ソウジはそれを知ってか知らずか、真剣な顔で説明を続けている。

「俺は、運よくゴッドショッカーの奴らに捕まえられる前に、天道  
総司という男に助けられてな。…彼の話だと、他の世界にもあ  
つらは攻めたらしい」

「それって、カズマやショウイチさんの世界も、ってことですよね。  
…何のために？」

「……天道総司の話だと、ディケイドの無力化のようだ。しかし、恐らく大首領本人の男の話だと、自分が新しいディケイドになるうとして……とか」

ソウジも、今のところ情報不足でどう言っているのか分からないようだ。

分かっているのは、その天道総司が『ディケイドの救援に向かえ』と言っていたこと……

そうしていると、二人の目の前に白い服の青年と……黒服に黒のサングラスをつけた長身の男が現れた。

白い服の青年は、紅渡……オリジナル・キバ。

長身の男は、剣崎一真……オリジナル・ブレイド。

またも突然現れた二人組に、シンジは声を上げていた。

「また誰か来た!？」

「リ・イマジネーションのカブトに……龍騎ですね。本来なら、僕らが出会うはずもなかったのですが……」

「事態は今、最悪の方向に向かいつつある。このままでは、総ての世界が終わる」

「天道君もそう言っていたが、……具体的にはどうなるんだ？」

ソウジからの質問に、紅渡が答えようとする。

……だが、彼の言うことはいちいち回りくどい。

そう思ったのか、剣崎一真が彼の言葉を制止し、代わりに説明を始めていた。

「……生まれてはならない存在が、世界の融合の異変で誕生し……その結果、いくつかの世界で怪人達が復活している」

「融合の異変で……」

「その存在は【神】を名乗り、現状では決して倒すことができない。……ディケイドであっても、だ」

その言葉に、シンジもソウジも耳を疑う。

破壊者であるディケイドに、倒せない敵がいる。

一体どういうことだとシンジは訊ねたが、紅渡も剣崎一真も、【神】については詳しく調べている最中のようで、それ以外の事は全く分からないそうだ。

しかし、彼らでも分かっていることはある。

……ソウジとシンジまで【神】に洗脳されてしまうと、ディケイドは完全に無力に近い状態となることだ。

紅渡はシンジにあるカードデッキを渡し、説明をする。

「……あなたには、これを渡しておきます」

「これは……」

「そして……リ・イマジネーションのカブト。あなたには、これからある世界に行ってもらいます……恐らく、その世界のライダーはディケイドの助けになってくれるはず」

「ふむ。だがその前に、ある世界に寄って……シンジのデッキを直してもらってきてもいいだろうか？」

その言葉に、紅渡は少し考えた後……「いいでしょう」とあっさり許可を出した。

一方でシンジは、何でデッキのことを知って……と愚痴を漏らす。となると、問題はシンジを無力化するために敵が彼の大事な人間を人質に取らないかどうか。

ソウジの場合は、天道総司がそれを担っている。だからこそ、シンジは世界を自由に行き来できるのだ。

……しかし、それに関しては剣崎一真が立候補してくれた。

オリジナルでもある彼ならば、ゴッドショッカーの兵に簡単には屈しない。

シンジは「宜しく願います」と剣崎一真に頭を下げた後、ソウジと共に【ライダーのいない世界】へと向かっていった……

T o B e C o u n t e d ……

\*\*\*

〈次回予告〉

「くそっ、もうばれたのか!」

「く…やはりガタキリバじゃ、無理か…!」

「へっ、まだるっこしい。全員纏めて…ぶっ飛ばしてやるぜえッ!」



## Episode 10：優食世界（後書き）

この世界での主役は…

ディケイド↓一応主人公

オーズ（エイジス）↓序盤主人公

シンジ↓DCDリイマジ代表

スーパー1↓安定した主役ポジション

X↓ほぼシンジも同然+序盤から中盤までかなり絡む

スカイライダー↓恐らくスーパー1+X効果で食い込める

…30話までを序盤とするなら、ですけどね。

30話まではエイジス、かなり安定していますからww

ゴッドショッカーは、今までずっと隠れて行動を起こしてきました。ですが、地獄大使の独断を皮切りに、一斉に行動を開始…

三年の間に、既に政界や警察内にゴッドショッカーの兵を配置し、いつでも制圧できる状態であった以上、一瞬で片をつけた感じですね。

これが、後に言われる“ゴッドショッカー歴史的代号の日”

…といっても、言われるのは1〜2回だけなんですけどw

映司がいながらヒナも洗脳した理由は、ここにあります。

映司の世界ではコアメダルはブラックホールに飲み込まれた後の世界…もちろん、映司にオーズになる手段はありません。

けれど、ディケイドで“ディケイドの仲間”として認識されたことによって、ディケイドの持つカードの情報は生きたまま…

本来認知するべきはリンクだったのですが、リンクは一定のライダーになれないため、ディケイドライダーは映司の方で認識していたんですよね。

映司の力を利用するべく、リイマジオーズの世界も狙ったゴッドシヨッカー。

ヒナは知つての通り亜種しかしらないものですから、コンボの強力な力を使うためには、映司も必要だったわけです。

…ちなみに、エイジスのオーズの利点と欠点は次回で明らかになります。

冬映画で登場確定（出展：TVCM）となったガタトラドルさん何してんですかw

安定のトラ。

そして安定の亜種ヒナちゃん。

アスム君良かったな…シヨウイチじゃなくて君だったぞ、ソウジさんが呼んだの！↑

そして、ダブルまでもが洗脳されているという、完全に詰み状態。

エイジスの回想のお陰で、リンクとピットが今日も元気だということが判明w

しかし何故王蛇になった、リンク。

シスとレイラなんて平常運行ww

ちなみに、オオタチとオオスバメ（スピンオフ参照）は自分の世界に残ってきております。

ソウジさん、オーズ一家とも会っていたという…

そしてシャウタとタジャドルに怒られたという…！まあ、受験を3

人も控えていれば当然ですねww

更に、安定の脳内補正ぷーちゃん。

シンジさん龍騎にならないーッ！  
でも逃げ切ってるよあんなーッ！？

本当にありえねえですこの人。でも、ソウジさんが他の世界を巡っている間は、シンジ頑張れマジ頑張れ。

そして安定のソウジさんw

シンジは律儀にショウイチとカズマの名前を出したというのに…ソウジさんの第一声、アスム君……

オリジナルのキバとブレイドさんも出ましたね。

ただし、紅渡は「回rikどい」という理由で、ケンジャキに阻止されたという…ww

シンジに渡されたカードデッキとは？

ソウジに「デイケイドの助けになる」と言われたライダーの世界とは？

といっても、シンジはあまり捻りがないですし…ソウジさんも結構思いつく人は多いかと。

今回のガタキリバ何があつたw

よりもよって、ガタキリバが前書きをする日なのにww

## Episode 11：疾風轟雷（前書き）

ガタキリバ「…どうせ俺なんて、俺なんて…登場回数2回…」  
士「おい、あらずじ…」  
ガタキリバ「知らねえよそんなの！」

ガタキリバがくれた為、本日は別の人を担当します

エイジス「それじゃあ、DCDRW…あらずじだ！」  
エイジ「おー」

ゴッドショッカーのくだり…本格的に人攫いを公にやらかした

オーズが二人必要な理由…亜種のヒナ、コンボの映司

シオマネキング…数話後に、とあるシャキリタに殺害される予定

蜂女…notケガレシア

王環の参戦理由…妹を取り返す

王環のCount the medals…紫6枚（プテラx

2、トリケラ×2、ティラノ×2)

レヴアの参戦理由…映司を止める

オーズ兄弟不参加の理由…ガタキリバ・ラトラーター・タトバの受験

プトティラ…超安定

その頃のV3…平然とオーズ兄弟家で肉まん(自前)食ってた

みたらし団子の生存理由…終末サゴーズの意地

ガタキリバが落ち込んでいる理由…今回で分かる

エイジス「ガタキリバの出番の破壊者、ディケイド」

エイジ「予算を食いつぶし、その瞳は何を見る！」

士「俺に擦り付けるな！」

## Episode 11：疾風轟雷

——【ライダーのいない世界】

時空を越え、この世界にやってきたシンジとカブトHF。

見た所、至って普通の町並みで…遠くにロケット発射場らしきものさえ見えなければ、自分の住んでいる世界とは大差ない。

シンジはそう思いながら、如何なる時でも肌身離さず持ち歩いているカメラで、『パシャリ』と雄大に構えるロケットの写真を撮る。カブトHFはキョロキョロと周囲を見渡しながら、何かを探している。

「…一応、土達のいる場所に飛んだはずなんだが。少し着地点がずれたようだな」

「それにしても、静かですね…今の時間帯なら、人が行き交っていてもおかしくないのに」

「ここが特別、人通りの少ない場所なのか…それとも何かが起きたのか。いずれにしても、土達を探さないことには状況が把握できないな」

確かに、とシンジは呟く。

しかしカブトHFとは一緒に行けないだろう。

ディケイドを封じる為に、各世界のライダーの力を封じたゴッドシ

ヨッカー…

そんな彼らに対抗するための力があるのなら、手に入れておくに越したことはない。

となると、カブトHFはすぐさまその世界に行かなければならない。シンジとしてはカブトHFにはこのままいてもらいたかったが、そのような甘えは言っていられないだろう。それに、土の危機なら尚更。

「ソウジさんは、すぐさま別の世界に。…俺は何とか、自力で探してみます」

「大丈夫か？」

「…あなたが来るまでの間、ゴッドショッカーの奴らを撒いているんですよ。簡単には捕まりませんから、安心して行って来てください」

「ああ。…それからついでに、あの世界に寄ってカードデッキを直してもらおうよう頼んでみるよ」

「…逆にあのコムセに捕まらないでくださいね。それこそ時間のロスですから」

分かっている、と言いながら、カブトHFは別の世界・別の時空へと飛び立つ…

本当に大丈夫なのか。シンジはそれが不安だった。

彼の實力は折り紙つきだ。それは誰もがよく分かっていることでもあるし、紅渡達も…そして天道総司という男も分かっているのか、あえて単独で動かしているのだ。

だが、不安な面もある。

少なくともシンジは土と合流できれば、戦力面は解消される…先に来ているという二人も、恐らくは土と合流できている頃だろう。

しかしカブトHFは単独で動くからこそ、孤立無援の戦いを強いられる。ゴッドショッカーの動きにもよるが、果たして、何処まで持

ちこたえられるか…

「おい、そのあんた」

そう思っていると、背後から声をかけられる。

振り返ると、そこには一人の青年がいた…見た感じ体格はいいが、顔が若干幼さを残している。

恐らく、何処かの高校生だろう。

どうしたのだろうか。そう思いながらも、シンジは返事を返していた。

「…何か？」

「何やってんだよ。こんな道のと真ん中で、うろついていたらゴッドシヨッカーの餌食だぜ」

「俺は探し人をしているんだ。…ああ、そうだ、長身で態度が偉そうな男を見なかったかな…マゼンタの二眼レフトイカメラを首に下げているんだけど」

「いや、見てねえけど…ひょっとしたら避難場所にいるかもしれないな。寄ってみるか？」

シンジは自分で言うのもアレなほど、疑り深い。

——果たして、目の前の学生は信じられるのか？

——見た目は学生でも、ひょっとしたらゴッドシヨッカーの仲間かもしれない。

——子供が仮面ライダーになる世界もあるんだ、ありえない話でもない…

表情に出ていたのか、青年…紫電シゲルは「おいおい」と焦った様子で弁解し始める。

「大丈夫だって！俺は、ゴッドショッカーじゃない…むしろ被害者！！被害者なんだよ！！」

「…まあ、いいけど…証拠は？」

「あー、…電氣が使える？」

「…何処をどう信じろというレベルの説明ありがとう…」

嘘じゃないって、と何度も喚くシゲル。

正直、シンジよりも彼の大声のせいで見つかりかねないレベルだ…そう思っていると、数km離れた先の古いアパートから、何かが壊されるような音が聞こえた。

建物からは、砂塵が舞っている…恐らく、派手に戦いでも起きているのだろう。

それを見たシゲルは、バシン！と自分の正面で拳と手の平をぶつけ、そこから軽く火花を散らしながらも、砂塵の起こった場所を見る。急に火花が出たことについては、自分でも驚いているようであったが…シゲルは気にせず言い放つ。

「あれは…！」

「よし、早速証明できるチャンスだな！…それに、あんな派手な騒ぎ…同じ改造人間のいる可能性は、大だ！！」

「…よく分からないけど、俺も、あそこに知り合いがいそうな気がする…兎に角、破天荒な奴だから」

シンジはそう言うと、近くのゴミ捨て場に不法投棄されていた割れ鏡にカードデッキを構える。

すると、鏡の中にベルトのようなものが映し出され、それが鏡の中のシンジに装着されたかと思えば、現実世界のシンジにも装着される。

一方でシゲルも、変身ポーズを決めて、シンジと同時に叫ぶ。

「「変身！」」

~~~~~

士達が潜んでいた廃アパートは、映司率いるゴッドショッカー達に襲われていた。

工場での対峙から、既に8時間近くは経過している…

しかし、追っ手が来るにしても映司だけは予想外だった。てっきり、前の戦闘のダメージが響いているものだと思っていたから、尚更。襲撃を受けたのは、ピンポイントで士達が今居る部屋。100近いゴッドショッカーの兵だけでなく、映司も既にオーズ・ガタキリバコンボに変身している。

「くそっ、もうばれたのか！」

「体力的にも、火野は来る筈ないと思っていたんだが…」

「とにかくやるしかないだろう。…敵に囲まれている状況なら、尚更な…」

エイジはくつと舌打ちし、エイジスはユウスケ達の方を見ながらオーズドライバーとメダルを取り出す。

その際取り出したメダルは、青色…シャウタコンボだ。

しかし、それを見ていた海東は、「待ちたまえ」と言い放つ。

「100体のゴッドショッカー戦闘員に、ガタキリバの分身を含めたら、こちらが圧倒的に不利になる。…ここはガタキリバで押すことをお勧めするけどな」

「確かに、海東の言うとおりだ。お前でガタキリバ50体、残りが一人頭約16体相手にすれば充分の数だろ」

「……どうなっても知らないからな」

エイジスは暗い顔をしながらも、渋々とメダルを取り替える。

その様子を見て、エイジは疑問を抱く。

確かに、士達の言うとおり…相手がガタキリバで行くならこちらもガタキリバが打倒。

だがエイジスは、それをするのではなくまたシャウタで押そうとした…

気に入っている、というレベルではない。エイジスがそこそこ切れると言うことはエイジも理解しており、だからこそ疑問が尽きなかった。

…しかし、長い議論を待ってくれるほど相手は気が長くはない。

カメラズーカによる二発目の砲撃を受け、天井からザザ…と埃が落ちる。建物など、既に大きく揺れ動いている……後一発でも受けければ、倒壊するだろう。

「『変身!』」

『Kamen Ride DECADE!』

『Kamen Ride DI-END!』

士はディケイドに、ユウスケはクウガに、海東はディエンドに変身する。

更にカズヤも梅花の型の構えを取り、ヒロシ・エイジスもそれに合

わけて変身を行う。

一方のエイジは、自身の姿を恐竜グリードの姿へと変化させていた。

「変身！」

「スカイ…変身！」

「…変身ッ！」

『クワガタ！カマキリ！バッタ！…ガーツタガタガタキリッバ、ガタキリバ♪』

「——おおおおっ！」

三発目の砲撃が、アパートに直撃した。

老朽化が進んでいた廃アパートは、ガラガラと音を立てて崩れ去る…

だが、そこからディケイド達は飛び出し…ディケイドは抱えていた

夏海を地面に下ろすと、パンパンと手を叩いていた。

その視線の先には、ガタキリバコンボ。

夏海は近くの電柱に姿を隠し、ディケイドはガタキリバを指差して言い放つ。

「今すぐ目を覚まさせてやるぜ」

「…」

「さて、…俺達は他の奴らから片付けるぞ！」

そう言いながら、ディケイドはライドブッカーをソードモードに変化させ、戦闘員の一体を切り払う。

それに続く形で、クウガ・ディエンド・ギルが走り出す。

一方で映司の変身するガタキリバコンボが、特殊能力でもある分身能力で50体にその数を増やす。

エイジの変身するガタキリバコンボは、「くそっ」と恨めしそうにディエンドを睨むと、続けて50体に分裂する。

“ガタキリバVSガタキリバ”

傍から見れば、自分で自分を殴っていると思えない状況。

スパー1は前に一度、デイケイドの直接フォームライドでガタキリバを見ているが…あれは数の暴力もいいところだ。一人に対して使うなら、尚更。

そう思いながらも、向かってくるショッカー戦闘員に手刀を浴びせ、正拳突きを放つ。

だが…

「……………おおおお！」

「なっ！？」

ガタキリバが一体、エイジスのガタキリバから逃れた。

そして、そのままスパー1に襲いかかるうとするが、近くにいたスカイライダーが援護に入る。

軽く跳躍してのドロップキックを食らったガタキリバは、地面に着地して体勢を整えると、後からやってきた他の4体と共にスパー1とスカイライダーに襲い掛かる。

——おかしい

そう考えていたのは、デイケイドもだった。

数の差は、確かにまだ埋まりはしない…だがそれでも、こんなにも相手にしなくてはいけなくなるとは思わなかった。

原因は分かっている。

エイジスのガタキリバが、映司のガタキリバを…一…体…につ…き…五…体…で…抑…え…て…い…る…せ…い…だ…。

計算上では、1人1体抑えればそれで充分だったはず。

デイケイドは自分のところにも向かってきたガタキリバの攻撃を受け止めながら、叫ぶ。

「……………おいっ！どうした！？」

「く…やはりガタキリバじゃ、無理か…！」

エイジスのガタキリバ、否、シャウタ以外のコンボには大きな欠点があった。

…全体的に、火力が低いのだ。

そもそも彼の世界は、仮面ライダーのいない世界…仮面ライダーと交わる可能性が極めて低かったはずの、世界だった。

そのため、ライダーに変身するには一定の資格を持たなければならぬ。

その世界唯一の仮面ライダーとされる、氷の仮面ライダー“グレイリー”ですら、変身に必要なメモリと適合していない限り変身が不可能。

オーズに関しては、適合するコアメダルが人によって異なる。エイジスの場合、本来ならシャウタと後一つのコンボにしか適合していない。

それでも彼がオーズとして他のコンボに変身ができるのは、コアメダルを作った研究者が『制限をほぼ皆無にした』からだ…

制限が掛からない以上、誰でも変身できるし負担も軽いが…その反面、攻撃力が著しく低下してしまう。

しかしシャウタ自体も元々のスペックは全コンボ中低い方で、残りの適合コンボも攻撃力を代償に二つの能力に特化している。

——つまり、エイジスの変身するオーズは…映司やヒナより力で圧倒的に劣ると言うことだ。

その結果が、ガタキリバ1体を5体で抑えていると言う現状。

「成程…だったら、長期戦に持ち込めばこっちの勝ちは見える、か」

「そう上手くいくと思うなよ、映司…！」

「…チェンジ、エレキハンド……エレキ光線…！」

エイジスガタキリバに群がる映司ガタキリバを、スーパー1が攻撃する。

その際、近くにいたガタキリバの斬撃を受けてしまい、右腕のファイブハンドが損傷を受けてしまう…

しかし時間は充分に稼げた。
エイジスガタキリバは分身を解除し1体に戻ると、橙色のコアメダルを構えていた。

「ぐっ!？」

「…長期戦なら、俺のほうが勝つ!」

『コブラ!カメ!ワニ!…ブラカ!ワニッ』

ガタキリバが姿を変え、今度は、ディケイド達の見たことのない姿へとなっていた。

頭はコブラ。胴体はカメを模しており、腕には甲羅のようなものもついている。

そして、足はワニを髣髴とさせる…

オーズ・ブラカワニコンボ。

「なんだあれは」…そう思ったのは、ここにいるほぼ総ての者達だろう。

しかし、ブラカワニコンボはガタキリバ一体にワニレッグで鋭い蹴りを放つ。が、こちらも火力の低さかガタキリバはすぐに立ち上がる。

能力が未知数のコンボ…相手のペースに嵌る前にと、ガタキリバ達は総戦力で向かっていく。

流石にこれはディケイドも、まずいと感じていた。
だが

「…それだけか？」
「「「！」「」」」

50体がかりの攻撃を、総て受けきっていた。
それも、ノーガードで。

ガタキリバ達は尚もブラカワニに立ち向かい、電撃やカマキリソードで攻撃するも、ブラカワニには効果が薄い。

それ以前に、全くダメージがないように思える。

ギルはその姿に、自分の先祖でもあるクガ王を思い出す…確かあれも爬虫類のグリードで、橙色で、しかも守りが異常に堅い。

すると、自然とガタキリバ達のほうに疲労の色が見え始めてきた。

ブラカワニはガタキリバ一体の肩を掴むと、頭突きで攻撃しながら言い放つ。

「制限があるなりの強みは、あるんだよッ！」
「ぐ…！？」

そういえば、とディケイドは周囲を見る。

数の差はあるものの、ディケイド達の意外な粘りで、長期戦になっているのだろう…

次第に、敵も味方も疲労を隠せなくなってきた。

特にコンボの負担が大きい映司は相当のものだろう…昼間にブトテイラとなつて襲つてきたことを考えると、尚更だ。

しかし、その中でもブラカワニは自分のペースを保っている。

ギルはカメラバズーカの甲羅をパンチで砕きながら、「そうか」と言い放つ。

「…回復能力か！」

「ご名答。それだけじゃない…俺の変身するオーズは火力こそ低い
が、お前と違ってコンボの負担がない。シャウタは当然、ブラカワ

二に関しては……手前の戦いでの疲労すら回復する！」

エイジスのブラカワニは、攻撃よりも防御や回復に特化している。防御に関しては、あの猛攻をゴウラガードナーを使うまでもなく受けきったことから、かなりのもの……兵器でもない限り傷は付かないだろう。

回復についても、肉体的な傷だけでなく疲労すら回復し、更にその能力を利用して味方への治癒も可能だ。

ブラカワニはガタキリバを圧倒しながらも、スーパー１に接近し、片手で負傷した側のファイブハンドを押さえる。……すると、2秒ほどでその痛みは回復した。

「……凄い！」

「お前……人間じゃないのか？」

「あ、まあ、一応……」

「通りで回復が遅いと思った。……傷や傷みは治せるが、メンテナンス的なものは技術者に頼めよ。そっちは流石に専門外だ」

2秒でも相当だが。

スーパー１はそう思いつつも、試しにファイブハンドを切り替えようとすると

……が、ブラカワニの宣言通り、表面上の傷や傷みは治せても、機械部分の修復は不可能らしい。

現に、エレキハンドから切り替わらず……更に損傷した部分はエレキ光線すら出せない。

ディケイド達も、ガタキリバも、戦闘員達も……単純な短期戦或いは長期戦に持ち込めば、エイジスのオーズは打ち負けると思っていた。しかし、逆に長期戦に持ち込まれれば自然と勝つのは、傷や疲れすら回復できるエイジスのブラカワニであることを知り、敵は「厄介だ」と思い……味方は「敵じゃなくてよかった」と安堵する。

そうしていると…

後方から、派手に電撃が迸る。

「何があつた」と戦闘員の一人が叫ぶが、その直後、彼の胸は投げられた大槍状の剣・ウイングランサーによって貫かれてしまう。

ディケイドがその方向を見ると、そこに立っていたのは

——戦闘員達を片っ端から殴り飛ばすストロンガーと、飛び膝蹴りをクモ男に放つナイトの姿だった。

更にナイトはダークバイザーで敵を袈裟斬りにしつつ、ディケイドに声をかけていた。

「士！…相変わらず、お前の周りって騒がしくない日がないな！？」

「その声、……まさかシンジか！？龍騎のデッキは…」

「…ちよつと今、修理に出してる！」

そう言いながら、ショッカー戦闘員の胸に突き刺さったウイングランサーを抜きつつ、ナイトはそれとダークバイザーの二刀流を見せる。

攻撃は左に構えたウイングランサーで防ぎつつ、ダークバイザーの鋭い一突きを確実に決める…

ナイトといえば、トリッキー型のライダー。龍騎のように、力押し系のカードばかりと言うわけではないはず。

…力押しと言えば、一緒に現れたストロンガー。

三人目の改造人間と出会い、しかもそれが、ナイトと一緒に現れたディケイドはナイトと背中合わせに立ちながら、彼に尋ねていた。

「おい、あいつは何処で拾ってきた？」

「さつき。…驚いたよ、いきなり変身するもんだから……それに、

『あんたも改造人間なのか！？』って言われて」

「……お前は人として若干おかしいしな」

「ライ士、久々の再開で、人を改造人間扱いか？」

ナイトはそう言い放ちながら、デストロン戦闘員にハイキックを浴びせる。

あそこまでアグレッシブなナイトも、そうそういないな……

ディケイドはそう心の中で言いながらも、ライドブッカー・ガンモードで遠距離の敵を攻撃する。

一方でストロンガーは、バチバチと火花を散らしながら叫んでいた。

「へっ、まだるっこしい。全員纏めて……ぶっ飛ばしてやるぜえッ！」

「おい、ちょっと待て、お前……！」

「——エレクトロファイヤー！」

ストロンガーはアームを擦り合わせると、そこから電気を作り出し、導電体を通して固まった場所にいる敵目掛けて放つ。

下手をすれば味方すら巻き込みかねない、無茶苦茶な攻撃。

幸い当たりかけたスカイライダーを守るべく、ブラカワニがゴウラガードナーを使って防御してくれたからこそ、こちらへの被害はなかった。

しかしストロンガーは、軽く頭を下げて謝りながら、再度エレクトロファイヤーの体勢に入る。

「悪い！ご愛嬌って事で、流してくれ……！」

「そんなわけにいくか！おいっ……！」

「……もう一丁！」

ストロンガーに、ナイトの加勢。

流石にこれは計算外…

近くにいたサソリ奇怪人は、ガタキリバに向かって叫ぶ。

「くうつ…撤退だ！お前も下がれ！！」

「…ッ、ああ…」

「おいコラ！待ちやがれ」

ストロンガーが最後の一言を言い放つ前に、
…ゴッソ。

ディケイドの拳骨が、彼の頭に直撃していた。
ストロンガーは痛そうに頭を抑え、ディケイドはパンパンと手を払いながら変身を解除する…

スーパードーラー達も多少戸惑いながら、敵が撤退していくのを見て変身を解くが、それでも目の前の戦いは終わりそうになかった。

そう、……土と…ストロンガーの変身を解除したシゲルの口喧嘩は。

「…何しやがる！？」

「それはこっちのセリフだ。あれがエイジス以外に直撃していたら、どうなっていたと思うんだ」

「いや、だって、何処から何処までが味方が判断できなかったし…」

「ったく。こんなのがストロンガーか、先が思いやられるぜ」

「なんだと！？」

「何だ、やるって言うのか？」

まさに、一触即発の空気。

流石にこればかりは、と思っただカズヤとヒロシは仲裁に入ろうとした。

が、その前にシンジが二人の間に立つと、

「…ふんっ！」

「ぎやつ!?!」

士とシゲル、それぞれの鳩尾に一撃与えていた。

少なくとも本職：カメラマンの動きではない。…ある意味で、士もだが。

シゲルは殴られた部分を押さえてその場に座り込み、士も苦しそうな顔をしながら、意見しようとする。

しかし、シンジは鋭く彼を睨みつける。

「文句は言つな黙れ」

目がそう訴えている。更に背後には、牙を向ける巨大な毒蛇が居るように見えた。

軽く咳き込み、文句を飲み込むと、士は落ち着いて別の話をし始める。

「……まあいい、それよりも、どうやって此処に?」

「ソウジさんが送ってくれたんだ。ただ、ソウジさんは今…俺のデツキの件や、戦力確保のために他の世界を周ってくれている」

「そうか…無事で安心した。というより、戦闘・ライダー暦の長い奴らを差し置いてお前が生き残っていることに、多少の違和感と必然さが……」

「…今すぐゴッドショッカーに行ってもいいんだぞ?」

ゴゴゴ、と黒いオーラが誰の目にもはつきりと見える。

誰もがそれに震え、士に関しては必死で止めている。

ゴッドショッカーに行かれて困るだけではない、……このヤンデレを怒らせたらどうなるのか熟知しているからこそ、制止だった。その一方で…

エイジは派手に倒壊した廃アパートを見ながら、「ここにはもう居

られないな」と呟く。

そうになると、また新しい潜伏先を探す必要があるのだが……果たしてそんな場所が見つかるのかどうか。

それに、日も落ちて夜になろうとしている。

夜道は視界が悪く、更にショッカー戦闘員などの姿も視認しにくくなるのだ。

「……王環の言うとおり、この周辺にはもう居られないし……かといって、宛てもなく歩き回るのはもっと危険だな」

「どこかにいい場所があればいいんだが」

エイジスとエイジは腕を組みながら、どうすべきか考える。

そうしていると、シゲルが「なあなあ」と人懐っこくヒロシとカズヤに話しかける。

先程の戦いで、とりあえず士達は味方であると判断——ただし士だけに至っては、ソリが合わないとも判断してしまったようだ——したようだ。

「お前らも、俺と同じ改造人間だったりするのか？」

「……まあ……一応、そうですね。あ、俺はスカイライダーの……月島ヒロシ」

「俺は月島カズヤ。……S-1システムもとい、スーパー1だ」

「俺は紫電シゲル、朱空町立櫻蘭高校に通う高校三年……兼！ええつと何だっけ、あ、そうだ、……ストロンガーだ！」

改造人間としての名前を名乗ろうとしたシゲルだが、No.5103としか呼ばれていないことに気付く……

急遽、士の『ストロンガー』という呼称を採用。

番号で呼ばれるよりはそっちの方がカッコいい、と思ったのだろう。ストロンガー、という名前にヒロシは若干聞き覚えがあるように思

いつも、シゲルに笑顔で手を出していた。

一方のシゲルも、相手が感電しないように慌てて手袋をつけながら、その手を握っていた。

「とにかく、宜しくお願いします」

「ああ！…それにしても、ゴッドシヨッカーから逃げ出せた同年代の改造人間は俺とユリコの奴しかいないと思ってたが…なんか心強いぜ！！」

「……………」

同年代、と呼ばれた瞬間…ヒロシの笑顔が若干凍りついた。それはそうだ。

遺体は冷凍保存され、しかもそれを使ってゴッドシヨッカーは彼をスカイライダーにした…

見た目は確かに17歳の頃のヒロシそのものだが、生きていればその年齢は、カズヤと同じ20歳。

…同年代に扱われて、複雑に思うのも無理はないだろう。カズヤもそれについての説明をしようとしたが、その前にシゲルが会話を続けてきた為、言えずにいた。

「あ、あのな、ヒロシは…」

「そうだ。隠れる場所が欲しいんだろ？それだったら、いい場所があるんだ」

「…ヒロシは…」

「待て。お前はここの出身じゃないんだろ？なら、この辺りに隠れる場所を知っているはずがない……まさかゴッドシヨッカーの手先か？」

更には土によって、会話に割って入られる始末。

シゲルは尚も土と敵対していたが、シンジの睨みが効いて火花散る争いは勃発せずに済んだ。

しかし、確かにカズヤやヒロシとしても、隣町の人間がこの星ノ宮町で隠れられる場所を知っているとは考えづらかった…

昔からこの町に住んでいる人間…例えばケイスケだったら、納得はいくのだが。

だがシゲルは、「大丈夫」の一点張りで、しかもヒロシの肩を組んで勝手に歩き出す始末。

「大丈夫だつて！…この町にすげー詳しい奴が、教えてくれたんだ。そこには、何とかゴッドショッカーから逃げ延びた奴らも一緒に置いているし」

「うわわわわわ」

「ヒロシ！…こら、分かった、行くから！行くからヒロシを解放しろつて！！」

わあわあと騒がしくその場所に向かう、改造人間三人。

そんな彼らを見ながら、ユウスケは「どうする？」と土に尋ねる…これが罠ならばかなり危ないだろうが、行く宛てもない以上、不本意ではあつたがシゲルを信じるしかない

……正確には、シゲルの言う“この町にすげー詳しい奴”を信じる他なかった。

T o B e C o u n t e d …

「次回予告」

「ああ、ちゃんと生きてるぜ」

「そこで！…ゴッドショッカーに対抗する組織を作るんだよ！…」

「僕は、あくまでも可能性の話をしたまでさ」

Episode 12：疑心暗鬼

Episode 11：疾風轟雷（後書き）

ガタキリバ、ごめん。

シンジさんは何処でもカメラを持ち歩く根性のある人。
ある意味凄いです、その仕事根性。

ソウジさんは孤立無援でもきつと大丈夫な人。

…シンジも、多分大丈夫な妖怪。

シゲルはとりあえず大丈夫。馬鹿だから。

なんとも一方的な、ガタキリバVSガタキリバ。

必要なことは地の文が総て解説しましたが、エイジスのオーズは火力の低さが難点。

唯一火力面での低下がない上に、タコレッグが強化されているシャウタも、コンボ中では驚きの低スペック。

…エイジスが使うとそうは見えないぞ…

兄弟のほうは、メンタルが低スペックだけどそれ以外は強いぞ…主に家の支え的な意味で。

今度は、建物の破壊者ディケイド（ただし壊したのはカメバズーカ）
w

夏海…電柱はフラグに近いぞ…破壊の。

スカイライダーが空を飛べない上に、スーパー1はファイブハンド切り替え不可能という最悪の事態に。

早く、誰か技術者を。

そしてエイジスのブラカワニのチート加減にツツコミを！↑

そして、カメバズーカの甲羅の破壊者…王環エイジ。

もうこの人凄まじい怪力要因。

…そして、それすら越える混沌ナイトキターッ！

しかも飛び膝蹴りに、分岐で城戸にやらせようと考えていたウイングランサー串刺しを引っさげてのご登場…あんた何者だよシンジさん。

ストロンガーはとにかく馬鹿です。

シンジは嫌な意味で安定しているなあ…！

シゲルも人懐っこい馬鹿です。

でも、基本的には悪い奴ではないんですよ…馬鹿なだけで。

…でも流石に、ヒロシとカズヤの件は仕方がないと思うんだ…！

誰だってカズヤを兄と見間違っよう、そりゃあ。

そのギャップを狙ってやっているんですけどね↑

次回、既にネタバレw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3855x/>

仮面ライダーディケイド Re:imagination War

2011年11月18日22時35分発行